
リアルドリーム

ある日のあひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルドリーム

【Nコード】

N3178S

【作者名】

ある日のおひる

【あらすじ】

高校1年生の野田健吾は、学校に向かう途中に車に撥ねられてれてしまう。そして気が付くと、夜？の学校の校庭に居る健吾。そこで、いきなり、ミノタウロスに襲われてしまう、果たして健吾は、これからどうなってしまうのか！？

異世界、能力、怪物、バトル、常識では考えられない事が次々健吾を襲う！！

第1話 始まりは、唐突に（前書き）

はじめまして、あひると言います自分の処女作品です。

第1話 始まりは、唐突に

牛話編

「ここは・・・どこだ？」

夜？の校庭で寝ていた学ランを着た男子が起きた。

周りを良く見渡す男子

「なんだ、僕の通っている高校じゃないか、あれ、夜？何でこんなところで寝ているだ？」

この男子の名前は野田 健吾（のだ けんご）この高校に通う1年生だ、なぜ、こんな事になっているのか、少し時間を戻ってみよう。

「ジリジリ」「ジリジリ」

「カチャン」

健吾はいつも通り目覚まし時計を止めて、7時に目を覚ました。

健吾は、学校から数キロ離れた所にあるワンルームのアパートに住んでいる。母親は、小さい頃に病死して、父親は、出張の多い仕事をしている為、両親の地元はこの町で、一人暮らしをしている。

健吾は、テレビを見ながら食パンを二枚出してマーガリンを付け食べている

キャスター「次のニュースです、昨晚。。。市。。。町で家屋の倒壊があり二人が重傷一人が軽い怪我を・・・」

健吾「また、この町で家屋の倒壊か・・・」

健吾の住んでいる町では、最近家屋倒壊や道路の損失が起きていて、最近ではマスコミが騒ぐようになっていいる。

健吾は洗顔などの朝の日課をすまし、学ランを着て、自転車で学校

へ向かう。

健吾「はあ〜」

健吾は溜め息を漏らしながら自転車を漕ぐ。高校に入学して2週間がたつが健吾はいつも休み時間には、本を読んだり、音楽を聞いている。人とあまり関わらない生活を送っている。

その方が自分にとって楽だと思っている反面、人と関わるのが苦手だからだ。そんな生活を中学から続けているが、最近本人も

健吾「僕の学生生活これでいいのかな」

と、自分でも少し心配していた。そんなことを言いながら健吾は、交差点で信号待ちをしていた、そして、信号が青になり、自転車を漕ぎ出した瞬間、車の「キーン」というブレーキ音の次に「どおん」という鈍い音が辺りに響く、そこで、健吾の記憶が切れていた。

冒頭に戻ります。

第1話 始まりは、唐突に（後書き）

次の回には、新キャラ三人出てきます。そして、バトルです。どうかよろしくお願いします。

第2話 学校は、時として戦場にもなる（前書き）

どうもです。今回からバトルが入ります。温かい目で見守ってください

第2話 学校は、時として戦場にもなる

健吾「あっそうだ僕、車にひかれたんだ．．．」

「．．．．．」

健吾は、周りを見渡す

「どこも電気が付いていない．．．なんでこんなにハッキリ見えるんだろう？」

「．．．．」考える健吾

健吾「ここ．．．天国？」

女子1「バツカじゃないの、こんな薄気味悪い天国が在ってたまるもんですか！」

健吾の後ろから声が聞こえてきた

男子「同感だな、どつちらかというと地獄だよな」

女子2「どちらも違う．．．」

健吾が振り向くとそこには、自分と同じの高校の制服を着た3人が立っていた

立ち上がり健吾が尋ねる

健吾「あの〜どちら様でしょうか」

3人「．．．．」

女子1「あんた喧嘩売ってんの？」

もの凄く怖い笑顔で、健吾の胸ぐらを掴みながら言う女子

健吾「ひいひい〜すいません、すいません」

男子「おい、凜、離してやれよ、怯えてるぞ、そいつ」

凜「うるさいわね、拓也は、分かったわよ離せばいいんでしょ、離せば！」

手を離す凜

「どすん！」

尻もちを着く健吾

健吾「痛ててててて」

女子2「大丈夫？野田君」

小柄な女の子が右手を差し出す

凜「いいのよ、優そんなの」

健吾「あれ、なんで僕の名前を？」

拓也「まだ分からないのか、いい加減2週間も経つんだからクラスメートの顔くらい覚えておくもんだ」

健吾「あっ．．．」

健吾の心の声「そうだよく見ればこの人達は僕のクラスメートだ」

ここで少しキャラ紹介

スタイルがよくて美人の	相川 凜	あいかわ りん
長身でイケメンな	桜井 拓也	さくらい たくや
小柄でおとなしいそうな	泉 優	いずみ ゆう

キャラ紹介終了（あとの外見イメージはお任せします）

健吾「すいません、少し混乱してて、えーと、相川さん、桜井君、泉さんですよね」

凜「なんだ、ちゃんと覚えているじゃない」

機嫌を直したみたいに凜は言う。どうやら凜は、自分は覚えているのに健吾が忘れていると思ひ腹が立っていたらしい

拓也「まあ死にかけてすぐだから仕方ないさ」

健吾「えっと、死にかけてて事は僕は死んでないですが、確か車に跳ねられたはずなのこんな所で寝ていたんですけど．．．」

優「大丈夫。ここに居て意識がはつきりしていることは体は死んでいない」

健吾「言っている意味がよく分かりませんが．．．」

優「つまり．．．」

拓也「来るぞ！」

「ドカーン」

拓也が声を上げた瞬間校舎の方で何かが壊れる音がした

4人は一斉にその方向を見る

健吾の心の声「突然ですが皆さんに問題です。首から下が人間で首から上が牛な生き物で、なぐんだ

正解は、ミノタウロスと言う神話上の怪物です。僕がなぜ急にこんな事を言い出したかと言うと答えは、簡単です！目の前に居るんだよ！そいつが」

「目測3メートル以上はある。手にはこん棒を持っている。そしてこっちに向かって歩いて来る」

凜「すごい不細工な顔ね、気持ち悪い」

拓也「逆に可愛い方がやりづらいだろ」

優「確かに」

ミノタウロス「ぎえええええー」

健吾の心の声「なんでこの3人は、こんなに、ポーカーフェイスなのこの状況で！」

「落ち着け、健吾、平常心だ、良く考えろ」

「あつ、そうだ分かったぞこれは夢だそうに違いなそうでないと思う」

自分のほつぺたに手をやる健吾

健吾「痛てててて」

優「何をしているの？」

健吾「ちよつと確認を」

優「？」

健吾の心の声「そうか、夢では、無いのか・・・」

「わかったアレだ、日曜の朝やっている戦隊モノの撮影だ。きつとそうだ、絶対そうだそうじゃないと困る！」

「ほらあ、周りを見渡せば、カメラマンさんや照明さん、ディレクターやエキストラ、プロデューサーの皆が・・・いつ居ない」

などと考えている内にミノタウロスは健吾の目の前に

健吾「○ ■○○」言葉にならない

ミノタウロスは健吾目がけこん棒を振りおろす

健吾の心の声

「あつ死んだ・・・」

優が健吾の前に現れ右手を上げ呟く

優「シールド展開・・・」

「ガシャーン」

おそろおそろ目を開ける健吾そこには、手からシールドを発して自分を守っている優の姿があった

健吾「い．．泉さん？」

優「大丈夫．．そこに居て」

拓也「ナイス、泉、おらああああ」

叫びながら拓也の回し蹴りがミノタウロスの顔に直撃する

「ドォーン」5メートルほど吹き飛ぶミノタウロス

ミノタウロス「ぎええええええええええ」

着地する拓也には、さっきまでは、なにも無かった右腕に黒い鎧のようなものがついている

凜「優そいつはまかせたわ」

優はうなづく

凜はミノタウロスの方へ走っている

凜「はあっ」

凜がそう言うのと右てが光ったと思えばそこに薙刀が現れた、「カチヤ」それを手に取ると薙刀でミノタウロスの腹を切りつける。「ブシュツ」緑色の血が辺りに飛び散る。そして返り血を浴び少し距離をとる凜

凜「汚ーい」

と言いながら制服で顔を拭く

拓也が走りながら

拓也「油断するな凜、前だ！」

凜「えっ？」

ミノタウロスのこん棒が凜の頭を狙う「ブシュ、グチャ」嫌な音が
辺りに響く、間一髪のところでは拓也が凜を抱え、よけようとしたが
間に合わず左手で凜を庇い左腕が飛んでいた。飛んで行った左腕は
健吾の足元に転がる「ゴロゴロゴロ・・・」

健吾「うわあああああ」
それを見て倒れこむ健吾「どさっ」

健吾「うえええ」

健吾は吐きそうになったが何も出なかった

少し経つとその腕は光の粒になって消えていった

健吾「何がどうなっているんだ」

凜「だいじょぶ、よね？」

拓也に向かって心配そうに、凜が聞く

拓也「ああ、これくらいなら問題ない」

少しひきつった顔で拓也が言った

拓也「それよりも時間は大丈夫か？」

凜「自分で見なさいよ、え〜とあと7分位あるわ」

拓也「そうか・・・俺が行くから凜と、泉は援護してくれ」

凜「たく、わかったわよ」

優はうなずく

拓也「フン」

拓也が力を入れると左腕のあった部分に光が集まり左腕が元に戻っ
ていく

拓也「ふう・・・行くか！」

ミノタウロスに向かって走っていく拓也

拓也「うおおおお」

優は両腕を体の前に出すと手のひらがひかりそこから、かめ〇め波
のようなものが出て、ミノタウロスめがけ飛んでいく。「ズドーン」

「ズドーン」2発ともミノタウロスに命中する

「ぎえええええー」

怯んだ隙に拓也が懷に飛び込むが、こん棒が襲いかろうとする。す

ると横から直径１メートルはある石がこん棒を跳ね飛ばす「どかん」

「カラン、カラン」ミノタウロスの手からこん棒が離れた

凜「今よ！」

拓也か黒い右腕をミノタウロスの顔面に向けて放つ

拓也「くたばりやがれー」

拓也の右腕はミノタウロスの目玉を貫き頭を貫通していた。「ずば

っ」手を引き抜く拓也

「どさ」倒れたミノタウロスはさっきの拓也の左腕と同じように光の粒になつて消えていった

健吾の心の声

「・・・・・・・・・・・・・・・・ついていけない・・・・・・・・・・」

第2話 学校は、時として戦場にもなる（後書き）

どうだったでしょうか、まだ謎がいっぱいありますが 主人公何もしていませんね（笑）これから活躍することを願います
アドバイス感想をお待ちしております。
よろしくお願いします

第3話 ここは、どこだろう（前書き）

初心者ですが、精一杯がんばりますのでよろしくお願いします

第3話 ここは、どこだろう

健吾の心の声「．．．．．ついていけない．．．」

拓也「はあはあはあ、今回は何とか時間以内に倒せたな．．．」

凜「そうね、二日連続なんて初めてだったのよく倒せたわね」

優「疲れた．．．」

健吾をお構い無しに話を進める3人

凜「とりえず、今日は帰りましようよ」

拓也「そうだな、とりえず帰ってゆっくり休もう」「俺はまだ家だから今日学校は休む！」

凜「私も家に居るから学校休むわ、優は？」

優「私は、今、教室に居るから．．．．．」

凜「相変わらず、登校が早いわね」

健吾が話に割って入る

健吾「あのー僕はどしたら良いんですか？」戸惑いながら尋ねる

拓也「いろいろ聞きたい事があるだろうけど、俺たちみんなへとへとだから説明はまた今度な」

「今日はとりあえず帰っとけ」

健吾「帰り方が解らないんですけど」

拓也「泉、そいつ頼む、俺、先に帰るわ」

優「分かった」

拓也はそ言つと光の粒になつて消えていった

凜「私も帰るね、またね、優」

凜も拓也と同じように消えていった

健吾は、もう驚きもしていない

優は健吾の両手を掴む

健吾「えっ」

女子に対しての免疫が無い健吾の顔は、少し赤くなっていた

優「目を瞑って帰りたいと願えばそれでいい……」
健吾は言われた通り目をつぶり願ったすると……

健吾は、目を開ける

健吾の心の声「見たことのない天井だ、ここはどこだ」

男の声「目が覚めたか……心配したぞ、たく」

「むくっ」

起き上がり横を向くとそこには父さんがいた……

健吾「あれっ、父さん、主張で東京に行っていたんじゃないか」

健吾父親「お前が車に跳ねられたって言うから心配して来たんじゃないか」

周りを見るとここは、病院の病室だと気が付いた、掛け時計を見ると午後5時を回っていた

健吾「そうか、僕はやっぱり車に跳ねられたのか……」

健吾父親「ああ、でもお前は運が良かったぞ。頭を強く打つたらしいが何処にも異常はないらしい、あと軽い打ち身だけで済んだんだ」
「今日は大事をとって入院するが明日は退院できるらしい」

この後、健吾は、久しぶりに父さんと面会時間ギリギリまで会話をしていた。

健吾父親「会社には1週間ほど有休を使って休みを取ってあるから、俺は実家の方に居る、お前も明日退院したら迎えに行くから実家に来い」

健吾「父さん、今日はありがとう」

健吾父親「別にいい……」そう言う父さんは病室から出て行った

ここでいう実家というのは元々親子3人で暮らしていた時の一戸建ての家のことだ、その家は一人暮らしでは大きすぎるので健吾は、今は、アパート暮らしをしている

一人になった健吾は、今日の出来事について考えていた

健吾「あれは、現実だったのかな？」

あまりにリアルだった体験を夢だったと簡単にすまして良いのか戸惑っている健吾

健吾「まあ、どっちにしろ今、考えたって僕には分からない、今度、学校に行った時に聞けばいいやあの3人に・・・」

そう答えを出した健吾だったが、その日の夜はとても寝ずらい夜になった。

第3話 ここは、どこだろう（後書き）

まだ、分からないことだらけですね。

次回は少し謎が分かるかもしれませんので、よろしくお願いします
アドバイスや感想をお待ちしております。

第4話 過度な期待は、爪痕を残す（前書き）

読んでくださってありがとうございます

第4話 過度な期待は、爪痕を残す

健吾は、次の日に退院し、実家に帰り、その翌日に学校行くことにした

玄関で親子が話している。

健吾父親「本当に行くのか、まだ休んでてもいいんだぞ?」

健吾は靴を履きながら言った

健吾「もう、大丈夫だよ父さん、それに学校に行きたい気分なんだ」

健吾父親「そうか、じゃあ、気おつけるよ」

健吾「うん、行ってくる」

「パタン」健吾は玄関を閉め、学校へ向かった

一昨日の事故で自転車が大破してしまい歩いて登校しているが、この実家は、アパートよりも学校に近いので十五分ほどで学校に着くその間、健吾は、どうやって一昨日の話をあの三人にするかを考えていた

健吾の心の声「さて、どう話を切り出そう?他人に聞かれちゃまずいよな... かつと言って呼び出すのみな」

コミュニケーション能力の低い健吾は、頭を抱えていた

考えている内に学校に着き、下駄箱を開ける健吾「パタン」

そこには、手紙が入っていた!」

それを見た健吾はいったんフタを閉める「パタン」

健吾の心の声「落ち着け健吾、クールに事態を把握しろ...」

「...」「ら、ラブ(訂正)ラヴレター?」

「いや、きつと誰かのイタズラだ、そうに違いはない、けど... そうですねいで欲しい」

健吾は手紙をポケットに入れると一番近いトイレの個室に入って行った

「ドクン。ドクン」心臓の音

手紙を開けるとそこには!

手紙の内容

今日の放課後、四時半に校門に来てください。

泉 優

健吾「……………」

「あっそう言うことかそうだな……僕のトキメキがあああゝ」

情けない気持ちと羞恥心で、いっぱいになった健吾であった

それから1時間目から6時間目まで何事もなく過ぎたが、たまに、あの3人の視線を健吾は感じていたが、気付かないふりをしていた。

そして四時半、健吾が校門に行くと、一生忘れることは無いだろう3人がいた……

第4話 過度な期待は、爪痕を残す（後書き）

たぶん、下駄箱にラブレターが入っていたら、90パーセントの確率で同じ行動をすると思います（笑）

第5話 女の張り手は、心に響く（前書き）

何だかんだで5話までできましたが
完結するにはいつになることやら・・・
でもがんばります

第5話 女の張り手は、心に響く

犬話編

拓也「よう、怪我は大したこと無いみたいだな」

自転車持ちながら拓也は言った

健吾「ええ、まあ」

凜「早く、行きましょう」

凜も自転車を持つている

健吾「行くって何処にですか」

優「私の家・・・」

そう言つと優は歩きだし、二人は自転車を押しながら歩きだした。

健吾も後ろに着いていく

健吾「一応確認したいですけど、一昨日の出来事は現実だったですよね？」

凜「そうよ、当たり前じゃない」

健吾心の声「アレが当たり前なんだ・・・」

拓也「細かい話は、泉の家に着いたら説明してやるよ」

健吾「わ、分かりました」

それから5分位歩くと大きなマンションが見えてきた

入口で優がカードの認証をする。上には、防犯カメラが付いている
どうやらセキュリティの高いマンションのようだ

4人は、エレベータに乗り七階で降りた、優を先頭にして歩いていく。

703号室の前で止まり鍵を開ける「カチャ」

優「どうぞ・・・」

拓也「じゃまするぞ」

凜「おじゃましてーす」

健吾「お、お邪魔します」

健吾達は、リビングに入っていく。リビングはシンプルで綺麗だったが、以外にもキャラクターのぬいぐるみが置いてある

健吾心の声「意外だな、ぬいぐるみなんか置いてあるなんて」

優「じゃ、準備をしてくるから、少し待ってて・・・」

凜「私も手伝うわ」

そう言くと二人は隣の部屋に入って行った

健吾「これから何をするんですか？」

少し不安そうに健吾が聞く

拓也「知りたいだろ、向こうの世界のこと」

健吾「ええ、まあ・・・」

拓也「もう一度行くだよ、向こうの世界に」

拓也は軽く笑いながら言う

健吾「え！どういうことですかそれって」

拓也「今、説明しても、信じられないだろうから、とりあえず行つてからだ」

戸を開ける優

優「準備、出来た・・・」

拓也「分かった、じゃあ、行くぞ」

拓也と健吾は、隣の部屋へ入っていく。

そこには何と！・・・・・・

畳の部屋に四つの布団が並んでいた

健吾の心の声「これは、どういう状況なんだ・・・僕は、4人居て、部屋に入るとそこには四つの布団、この状況から導かれる答えは・・・もしかして！向こうの世界でこういう意味だったのか！？」

僕は、まだ15歳だ、そりゃ僕だって健全な男子高校生だし興味はあるが、これはいきなりレベルが上がりすぎだろ！？男として僕はどつという答え出せばいいんだ」

「野田く．．」

優「野田君」

優「どうしたの急に黙り込んで．．」

「ハアっ」我に帰る健吾

健吾「ぼ、僕たちには早すぎるよ！、知りあって間もないのこんな．．」

拓也「お、お前なにかえらい勘違いしてるだろ．．．」

凜「あんた、一体何考えてるのよ」

凜が顔を赤くしながら言う

拓也「たく、何勘違いしてんだか、今から行き方を教えてやるから、そこに寝ろ」

拓也が一番左端の布団をゆび指しながら言う

健吾「い、イキかた？（下のネタ表現で）」

「パチン！！」凜の平手が健吾の左頬に炸裂する

拓也「目は覚めたか？」

健吾「は、はい。大丈夫です（泣）」

拓也「まず、仰向けに寝ろ」

言われたとおり仰向けに寝る健吾

拓也「そして目を閉じて、一昨日の世界を思い出し行きたいと強く心の中で念じるんだ」

言われたとおりに念じる健吾

健吾の心の声「いきたい。 行きたい。 行きたい！」

体が浮かぶような感覚が起こり、目を開けると、あの世界が広がっていた

第5話 女の張り手は、心に響く（後書き）

この主人公は、結構バカです
ね書いてて気が付きました（笑）
アドバイス

感想 お待ちしております

第6話 人生は、選択の連続（前書き）

今回は、少し、この世界の設定が入るので、分かりにくいこともあ
ると思いますが、よろしく願います
アドバイス 感想 お待ちしております

第6話 人生は、選択の連続

健吾は、目を開けると、そこは自分の高校の校庭に居た。一昨日は、夜だと思っただが、そうでは無いことに健吾は気づいた。まるで、全ての色を暗くしたような、そんな感じの世界だった。

そしてその数秒後、健吾の目の前に光の粒が人の形に集まってい、そして、光粒はあの三人になった

拓也「やっぱりここに居たか、行く先を指定しなかったから、少し探したよ」

拓也は少し笑いながら言った

拓也「さてと、それじゃあ、説明を始めるが、俺たちもこの世界について全て知っているわけでも無いし、誰かに教えられた訳でもない、今から話すことは、俺達が今まで体験したことを元に考えたことだ、それでも良いか？」

健吾「はい、話して下さい」

拓也「よし！じゃあ、まず、この世界についてだ、俺達はこの世界のことを、幻の世界、げんかい幻界と呼んでいる。ちなみに、これから言う言葉のネーミングは、ほとんどが泉だ」

優の方を見る健吾。優は、少し照れた顔をしている

拓也「俺達の本当の体は、今、泉の部屋で寝ているんだ。ここに居る俺達は、恐らく、魂や精神か何かがこの世界に来て、自分の形に具現化しているじゃないかと、俺達は、考えている」

健吾「この世界はどこまで広がっているんですか？」

優「恐らく、現実世界と同じだけ広がっていると、私達は考えているわ」

拓也「次に、俺達がどうしてこの世界に来たかどうかだ、この世界に来た俺達の共通の条件は、命の危機に瀕した時に気が付いたらここに居たということだ」

拓也「最初にここに来たのは約二カ月前、俺と凜が一緒に来た。そ

してその数日後泉がここに来た」

健吾「えーとちょっと待って下さい一緒に来たってどういうことですか」

凜「一緒に死にかけたのよ、拓也とは幼稚園からの腐れ縁で、下校途中に車と一緒にひき逃げされたの、犯人はまだ捕まってないのよ」

健吾「そ、そうなんですか」「・・・」

少し黙る健吾、そして申し訳なさそう優に聞く

健吾「聞きづらいですけど、泉さんはなんで、命の危機に？」

優「私は学校から家に帰る途中に後ろから刺されたの・・・犯人は、捕まってない・・・」

少し震えた声で優は言った

健吾「ごめん・・・変なの事聞いて」

優「野田君は悪くない」

「・・・」

四人は、少し沈黙する

拓也「話を戻そう。そしてこの世界には、不定期にあるものが現れる、それは、バク、だ」

凜「あんたも一昨日見たでしょあの怪物あれがバクよ私達はそう呼んでいるの」

健吾「バク？ バクってあれですよ、確か人の夢を食べるとかいう空想上の生き物の・・・」

優「そう。私が名前を付けた」

拓也「バクはいつも決まった姿をしていない。一昨日はミノタウロスの姿をしていたがその前の日のバクはドラゴンの姿をしていた。」

凜「あと、この世界で1時間過ぎれば、現実世界でも1時間たつわよ」

拓也「そして俺達はバクを制限時間以内に倒さなければいけない」

「時間以内に倒さなければ現実世界の干渉が始まってしまうんだ」

健吾「ちよつと難しいですね」

拓也「そうだな、制限時間は、毎回異なるんだが、例えば、制限時

間が10分だとすると1分後にこの世界で壊れた物が制限時間が切れた1分後に現実世界でも壊れてしまうんだ、5分後に壊れた物は時間が切れた5分後、こんな具合にな、そして制限時間が過ぎて10分が経つとタイムラグが無くなってリアルタイムで向こうも壊れてしまうんだ。」

拓也「バクが現れなければ、今ここでモノを壊してもすぐに再生される」

優「つまりこう言うこと」

優がグラウンドにあつるベンチの方に手を向ける。そうすると手のひらが光そこからエネルギー弾がベンチ目がけ飛んでいく「ズドーン」ベンチは大破、周りの地面はえぐれている

健吾「……………」

健吾が呆然としていると、ベンチのあつた場所がひかり、地面とベンチが元に戻った

優「恐らくこの世界ではこれが正常な反応だけでも、バクが現れるとこの世界が歪み、その影響で壊れた物が元に戻らなくなると私は考えている」

拓也「ここまでで質問あるか」

健吾「いっぱいあるんで少し待って下さい。え」と

健吾「まず、あなた達が持っているその能力は一体何なんですか？」

凛「ここは、現実の世界じゃないから別に何が起ころうとも不思議じゃないのよ、ここじゃ物理の法則なんて当てにならないわよ」

拓也「ここに来た、俺たちには現実世界では考えられないような能力が使えるんだ。それも一人一人違う能力が、」

拓也「例えば、俺の場合は右腕に鎧が出てパワーが格段に上がる。

凛は、薙刀を出せて、物体浮遊も出来る。泉は、シールドとエネルギー弾が出せる」「あと、基本的な身体能力も格段に上がる」

健吾「へえ、便利ですね」

拓也「無限に出せる訳じゃ無い、俺たちが持っている力、俺達が夢むり

力と呼んでいるものが尽きれば能力は使えないし、死ぬからな、あと、この世界で死ねば現実世界でもし死ぬからな、それと、夢力の回復には、ほとんど使い切ると完全にもどるには三日はかかる」

健吾は顔が引きつる

優「でもこの世界の私達は、急所が破壊されるか体が真つ二つにでもならない限り夢力があれば再生できる」

健吾「急所と言うと、どこですか？」

凜「頭と心臓よそこをやられなければ、大丈夫」

健吾「何故、そんな事が分かるんですか」

優「分からない、でも分かるの……」

健吾「バクが来たり、時間制限の時間というのはどうやって知っているんですか」

優「現実世界に居てもバクが来る瞬間は、私達は感覚で分かるの、時間もそう、時間のことを考えれば何故か分かってしまうの、まるで誰かに教えられたように……」

少し考え込む健吾

健吾「もしかして、最近この町で起こっている家屋の倒壊などって……」

凜「そう、私達が制限時間以内にバクを倒せなかったからよ」

拓也「俺達が教えられるのはこれくらいだ。」

そして、拓也は聞く

拓也「なあ野田。俺達と一緒に戦うか？……」

下を向いて黙り込む健吾

凜「どつちなのハッキリしなさいよ！」

拓也「止せ、凜……どうする野田？」

健吾「……ぼ、僕は……」

次回に続く

第6話 人生は、選択の連続（後書き）

読んでくださってありがとうございます
アドバイス 感想 お待ちしております

第7話 正しい答えは、誰にも分からない（前書き）

どうもです

読んで下さりありがとうございます

感想 アドバイス お待ちしております

第7話 正しい答えは、誰にも分からない

健吾「ぼつ僕には．．．出来ません．．．怖いし、世界の為に戦うなんて、そんなこと僕には」

凜「ちよつと、あんた！」

拓也「やめろ、凜」「そうか、お前が決めたのなら、それで良い．．．」「じゃあ、帰っていいぞ、変なことに付きあつて貰つて悪かったな．．．」

優「帰り方は、こないだと同じ．．．帰ったら勝手に帰つて大丈夫だから」

寂しげな表情で言う優

健吾「ごめん．．．」

健吾はそう言うと言をつぶり、帰りたいと願つた」

「パチっ」健吾は目を開けると、そこには布団に寝ている3人がいた。健吾は黙つてマンションを出て行く、そして、少し歩き、マンションを見上げながら、静かに呟いた

健吾「仕方ないよね．．．僕には無理だよ．．．」

そう言つて健吾は、重い足取りで実家に帰つていった

幻界の3人

凜「ちよつと拓也、あれでよかったの!？」

拓也「戦う、戦わないは、本人の意思だ、俺達がとやかく言う事じゃない」

凜「それは、そうかも知れないけど、最近、バクも強くなつてきてるみたいだし、戦力的にもつと」

拓也「だいじよぶだよ、俺が居るから」

凜「たくつ、どこの主人公よ、一昨日少し私を助けたからって、調子にのちやつて」

少し赤くなりながら凜は言う

優「仲がいいね、二人は」

軽く笑いながら言う優

凜「べ、別に仲なんて、そんな良くないわよ何言っのよ優は、」
さっきよりも顔が赤い凜。

凜「もう、今日は帰りましょう」

そう言う凜は、光の粒になつて消えていく

拓也「おい、ちょっと、待てよ！」

拓也と優も凜を追って消えていった

第7話 正しい答えは、誰にも分からない（後書き）

どうだったでしょうか。今だ主人公良いところがありません。だいじょうぶかな？

感想、アドバイス お待ちしております

第8話 子供のころの夢は、大概叶わないモノ（前書き）

読んでくださり、ありがとうございます

第8話 子供のころの夢は、大概叶わないモノ

幻界の話を読んだあと、実家に帰った健吾は、帰ってくるなり、自分の部屋に閉じこもってベットに転がっていた

健吾「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「何もしてないと変なこと考えちゃうな・・・せつかく実家に帰って来たんだ、部屋の整理でもするかな、」

健吾は押入れから段ボールを三つほど出し、要るものと要らないものを箱に分けてつていった

健吾「これは要る、これは要らない」

整理をしていると古い紙のような物が出てきた

健吾「何だこれ？」

健吾は紙の表面に書いてある汚い文字を読む

健吾「しょうらいのゆめ・・・将来の夢？」

「ああ、これは、幼稚園と時に書いた将来の夢か・・・」

「僕は何て書いたんだっけ？」

紙を開く健吾

「なになに」

「ぼくのしょうらいのゆめ」

「ぼくのしょうらいのゆめは、わるいときから、おかあさんやおとうさん、ともだちをまもれるような、つよいひとになりたいです」

さくらぐみのだ けんご

健吾「・・・・・・・・」

「何書いてんだ僕．．．．」このタイミングで出てこないでくれよ．．．．．」

健吾はそれを手に取り、静かに、要る方の箱に入れた

幻界の話をされて、五日が過ぎた、あれ以来３人は、僕に何も言っではこなかったので、今まで通り健吾は一人で過ごしていた。本当に何も無い日常あの出来事がまるで嘘だったように何も無い

健吾は授業中、あの世界の事を思い出していた

健吾の心の声「そう言えば、あんなに人と話したのも久しぶりだったけ？」

「良い人達だったな．．．」

その日の放課後、健吾は、スーパーに寄って買い物をして、実家では無くアパートへ向かった。明日父親が東京に帰るので、明日から使う食材を冷蔵庫にしまいに行ったのだ

そしてアパートに着き冷蔵庫にしまい終わり帰ろうとした時、妙な感覚が健吾を襲った「ゾクッ」

健吾は直観で分かった

健吾「バクが現れる．．．」

そしてそバクの感覚以外に三つの感覚が現れたことに気が付いた

健吾「あの３人だ．．．」

健吾はその場に座りこむ

健吾「僕には何も出来ないし、仕方ないだ、どうしようも無いんだ」

健吾の脳裏にアレがよぎる

「しょうらいのゆめ」

健吾「．．．．．」

健吾「少し見るだけ、見るだけだから……」

健吾は目をつぶり行きたいと願った

第8話 子供のころの夢は、大概叶わないモノ（後書き）

次回、ついに健吾が活躍しそうです！？
感想アドバイス よろしくお願いします

第9話 戦う時は、守る時（前書き）

僕はきのう交通事故に遭い車が大破し横転しましたが、幸い打ち身とすり傷だけですみました 本当に幻界へ行くとこでした（汗）

第9話 戦う時は、守る時

健吾は、目を開けると、そこには、さっきと変わらない風景、アパートの中に居た。ただ違うのは色だ、薄暗い色に変わっている、間違いない健吾は、幻界に来たのだ

健吾「アパート？」

「そうか、行く場所をイメージしなかったからかな？」

健吾はアパートの外へ飛び出す

健吾「向こうの方角か・・・」

バクとあの3人の感覚で健吾は方角が分かった

健吾「なんとなく、分かってきたな、分かるけど、なんで分かるか分からないと言う意味が・・・」

その方角から

？「ウォーーン。ウォーーン。ウォーーン」

周りにバクでかい犬の鳴き声が響きわたる

健吾「何だあの鳴き声は、まさかバク!？」

そして健吾は大変なことに気づく

健吾「あの方角は、実家のほうじゃないか!？」

そう言くと健吾は実家の方に走り出した

健吾「体が軽い、僕、凄いスピードで走ってる!？そう言えば、桜井君が言ってたつけこの世界では、身体能力が格段にあがるって」

健吾は車並みのスピードで走っていく

その間にも爆音や鳴き声が聞こえてくる

健吾「はあ、はあはあ、はあ、はあはあ」

健吾は自宅近くまで行くと物影から状況を見る。そこには体長5メートルはありそうな大きな犬、しかも、ただの犬ではない、頭が三つ付いている

健吾「ケルベロス!？」

そして、そこに立っているのは3人では無く、優、一人だけであった

ケルベロスと距離を置いている優

優「はあ、はあ、はあはあ、はあはあ」

健吾「相川さんと桜井君は、どうしたんだ!？」

周りを見渡す健吾、そして少し離れた所に倒れている二人の姿を見つめる

健吾「相川さん!桜井君!」

そして、二人を見つけたと同時にあることに気づく

健吾「実家が潰れている!？」

「あと、制限時間はどれくらいあるんだ？」

健吾は、「時間の事を考えてみる」

健吾「あと、9分23秒・・・」

「それまでにあいつを倒さないと、実家が、この時間は、父さんは家にいるはずだ、どうすればいいんだ」

健吾「そうだ、戻って、父さんに連絡をすれば・・・」

健吾は、目をつぶる

健吾の心の声「帰りたい!帰りたい!帰りたい!」

目を開ける健吾しかし帰れてはいない。

健吾「なんで、帰れないんだよー!？」

凜「バクが現れている間は、帰れないのよ」

体を引きづりながら歩いて来て凜は言った

健吾「あつ、相川さん!」

殆ど夢力を使い切っているらしく凜の体はボロボロだった。

凜「あんたは、早く逃げなさい!」

健吾「で、でも」

凜「でも、じゃない!!、あのバカ犬は私が殺るんだから」

「あのばっか、また私を庇って・・・」

拓也の方を見る凜

その間にも優とケルベロスが戦っている

「ドーン」「ドカーン」

シールドとエネルギー弾をうまく使って戦っているがもう限界らしい

健吾にも優の夢力が殆どないことが感じ取れる

凜「優！もう無理よそれ以上かつたら．．．」

ケルベロスが優に向かって突進して来る！優は自分の前にシールド展開するがシールドごと跳ね飛ばされる

優「キャッ」

「ドスーン」壁に激突し倒れこむ優

ケルベロス「ウォーーン」「ウォーーン」「ウォーーン」

鳴き声を上げるケルベロスそして、健吾達の方を睨みつける見つかったみたいだ。

「ドス、ドス、ドス」突進してくるケルベロス

凜「チィ」

薙刀を構える凜

健吾は腰が抜けて動けない

ケルベロスが襲いかかる瞬間、優が目の前に現れる

優「シールド全開．．．」

「ドスーン」シールドにぶつかるケルベロス。

ケルベロス「ガウ、ガウガウ」

優「ハアッ」

シールドを押し返し、20メートルほど飛ばされるケルベロス「ズドン」

優「はあっはあはあはあ、はあはあ、はあはあはあ」

倒れこむ、優、そして優を抱え込む健吾

「！？」優の軽さに驚く健吾。

健吾「どうして、そんなになるまでた、戦えるんですか？僕には出来ない世界の為に戦うなんて、そんな大それたこと．．．」

優「はあ、はあ、私は世界の為に戦っていない．．．はあはあ、私にはもう家族は居ないから、大切な友達の為に戦っているだけ．」

凜と拓也の方をみる優

優「はあはあ、貴方も、私の大切な友達．．．」

健吾「．．．」

脳裏によぎるあの将来の夢．．．

「相川さん、泉さんをお願いします．．．」

「すっ」健吾は立ち上がる

ケルベロスは態勢を整えまたこちらに向かって来ている。どうやらさっきのダメージは余り無いようだ」

凜「何する気！？死ぬわよ．．．」

健吾「うおおおおおおお！！！」

健吾は叫びながらケルベロスに向かって走っていく

健吾心の声「守りたい、父さんを友達を大切な人を守りたい」

健吾の右手が光ったと思った瞬間「ブシュ」噴き出す血

見るとケルベロスの右の首が宙に飛んでいた。

第9話 戦う時は、守る時（後書き）

前書きは、ノンフィクションです

第10話 自分の能力は、中々わからない（前書き）

やっと、健吾が戦います
応援してやって下さい

第10話 自分の能力は、中々わからない

「どさっ」ケルベロスの頭が地面に落ちる

ケルベロス「キャウ」「キャウ！」

後退するケルベロス

そして、健吾の手には、『日本刀』が握られていた。

健吾「これが、僕の武器？能力？」

「.....」

「力が湧いて来るのが分かるこれが夢力か」

「いける！」

健吾はケルベロスに向かって走っていく

健吾の心の声「残り時間は、あと5分弱それまでに片づけないと、この辺一帯が大変なことになる」

健吾はケルベロスの懷に飛び込み胸を3回切りつける「ズバ、ズバ、ズバ」

ケルベロス「キャウ、ギャウ」

ケルベロスは、健吾を右足で払いのける「ドオン」

健吾「ぐああ」

倒れこむ健吾、すかさずケルベロスは、両足で踏みつぶそうとする

「ズドオン！！」

間一髪で避け、少し距離を取る健吾

健吾「あんなに、でかい図体でなんて素早いんだ」

「やつぱり、のこりの二つの頭を切り落とすしかないのか」

健吾は、またケルベロスに向かって走っていく。ケルベロスの真ん中の頭が健吾に咬みつこうとするがそれを避け、真ん中の首目がけ思いつきり刀を振り降ろす。「ズバ！！」一刀両断し、首が地面に落ちる。

凜「左よ！！」

凜が叫ぶが、左の頭が健吾の左腕に咬みつく「ガブ！」

健吾「ギャーあああああああああああああ」

健吾は刀を振り回すが、ケルベロスは離れない

健吾「あううう、ど、どうすればいいんだ……」

一つ案を思いつく健吾

健吾「こんなところで、死んでたまるかー」

健吾は右手に持った刀を自分の左腕に振り下ろす「ズバ」左腕を切り落とし、ケルベロスの口から逃れた健吾は、最後の頭に刀を突き

刺した「ズボ」

頭から血が噴き出す

ケルベロス「ギャウアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

健吾は、その場に倒れこむ

そしてケルベロスは動かなくなり、光の粒になって消えていった

第10話 自分の能力は、中々わからない（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております

第11話 友達は、一生の宝（前書き）

ようやくひと段落というところですが、まだ完結は遠そうです

第11話 友達は、一生の宝

消えていく、ケルベロス

健吾「やった．．．時間以内にたおせた．．．」

壊れた家や道路も元に戻っていく。

健吾はケルベロスが消えるのを確認すると気を失ってしまった。

健吾「うーん、」

健吾は目を開ける、そこには、拓也、優、凜の3人が居た

凜「やっと起きた、ほら、すっかりしなさい」

健吾「此処は？」

健吾が尋ねる

拓也「此処は幻界の中のお前の家だよ、悪いと思ったが近かったんで、勝手に上がらせてもらった」

良く見ると、健吾は実家の自分の部屋のベットに寝ていた。そして健吾にもたれるように優が寝ている」

健吾「いつ泉さん!？」

凜「大声出さない、起きちゃうでしょ」

拓也「大変だったんだよ、あれから、野田お前、腕を再生しないで、気を失ったろ。だから血が止まなくて、あのままほっとくと、さすがに不味いから、泉が自分の夢力を使って治したんだ。そしたらもう殆ど力を使いはたして、今寝てるってことだよ」

凜「凜それにしても、夢力で相手の傷が治せるなんて知らなかったわ．．．」

拓也「いや、泉だから出来たんだよ、俺たちの中で一番、夢力の使い方が上手いから」

3人は泉の方に目を向けた

拓也「それにしても、野田、凄いなお前、始めての実戦で、あのバクを倒しちまうんだから」

健吾「とにかく、夢中だったんです．．．自分でも信じられませんか．．．」

凜「何言ってるのよ、あんな立派に戦ってたのに、少し見直したわ」
健吾「．．．」

健吾は、顔を赤くしていた、今までこんな風に人に褒められた事が無かったからだ。そして健吾は言いたかった事を思い切って口にした。

健吾「あつあの、泉さんは戦っている時僕を、友達と言ってくれてとても嬉しかったです。だっ、だから二人も、ぼっ僕と、とっ友達になつて下さい」

健吾は、顔を真っ赤にしながら言った。

拓也「何いってんだよ、俺達もう友達だろ、なあ凜」

凜「まあ、そこまで言うなら、なつてあげても良いわよ」

優の寝言「みんな友達．．．むにゃ、むにゃ」

それを聞いた3人は顔を見合わせ、笑いあった

次回につづく

第11話 友達は、一生の宝（後書き）

感想、アドバイスお待ちしております

第12話 いきなり呼び方をかえるのは、難しい（前書き）

今回は、修行編？みたいなものです

第12話 いきなり呼び方をかえるのは、難しい

ケルベロスと戦ってから三日後の夜、健吾と拓也は、幻界の学校の校庭に居た、バクと戦う事を決めた健吾に拓也が戦い方を教える為だ拓也「もう、夢力は回復してるな？」

健吾「うん」

拓也「じゃあ、まず刀をイメージを手に集中して具象化してみろ」

健吾「分かった、刀のイメージ．．．手に集中．．．」

すると健吾の手がひかり、刀が現れた。

健吾「でっ出来た」

拓也の右腕にはもう黒い鎧が付いている

拓也「じゃあ始めるけど、いつバクが現れるか分からないから、力を使うことよりも力をコントロールすることを意識してやるんだ」

健吾「わっ分かった」

拓也「じゃあ行くぞ．．．」

健吾に向かって行く拓也そして拓也は、健吾に向けて右腕を振り下ろす。「ガチン！」刀でそれを受ける健吾。

拓也「甘い！」

今度は、拓也の左足が健吾の脇腹を襲う「ドカ！」

健吾「うわぁ！」

少し跳ね飛ばされる健吾

拓也「セーブしているから、そんなに効いていないはずだ、どんどん行くぞ」

健吾「はい！」

それから20分ほど経つと凜と優がやって来た

凜「おっ、やってるわね」

優「．．．．．」

拓也「今日は、あと3分で終わりだ、いいな」

健吾「はい」

「ズバ」「ガシャーン」「ドカーン」

健吾は戦いながらどうやってたらず上手く夢力をコントロールできるか考えてた

健吾の心の声「どうやってたら、もっと早く、もっと強くなれるんだ？」

健吾は考えていると何処からか、女の子の声が聞こえてきた
女の子の声「それは、もっと自分を信じれば良いんだよ。そして自分の守りたいモノをイメージするの」

健吾心の声「何だ今の声、一体どこから？」

拓也「何よそ見してんだ！」

「スツ」拓也の攻撃を避け少し距離を置く健吾

健吾「自分を信じる、そして守りたいもの」

すると、自分から夢力が湧いてくることに気づく

凜「なに、あの夢力！？」

優「とても、大きい！！」

そして健吾は拓也に向けて刀を振り降ろす

拓也「何！？」

「あぶねえー！！」

「スドーン！！」砂埃が舞い上がる

間一髪よける拓也。そして砂埃が晴れていくと、グラウンドに30メートルほど切られた跡が・・・

拓也、凜、優「・・・・・・・・・・」

驚く3人そして、放った本人も驚いている

健吾「えっ？これ？なんで？」

困惑している健吾に拓也が近づく

拓也「何だよこれ、凄いじゃねえか、どうやったんだよ健吾」

拓也は健吾の背中を叩きながら言う

健吾「分かんないけど、それより、ごめん、だいじょぶ桜井君」

拓也「俺は、たいじょぶだから、気にすんなよ健吾」

拓也は笑いながら言った

健吾には、この力の他に気になった事があつた

健吾「あの桜井君、僕こと健吾って．．．」

拓也「友達なんだから、別に名前で呼んでも良いだろ。それと前から気になつてたんだが、桜井君なんて堅いからやめてくれ！拓也と読んでくれ」

健吾「．．．．．」

健吾「じゃあ、拓也君本当にごめん」

拓也「ばか、もう良いって言つてるだろ」

拓也と健吾が話していると、校舎の方から凜と優が走ってきた

優「二人とも大丈夫ですか？」

拓也「ああ、大丈夫だ」

凜「それにしても凄いわね、どうやったの健吾！」

健吾「えっ健吾？」

凜「さっきあんた達の話声が聞こえてたわよ、コツチのほうがいやすいし私は、アンタのこと名前で呼ぶわ、文句ないでしょ？」

健吾「もっ勿論です」

優「私は野田君のほうが言いやすいから．．．このままでいいかな？」

健吾「別に何だつて良いですよ」

優「そう、良かった」

凜「それより、健吾アンタこれどうやったの？」

健吾「え〜とこれは．．．」

健吾は戦っている時に聞こえた女の子の声の事を思い出し、3人に説明した。

凜「ふ〜ん女の子の声ね．．．」

拓也「また謎が増えたな」

少し考える4人だが結局あの声の正体は、分からなかった。

優「もう、12時を回ってる、今日はもう帰りましょう」

凜「そうね、じゃあ私は帰るわね、バイバイ」

そう言うつと凜は消えていった

優「野田君も桜井君もまた、明た．．また今日も学校でね」
優も消えっていった

拓也「俺たちも帰るか」

健吾「そうだね」

拓也「そうだ、健吾、ちゃんとコッチで怪我を治してから帰れよ
うしないと、現実の体が傷付くぞ」

健吾「あっそうか、ありがとう、」

健吾は怪我に集中し傷を治す

健吾「ふう」

「じゃあお休み」

拓也「おう。お休み」

二人も幻界から消えて家に帰っていった

健吾は、ベットに寝ころび、あの女の子声の事を考えていた

健吾「本当に何だったんだろう、あの声は」

また、謎を残しこの日の夜は終わった．．．

次回に続く

第12話 いきなり呼び方をかえるのは、難しい（後書き）

人の呼び方を変えるタイミングって難しいですね
感想 アドバイス 本当にお待ちしております

第13話 人生は、初めての連続（前書き）

今回は、4人の日常を書いてみました。バトルなどは無いですが、書いて結構面白かったです。

第13話 人生は、初めての連続

健吾と拓也が特訓をした次の日の学校、ここ数日で、健吾の生活は大きく変わっていた。

今まで、休み時間は、一人で本を読んだり、音楽を聴いたりしていた健吾だったが、今では、あの3人と過ごす事が多くなった。話すことは、幻界の事だけでは無く、普通の高校生らしくテレビや音楽、優と凜は占いやファション雑誌などを一緒に読んでたりもする。周りから見れば、この4人が世界を救っているなんて想像もつかないだろう。

「キンコンカンコン」昼休みのチャイムが鳴った4人は机をくっつけて一緒にお弁当を食べる。

今日は、拓也、凜、泉は、手作り弁当だったが、健吾だけコンビ二弁当だった。

凜「あれ、健吾、今日は、コンビ二弁当なの？」

健吾「別に料理が苦手って訳じゃないけど、今日少し、寝坊しちゃったからね」

拓也「そう言えば、健吾と泉は、一人暮らしだったけど、色々大変そうだな」

健吾「まあね、家事とかが大変だけでもう慣れたよ」

色々な雑談が飛び交う中、健吾があることを拓也と凜に聞いた

健吾「前から気になってたんだけど、拓也君と相川さんって付き合ってるの？」

拓也、凜「ぶううつ」

少し、口の中のモノが吐きだしそうになる二人

凜「げほっげほ、何いつてるのよいきなり、そんな訳ないでしょ！」

優「えっ違うの？」

少し驚いたように優は言う。

拓也「泉まで何勘違いしてるんだ！」

優「仲よさそうに見えるから、私はてつきり・・・」

凜「いい！二人とも！私と拓也は、ただの幼馴染なだけで全然そんなじゃ、無いんだから」

顔を赤くしながら凜は言う

そんな、楽しいな会話をしながら、昼休みを過ごす4人であった

放課後4人は一緒に下校している、途中まで行くと凜が優にある誘いを言いだす。

凜「そうだ、優、駅前のアクセサリーショップに行かない？私ちよつと見たいモノがあるんだ」

優「別にいいよ。」

凜「じゃあ決まり！！」

「そう言う事でじゃあね、男子、諸君」

拓也「おう、またな」

健吾「また明日」

そして、凜と優は駅前の方に歩いていく

歩きながら凜は優に聞く

凜「優って、健吾に気があるの？良く健吾の方見てるけど・・・」

優「えっ、そんなの無いよ別に・・・」

顔を真っ赤にしながら言う優、

凜「いいって、いいって、隠さなくて、お姉さんに相談してみな」

優「・・・」

「気があるかどうか分からないけど、気になっているのは、確かだと思う」

「野田君、小さい時にお母さんを亡くして、父さんは主張で今一人暮らしてしょ、・・・友達も居なかったって言ってたし、」

「そんな野田君が昔の自分なに見えるから、それで多分気になっているんだと思うの・・・」

凜「そう・・・あまり私も人の事言えないけど、視点を変えればそ

れって．．．」

優「それって？」

凜「何でもない、私達まだ若いんだし、これから先どうなるか分からないよ優！」

笑顔で言う凜

優「そうだね．．」

優も笑いながら答える

凜「先が分からないから、人生はおもしろいのだ!!」

女の子同士の友情が深まった、何気ない日常だった

第13話 人生は、初めての連続（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております

第14話 何気ない言葉の中には、大切なことも隠れている（前書き）

必殺技ってやっぱり名前は、必要かな

第14話 何気ない言葉の中には、大切なことも隠れている

悪魔話編

ケルベロスと戦ってから1週間が過ぎた夜。あれ以来、バクは、現れていない。健吾達4人は、幻界のグラウンドで戦いの特訓をしていた。

健吾は、拓也と戦い、凜は、優と戦っている

4人「はあはあ、はあはあ」

拓也「それじゃあ少し休憩しよう！」

その言葉を合図に4人は、グラウンドのベンチに集まる

拓也「健吾はだいぶ動きが良くなってきたな」

健吾「そうかな、でもあれ以来、あの凄い斬撃は、出せないんだ・

」

優「きつと、まだコントロールが上手く出来てないのだけだよ、もっと上手くなればきつと、いつでも出せるようになるよ」

凜「じゃあ、名前を考えないとね、」

健吾「そんな、オーバーだよ」

健吾は苦笑いしながら答える、そして前から考えていたことを3人に話す。

健吾「前から考えていたんですけど、僕らがここに来た共通点が命の危機だけっておかしいと思うんですよ、だって死にかけてる人は、毎日、沢山いるだろうし、それなのに此処に来れるようになったのは、同じ学校の同じクラスの人なんて都合がよすぎると思うんです」

凜「確かにそうね、健吾の言う通りだね」

少し考えて、優が言う

優「つまり、私達には、他にも何らかの共通点がある、こう言つことかな？」

健吾「はい、そう言うことです。」

拓也「そう考えると、俺達が此処に来る前に何かあったと考えるのが妥当か」

「俺と凜が初めて此処に来たのが2カ月ちょっと前、その前に何かあったとすると．．．」

優「そう言えば、私が初めて桜井君と凜ちゃんに会った時初めて会った気がしなかったんだけど、もしかしたらその前に何処かで会ってるのかも知りれない」

拓也「俺は、そんなの感じなかったけど凜は、どうだ？」

凜「私も感じなかったわ」

優「おかしいなあゝ私の勘違いかな」

3人の話を聞いて考えている健吾。

健吾「他に2カ月くらい前にあった事と言えば、地震くらいですよ」

拓也「あった、あった、あれは結構でかかったよな凜」

凜「そうそう、確かあれば、高校の推薦入試の面接で順番を待ってた時だったよね」

健吾、優「えっ!？」

健吾「僕もその場にいたんですけど．．．」

優「私も．．．」

少し4人の思考がとまる

凜「ちょっとそれはおかしいわよ、確かにあの場所に4人いたけど、そこに優がいた記憶なんて．．．あつ」

拓也「．．．確かあの時、メガネをかけてマスクをした女の子がいたよな．．．」

健吾「確かにいたね．．．」

3人は優の顔を見る

優「．．．あの時風邪ひいちゃてて．．．」

凜「メガネは？」

優「普段は、コンタクトだけど、私上がり症だから、メガネを付けて面接に行ったの．．．」

拓也「なるほど、気が付かない訳だ．．．」

「健吾の時は、学校が始まって、顔を見てたから、気づかなかったのか」

健吾「じゃあ、もしかしたら、僕らが幻界に来れるようになったのは、あの地震関係があるんじゃないですか？」

凜「その可能性は、十分考えられるわね！」

この日は、この後も少し話したが、これ以上の進展は無かった、けれど健吾達は、この世界の謎にまた一歩近づく事が出来た

次回に続く

第14話 何気ない言葉の中には、大切なことも隠れている（後書き）

感想 アドバイス 質問 お待ちしております

第15話 見た目だけで判断するのは、危ない（前書き）

久々の新キャラです。さて、コイツは何をしてくれるかな？

第15話 見た目だけで判断するのは、危ない

幻界と、地震の関係について話した次の日の学校。今はお昼休みだ。もう日課になった四人のお弁当会、4人が机を着け、お弁当を開けようとすると、一人の男子生徒が4人に話かけてきた。

神埼「最近、君達、仲が良いね。」

健吾「神埼君？」

久々のキャラ紹介

神埼 心（かんざき しん）

健吾達のクラスの委員長、メガネをかけ、知的な感じで拓也とは正反対のイケメン。

協調性が高く、周りからの信頼が高い

神埼「もし、良ければ、僕も一緒にしても良いかな」

神埼は笑顔で4人に自分の弁当箱を見せる。

拓也「ああ、別にいいよ、なあ、みんなもいいだろ」

凜「べつに、私は良いけど」

優「うん・・・」

健吾「じゃあ、コッチへどうぞ」

健吾は自分の隣を指さす。

神埼「ありがとう」

神埼は、健吾の横に机を着ける神埼

拓也は食べながら神埼に聞く

拓也「珍しいな神埼、お前が俺達の所に来るなんて？」

神埼「君達が、最近楽しそうなんで、少し混ざってみたくなくてね、お邪魔だったかな？」

健吾「いや、全然そんな事ないよ、」

優、凜「……………」

顔には出していないが、凜と優は、歓迎していないみたいだ。いつもよりも口数が少なく、お弁当の時間が終わる……

神埼「あっそうだ、先生に次の時間の準備を頼まれるんだった」

席を立ちあがる神埼

神埼「今日は、ありがとう、やっぱっり、少し邪魔だったみたいだね」

健吾「そんなこと無いよ」

神埼「君は優しいね……」

神埼は微笑みながら言う

次の瞬間、優と神埼の目が会った

優「ゾクッ」

そして、神埼は、教室から出って行っただ。

凜「あゝ、疲れた、私、あいつ苦手なのよね」

健吾「そう言うのは、良くないよ」

凜「優しいわね」ホント健吾は「

少しからかう感じに健吾に言う凜

凜「それより、優、だいじょぶ？ 顔色が悪いけど」

優「だっ大丈夫、なんでも無いから」

優は、さっき神埼と目が会った時の背筋が凍るような感覚をしたことを黙っていた……………

廊下を歩く神埼が呟く

「面白い奴らだな、まさか野田まであそこに入るとは、これも必然か……あいつらにはもう少し働いてもらわないとな……」

次回に続く

第15話 見た目だけで判断するのは、危ない（後書き）

感想 アドバイス 質問 お待ちしております

面白いと感じてくれた方もよろしければ、ポイントをお願いします

第16話 1人の力の差は、戦力の決定的な差にならない（前書き）

読んでいただきありがとうございます

第16話 1人の力の差は、戦力の決定的な差にならない

昼休みが終わり、5時間目の授業も終わり、6時間目の授業が始まって5分ほど経った時4人にあの感覚が襲う

4人の心の声「バクがくる！」

前もって4人は、決めておいた事がある。4人が近くに居ない場合や授業中の場合は、バクが来る感覚を感じたら、まず、拓也がバクの現れる場所を考え、幻界のどこに集合するかを拓也がメールで3人に送信するということだ。

「ブーン」「ブーン」「ブーン」3人の携帯が同時に鳴る

メール内容「三丁目のセヴ〇イレヴン」

それを見た三人は机に頭を伏せる

目を開ける健吾、そこには3人の姿が既にあつた

拓也「あつちだ！」

走り出す拓也、健吾達は、拓也の後ろから着いて行く。

「今の内に残り時間を把握しとけ！」

健吾は、残り時間を確認する

健吾の心の声「残りは22分か・・・」

1分ほど走り止まる拓也。そして民家の屋根を指さしながら叫ぶ
「あそこだ！」

そこには、黒く丸い物体があつた

凜「何よあれ？」

優「・・・」

黒く丸い物体は、こちらの声に反応し、ゆっくり動き始めた
立ち上がり、羽を広げる黒い物体、丸く見えていたのは羽で体を覆っていたからと分かった

そして、動きを止める物体いや怪物がそこに居た。

体長は約2メートル、体は人に似ているが、手と足には大きな鋭い

爪が付いている。頭には、角が生えており口には鋭い牙、そして背中にコウモリのような大きな羽が付いている。

ガーゴイル「ぐああああああ」

健吾「がつ、ガーゴイル？」

拓也「厄介だな、飛行タイプか・・・」

拓也「凜、あの手で行くぞ」

凜「分かった」

拓也「泉、少し時間を稼いでくれ」

優「分かったわ」

そして優は、ガーゴイルに向けてエネルギー弾を放つ

「ドォォン！」「ドカーン！！」「ドカーン！」

ガーゴイルは、羽を使って飛び立ち避ける「バサッバサッバサ」

飛んでいるガーゴイルに向かって、またエネルギー弾を放つ優。「

ドカーン！ドカーン！」

ガーゴイルは、素早くなかなか当たらない

拓也「凜、健吾、こつちだ！」

そう言う拓也は、近く家の敷地に入って行った。

そこには、鉄製の物置が置いてある。

拓也「健吾、物置の壁を2メートル四方位に2枚切ってくれ！」

健吾は意味が良く分からなかったが、刀を出し言われたとおり切る。

「ズバ！、ズバ！！」

そして切り取った壁を地面置く。

凜「乗って！」拓也はもう切り取った壁に乗っている。そして凜が、

物体浮遊の能力を使う」

「フワッ」板に乗って飛んでいく拓也

凜「ほらっ、健吾も早く乗りなさいよ」

健吾も壁に乗り飛んでいく

そして二人は優の頭上に浮かんでいる

拓也「泉、ありがとう、泉は凜をガードに専念してくれ」

優「わかった」

凜「じゃあ、二人とも行くわよ!!」

勢い良く飛んでいく二人、

そして、板を蹴りガーゴイルの元へ跳んでいく拓也は、鎧を出した右腕で、思いつきり地面に向けて殴りつける。「スドーン」民家へ落ちて行くガーゴイル。凜も上手く拓也の足元に板を運ぶ「スタツ」板に着地する拓也

拓也「ナイス凜!」

凜「私にかかれば、これくらいどうってこと無いわよ!」

「スバーン」民家から飛び出すガーゴイルそして、足の爪で拓也に襲いかかる。

ガーゴイル「グギヤー!」

拓也「うわっ、くそ、離れるよコイツ」

ガーゴイルの爪が拓也食い込む「ブッシュ!」

拓也「ぐあっ」

健吾「拓也君!」

健吾は、ガーゴイル背後から切りつける。「ズバッ」ガーゴイルは右肩からお腹の真ん中くらいまで切れている

拓也はガーゴイルが切られている隙に離れる。

カーゴイルの切られた傷から泡のようなものが出てきてみるみる傷が塞がっていく

健吾「何!?!」

拓也「コイツ再生出来るのか、健吾、頭を狙え、基本、頭がバクの急所だ!」

健吾「分かつ...」

傷を治したガーゴイルが健吾に襲いかかる

健吾「ぐあっ」

健吾の心の声「こんなに近づけられたら、刀が振るえない、一旦距離をとらないと」

思いつきり後ろへ飛ぶ健吾、それに合わせて凜も板を持っていく。

よ！」

振り返る4人そこには10歳くらいの女の子が居た
健吾「君は、だれ？・・・」

次回に続く

第16話 1人の力の差は、戦力の決定的な差にならない（後書き）

感想 アドバイス 質問 お待ちしております

面白と感じた方がいらっしゃれば、ポイントのほうをよろしく願
いします

第17話 世界の中心は、ここだった（前書き）

少しずつ、謎が分かり、繋がっていきます

第17話 世界の中心は、ここだった

健吾「君は、だれ?」

健吾は、尋ねる。他の3人も驚いた顔をしている。どうやら誰もこの女の子の事は、知らないらしい。

女の子「私は、雨音 夢夢、この世界の守護者をやっていたの. . .

」

キャラ紹介

雨音 夢夢 (あまね むむ)

10歳くらいの可愛い女の子。

あとの、外見イメージはお任せします。

拓也「守護者?」

凜「あなたこの幻界について何か知っているの?」

凜は、少し慌てた感じで聞く

夢夢「知っているよ。幻界と呼ぶこの世界のことも. . . .あなた達が、此処にいる訳も. . . .」

悲しそうな顔で夢夢は言う。

健吾「もし良ければ、話してくれないかな、君が知っていることを」
夢夢「もちろん、いいよ、私は、その為に来たんだから. . .」

そして夢夢は、この世界のことについて、話します。

夢夢「この世界、つまり幻界は、現実世界の崩壊を防ぐ為に存在するの。現実世界を光とするなら、幻界は、影のような存在、殆どの人達は、この世界に気づく事無く、生涯を終えて行くの. . .そしてこの世界、幻界は、現実世界の歪みの力を集めて、それを無くす事がこの世界のある理由。今のあなた達は、魂が自分の形に具象化している状態なの」

健吾「歪みの力とは、なんですか？」

夢夢「歪みの力とは、現実世界で、人や動物、生き物全体が無意識に出している、憎しみや悲しみ、怒り、恨み、などの不の感情のエネルギーが歪みの力、それを私は、現実世界の歪みの力が集まるこの町で歪みの力を、夢玉^{むぎよく}の力で消していたの」

拓也「夢玉っていったい何なんだ？」

夢夢「夢玉とは、あなた達の言っている夢力の力が集まった、丸い石のことなの」

「夢玉には色々な特別な力が在り、守護者になるには、その石が絶対に必要なの」

凜「その守護者と言うのは、一体なんなの？」

夢夢「守護者とは、その時代、時代にいる、正統能力者がなれる、特別な存在なの」

「私が守護者になってからもう、5年目になるわ、」「あなた達、高校1年生でしょ、一応、同い年よ」

4人「!？」

凜「えっだって、あなた体が・・・」

夢夢「守護者になると、現実世界にある体ごとこの世界に来て、夢玉によって固定化されるから体は、歳をとらないし、次の守護者になる人が現れるまで現実世界に帰れないの・・・」

優「じゃあ、あなたは5年間ずっと1人でここに？」

夢夢「ずっと1人って訳じゃないけど大体そうね・・・」

悲しげな顔で言う夢夢

拓也「なんで、君は、そんな小さい時に、その、守護者になろうと思っただんだ？」

夢夢「私が幻界に来れるようになったのは、両親が事故で死んで、頼れる親戚も居ない私は、施設に入れられ、とても、辛い日々を送っていたわ、そんな時、私は、自分の能力に気づき、この世界に来るようになったの、そこに居たのは、20代中盤位の女の人でとて

も優しくされたの。それから毎晩、その人に会いに行き、色々な話を聞いたわ、この世界のことや守護者のこと、自分の家族の事、その女の人は私と同じ町に住んで居たことや、自分と同年の男の子がいると言っていたわ。その人は、家族を大切な人を護る為に此処に来たけど、その為に置いてきた家族のことをとても心配していたわ。」

凜「その人の名前は、なんて言うの？」

夢夢「美咲さん．．（みさき）と言うの」

健吾「！？」

「あつ、雨音さん苗字はなんですか！？まさか野田じゃあ」

震えた、声で聞く健吾。

夢夢

「そうだけど、まさか！」

健吾「きつとその人は．．．僕の母さんです．．．」

拓也、凜、優「！？」

次回に続く

第17話 世界の中心は、ここだった（後書き）

分かりにくい、所も、あったと思いますが、どうだったでしょうか？
感想 アドバイス 質問 ポイント お待ちしております

第18話 本当に大切なものは、失う前から知っている（前書き）

読んでくださり、ありがとうございます

第18話 本当に大切なものは、失う前から知っている

健吾「その人は、きっと、僕の母さんです．．．」

拓也、凜、優、「！？」

凜「ちよつと待ってよ、健吾、アンタ、確か母親は病死したって言うってたんじゃない．．．」

健吾「確かに、言いましたけど、僕が小さい時だったんで、僕には母さんが病死したという記憶は、無いんです。父さんが、母さんが病死したと言っていただけで、それが本当かどうかは、僕には、分からないですし、年齢的にも合っているんですけど．．．」

拓也「確かに、それが本当なら、現実の世界では、失踪したことになるし、きっと親父さんは、健吾の事を思って、病死したと嘘をついたと考えられるな」

夢夢は、昔の記憶を思い出していた、

夢夢の記憶

夢夢「ねえ、美咲さん、美咲さんって、私と同年の男の子が居るんでしょ」

美咲「そうよ」

夢夢「名前は、なんて言うの？」

美咲「名前は、．．．．．」

夢夢「本当よ」

4人「！？」

夢夢「私、思い出したわ、確かに言ってたよ、自分の子供の名前は『健吾』だって

優「それは、本当なの！」

夢夢「間違いないよ、ちゃんと思い出したよ」

健吾「母は、母さんはどうなったんですか!？」

夢夢「.....」

下を向く夢夢

健吾は、震えた声でゆっくりと言う

健吾「お願いします。話してください」

夢夢「分かったわ.....」

過去の出来事を語る夢夢

「私と美咲さんが会ってから、約1カ月ほど経ったある日の夜、幻界の異常を感じた私は、幻界に向かったんだけどそこには、瀕死の美咲さんが倒れていたの。」

夢夢「美咲さん、どうしたんですか？」

美咲に駆け寄る夢夢

美咲「あつ貴方と同じくらいの男の子が来て、この世界に集まる歪みの力を暴走させたの.....私は、それを止めようとしたんだけど.....歪みの力が強すぎて.....「ゴホっゴホ」」

夢夢「駄目だよ、しゃべっちゃ!」

美咲「歪みの力は何とか、抑えたたわ.....でも私はもう駄目、力を使いすぎたわ」

夢夢「駄目だよ、駄目だよそんなこと言っちゃ」

泣きながら言う夢夢

美咲「もうすぐ、私は、消えるわ.....ゴメンネ、夢夢ちゃん.....」

夢夢も美咲が死ぬことがわかった、だから、最後、美咲の為に夢夢は言った

夢夢「私が、次の守護者になる!美咲さんの大切な人は、私が護るから.....」

美咲「だめよ、夢夢ちゃん.....」

夢夢「なるったらなる!」

美咲にも夢夢の真剣さが伝わった

美咲「・・・・・・・・わかったわ」

美咲は夢玉を取りだす。

美咲「これより、守護者、交代の儀を行う、汝、世界を護るためにその力を使うことを我に誓うか？」

夢夢「誓います」

美咲は、夢夢の頭に手をやり、夢玉の力で、邪念や邪心が無いことを確認する

美咲「汝、その言葉に疑い無き。よって夢玉を授ける・・・・」

夢玉を夢夢に渡す美咲

美咲「これで、あなたは、守護者・・・・ごめんね・・・・」

そう言つと、美咲は光の粒になり、現実世界からも、幻界からも消えた

夢夢「これが、美咲さんの最後・・・・ごめんなさい・・・・」

健吾「君のせいじゃないよ、・・むしろ、今まで世界を護ってくれて、ありがとうだよ・・・・」

5人「・・・・・・・・・・」

沈黙する5人、健吾は、余り表情を変えていなかったが、健吾の手は、爪が肉に食い込む位強く握られていた。

次回に続く

第18話 本当に大切なものは、失う前から知っている（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント お待ちしております

第19話 本当に悪い奴は、見ただけでは分からない(前書き)

祝100ユニーク突破

大体、謎が解けます

第19話 本当に悪い奴は、見ただけでは分からない

神話編

健吾「雨音さん、あの時、母さんが言ってた、男の子って一体、」

夢夢「そう、これからの事にとって、そのことが一番重要になるの、3カ月前までは、その男の子は誰なのか、全く、見当が付かなかったけど、今は分かるわ」

健吾「それは、一体誰なんですか!？」

少し感情がこもった声で聞く、健吾

夢夢「それを、説明するにわ、まず、あなた達が、何故、幻界に来れるようになったか、説明しないとイケないわ。」

健吾「じゃあ、その説明をお願いします」

夢夢「分かったわ、今から約3カ月前、それまでは、定期的に集まる歪みの力を夢玉の力で消し去る、寂しかったけど、何事もなく平和な日々を送っていたわ。そんな時、私の前に1人の男が現れたの、その男は、元から能力を持っている、私や美咲さんと同じ正統能力者、その人の名前は、『神埼心』あいつが現れたのが全ての始まりだったの・・・」

4人は、その名前を聞いた瞬間、言葉では、表わせないほど、驚く。

4人「神埼 心だって!？」

夢夢「みんな、あいつを知ってるの？」

拓也「知ってるも何も、あいつは、俺達のクラスの委員長だ・・・」

夢夢「・・・」

少し考え込む夢夢

夢夢「全てはあいつに仕組まれてたのかな？」

呟く夢夢

凜「ちよっと、まだ状況が、分からないから、その先を説明して」

夢夢「あつ、ごめんね、じゃあそれからの事と話すね」

夢夢「3カ月前、神崎心は、幻界にやって来て、私に近づいてきたの．．．．人と話すのが5年ぶり位だったから、その時は、とても嬉しかったわ、それから、私と彼は、色々な話をしたわ。この世界の事、守護者のこと、歪みの力のこと、他にも、たわいもない会話、その時の彼は、とても、優しく見えていた。でも違っていたの、それは彼の本当の姿では無くある目的の為にやっていることだと。その時の私は気づけなかった」

夢夢「彼が現れたから半月ほど経った時、彼が自分が今年から行く学校へ行こうと言いだしたの、もちろんその時、何も知らない私は、彼に着いて行っただわ」

2月半ほど前

夢夢「へえ、これが神崎君が通う、高校か」

校舎の中を歩きながら二人は、話している。

神崎「うん。結構大きな高校でしょ」

夢夢が近くの教室に入って行き、並べられた机や椅子、黒板など、普通の教室を見て、呟く。

夢夢「私も、学校に通いたいな．．．」

それを聞いて神崎は夢夢の頭を撫でながら答える

神崎「通えるさ、僕が、守護者を変わってあげる」

夢夢「えっ！でも、そんな」

神崎「良いんだよ、君は今まで良く頑張った。だから、変わってくれ」

夢夢「本当にいいの？．．．」

夢夢が確認する

神崎「ああ」

夢夢「ありがとう．．．」

涙目で言う夢夢

教室の中

夢玉を取りだす夢夢

夢夢「これより守護者、交代の儀を行う、汝、世界を護る為その力を使う事を我に誓うか？」

神埼「誓います」

夢夢は、神埼の頭に手をやり夢玉の力で、邪心や邪念が無いことを確かめる

夢夢「なっ何よこれ!？」

神埼の頭の中は、邪念や邪心でいっぱいだった

神埼「チィッ」

神埼は夢夢の腹を蹴飛ばした。「ドォン!」夢夢の手から夢玉が離れる

夢夢「キャッ!！」

「ドカーン!！」壁にぶつかる夢夢

「コロコロ...」

神埼「まさか、頭の中を読まれるとは、知らなかった。親父のノートには書いて無かったからな」

「ヒョイ」神埼は、床に落ちた夢玉を拾いながら言った

夢夢「はぁ、はぁ、親父?ノート?あなた何を言っているの!？」

夢夢が体を起こしながら聞く

神埼「俺の親父は、昔ここで、守護者をやっていたんだよ、死んだ親父のノートには、この世界の色々なことが載っていたよ、守護者のこと、歪みの力、夢玉、まあ、交代の儀式の時に頭の中を読まれると書いていなかったが、まあ、いい、これで夢玉は、俺のモノだ」

夢夢「あなた、何をするつもり!？」

神埼「今から死ぬのに聞く必要もないだろ、喜べ、お前をこの夢玉の力で一番に消してやる」

神埼が夢玉の力を使おうとするが

神埼「何!？」

夢夢の心の声「まずい、夢玉が暴走する、儀式を行わないで使おうとするから。」

光を放ち、暴走する夢玉、神埼は夢玉から手を放すが暴走は止まらない

夢夢「このままじゃ、世界がまずいことになる」

夢夢は立ち上がり手を広げ丸いシールドを出し、夢玉を抑え込む

夢夢「はあああああああ！！」

そして、夢夢はこの学校を包みこむドーム型のシールドだす

夢夢「これで世界への影響を軽減できる」

そして夢夢は、夢玉を抑え込む事に成功し床に落ちる夢玉、夢力を使い果たし、その場に倒れ込む「バツタ」

夢夢「はあ、はあはあはあ、はあはあ」

神埼「はい、ご苦労さん」

そう言っていると神埼は、夢玉を拾い上げる。

神埼「危なかった、またあの時みたいになるとこだったぜ」

夢夢「はあはあはあはあ、あの時みたいに？」

神埼「冥土の土産に教えてやるよ、俺が、夢玉に触るのは、これが初めてじゃない．．．5年前に俺は、この世界に来た時に、その時の守護者に見せてもらった時、少しいじくつたら、歪みの力が一気にこの世界に流れ込んで大変だったんだぜ、あん時の俺は、バカだった、何の考えなしに行動しやがるから」

笑いながら言う神埼

夢夢「じゃあ．．．アンタのせいで美咲さんは．．．」

神埼「何だ、お前の知り合いだったのか、そいつは悪いことしたな、でも喜べよ、ほらお迎えが来たぜ」

夢夢の足が光の粒になって消えていく。

神埼「お前が、一時的に、夢玉の力を抑え込んでくれて助かったぜ、これで俺は徐々に夢玉をコントロールしていくことが出来る。」
そう言っている間にも夢夢は足からどんどん消えていく。

神埼「じゃあね、夢夢ちゃん。」

そう言っていると神埼は、教室から出て行つた。

夢夢「このまま、死ねない！」

夢夢は、最後の力を振り絞り、夢力を意識だけに集中し、夢夢の体は、消えて行つた

優「じゃあ、あの時の地震つてもしかして」

夢夢「そう、夢玉の暴走が、現実世界にまで干渉したの、そして現実世界のあの教室に居たあなた達4人に能力のきっかけを与えてしまったの」

「本来その能力は、先天的に携わっている正統能力者しか持っていないけど、あなた達みたいに後天的に外からの力によって与えられた能力者を外統能力者がいとうのうりょくしゃと言うの、でも守護者になれるのは、先天的に能力を持っている、正統能力者だけなの。」

「正統能力者も最初から能力が使える訳では無くて、何らかの原因があつて能力が目覚めるの、私の場合は両親を亡くした悲しみだったけど、一番多いのが命の危機、これで能力が目覚める人が多いと伝えられてるわ。」

拓也「俺達がどうやって、能力を得たか解つたが、あのバクは一体何なんだ」

夢夢「バクについては、あなた達が、考えている事で殆どあつて、わ、バクは本来私が消すはずだった歪みの力が消されないでたまり、具現化してしまったのがバクなの」

「バクが居る間は、この世界の歪みが強くなるの、そのバクの強さや、その時の幻界の状況によって現実世界に影響されない時間つまり制限時間が生まれるの」

凜「なるほど、そう言うことだったんだ」

健吾「雨音さんは、教室でやられてしまった後どうやって生き残つたんですか？」

夢夢「あの時、私は、残つた力を意識だけに集中して、何とか、意

識体として存在出来るようになったの、あなた達が幻界に来た時も、ずっと近くに居ただけで、意識体だからあなた達は、見ることも触る事も出なくて、私に残されたのは弱いテレパシーを使う力だけ」優「もしかして、時間制限やこの世界のことが、分かるんだけど、なんで分かるか分からない感覚は・・・」

夢夢「そう、それは、私の弱いテレパシーが伝えたの、この世界の言葉は、みんなは泉さんが考えたモノだと思っているけど、そうじゃなくて、バクも、夢力も幻界も、私のテレパシーで泉さんに無意識の内に伝えた言葉なの、そして少しずつ、力が戻っていいいくつれて声が少し伝わるようになり、さっきやっと体が実体化出来るようになったの」

「私は、あなた達に、謝らないといけないわ、変な事に巻き込んで本当にごめんなさい！」

拓也「雨音ちゃんは、全然悪くないよ、悪いのは全部、神埼だ、あいつは一体何をしようと、しているんだ？」

神埼「知りたいか？」

5人「!？」

5人は後ろを振り向くと、後ろの家の屋根の上に神埼が座っていた

次回に続く

第19話 本当に悪い奴は、見ただけでは分からない（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント
お待ちしております

第20話 怒りは、人を変える（前書き）

読んでくださりありがとうございます

第20話 怒りは、人を変える

神埼「知りたいか？」

家の屋根の上に座っている神埼

健吾「神埼いいー」

感情をむき出した、健吾が神埼の所へ跳んで行き、刀で切りつける。
「ズバーン」神埼も日本刀を出し座りながら、健吾の斬撃を受け止める

刀の擦れる音「チリチリチリ」

神埼「どうやら、俺とお前は、似た能力を持っているらしいな」

健吾「よくも、よくも、母さんを！」

神埼「おいおい、マザコンかあ？俺のせいにすんなよ、あんなの、自殺みたいなもんだろ」

健吾「てめえ」

「スッ」神埼は、立ち上がると、健吾の刀を押しつけ、健吾を拓也達の方に蹴り飛ばす。「ドカーン」

健吾「ぐあああー」

吹き飛ぶ健吾「ドーン」地面ぶつかった健吾だったが、すぐに起き上がる

健吾「はあ、はあ、はあ」

神埼「生きてたんだな、夢夢、驚いたぜ」

夢夢「……………」

拓也「何しに来たんだ、神埼！」

強めの口調でいう拓也

神埼「大体、コントロール出来た、夢玉の力を試しにな、まだ夢玉の力は8割ぐらいまでしか回復してないが、さすがに、凄い力だ」

夢夢「夢玉の力を使うには、体を幻界に固定しないとイケないはず、あなた現実世界に戻れなくなるわよ……」

神埼「言つたら、コントロール出来たって、今の夢玉にそんな制約

は無い。今の俺は、この世界も現実世界も、魂だけだろうが、体ごとだろうが、自由に移動できる」

神埼「それより、おかしいと思わなかったか、お前ら、能力のきかけを持っただお前達が次々命の危機に陥って能力に目覚めるなんて笑いながら言う神埼

優「まさか！」

神埼「そうさ、桜井と相川を引き逃げたのも、泉を刺したのも全て俺がやった事だ」

拓也「テメエー何のために！」

神埼「お前らがバクと呼んでいる、アレを掃除させるためさ」

「夢玉が完全に復活するまでは、世界は、このままの状態にしておきたいからな」

凜「自分の都合で、私達、4人を襲うなんて、自己中にもほどがあるわよ」

神埼「お前は、間違っている、俺が襲ったのは、3人だ、野田は、勝手に死にかけたただだ」

「せっかく、見逃しておいたのに、全くバカな奴だよ」

健吾「じゃあ、何で僕だけを、見逃したんだ！」

神埼「お前らの中では誰も気づいて無いが、野田は、外統能力者じゃない、正統能力者だったからだ」

「もしかしたら、正統能力者の野田は、俺の目的の邪魔になるかも知れないと思っただが、この程度の実力じゃ俺の勘違いのようだったな」

優「あなたの目的は、一体何なの？」

神埼「良いだろう、教えてやる俺の目的は、．．．」

次回に続く

第20話 怒りは、人を変える（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント
お待ちしております

第21話 世界征服をする意味は、常人には分からない（前書き）

読んでくださり、ありがとうございます

第21話 世界征服をする意味は、常人には分からない

神埼「俺の目的は、夢玉の力を使い、現実の世界にいる人類全て消し去り、新しい世界を創ることだ」

5人「!?!」

夢夢「何の為にそんなことを．．．」

神埼「この世界は実にくだらなすぎる、増えすぎた人、物、それを俺が、リセットしてやるんだよ、そして俺が新しい世界の神になるのさ」

拓也「そんな事の為に、世界中の人を殺すつもりか!?!」

神埼「俺は、ただ、高みを目指すだけさ、人が高みを目指すのに、理由は、他に要らないだろ、俺の場合、その高みが神だけさ」

凜「何を訳の分からない事をベラベラと」

優「そんな事、私達がさせないわ!」

神埼「笑わせるなよ、お前らごときに、この俺が止められるとでも?」

「スッ!」

健吾「きつ、消えた!?!」

「スタ」健吾達の目の前に現れる神埼

拓也「何!?!」

そして神埼は、夢夢以外の4人を四方に蹴り飛ばす。「ドス!、ドス!、ドス!、ドス!、」

健吾、拓也「ぐあ!」

凜、優「きゃあ!」

夢夢「みんな!」

そして神埼は、残った夢夢の首元に刀を向ける。

神埼「まだ、能力があまり回復して無いみたいだな、夢夢」

夢夢「ぐっ!」

神埼「お前達も分かったろ、夢玉の力をコントロールした俺の實力

を」

「お前らとは、もうレベルが違うんだよ、それにしても興味深いねあの女と野田が親子だったとは、能力は、遺伝するのかな、どうなんだろうなあ、夢夢」

夢夢「知らないわ、そんなの．．．お前なんて死んでしまえいいのよ」

神埼「言葉に気おつけろよ夢夢、お前らが今生きるか死ぬかは、俺の機嫌しだいと言うことを」

神埼は、さらに刀を近づける。

神埼「まあ、良い、今日の所は、見逃しといてやる、まだお前達で楽しみたいからな．．．」

そう言うとき神埼は、光の粒になり消えていった．．．

次回に続く

第21話 世界征服をする意味は、常人には分からない（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント お待ちしております

第22話 LOVEは、一番難しい感情（前書き）

読んで下さり、ありがとうございます

第22話 LOVEは、一番難しい感情

神埼が居なくなり、集まって話をする5人

優「あの人は、恐ろしく強いわ、でも何とかして倒さないと世界が．．．」

凜「あんな、化物みたいな奴どうやって倒せばいいのよ」

健吾「確かに、今の僕達が4人がかりで戦っても倒せる相手じゃない．．．」

拓也「雨音ちゃん、何か良い方法でもないか？」

夢夢「ごめんなさい、何も思いつかないわ．．．さっき感じた、夢玉の力からするとあと完全に復活するまで、恐らくあと、今日を入れて三日しかないわ」

健吾「あと、三日か．．．」

拓也「いや、まだ三日ある、それまでに何か作戦を考えよう、きっと良い方法があるはずだ。」

凜「そうね、じゃあ、今日の所は、早く帰って、夢力を回復させましょう、作戦は、明日考えましょう」

夢夢「私もそれが良いと思う、今日は、みんなは帰って疲れをとって」

拓也「じゃあ、明日は、学校を休んで集まろう。」

優「だったら、私の家に来て、私達が幻界に行っている間は体が無防備になるけど私のマンションはセキュリティが高いから、神埼君は近寄れないわ。」

拓也「ああ、そうしよう、じゃあ、明日の12時に泉の家に、集合で、それから幻界に行こう」

夢夢「分かったわ、私もそれまで、何か良い方法が無いか考えとくわ」

そして、健吾達は、現実世界に戻って行った。

4人が目を覚ますと同時に、チャイムが鳴った。「キーン、コーン、カーン、コーン」

拓也の後ろの生徒が拓也の肩に手を置き話かける

男子生徒「拓也、お前、授業中殆ど寝てたな」

頭を起こし周りを見渡す拓也

拓也「寝不足だったもんでな、それより、神埼は、何処へ行った？」

男子生徒「ああ、神埼なら、具合が悪いらしくて、6時間目の途中で、早退したよ」

拓也「そうか、ありがとう」

拓也は、鞆を持ち立ち上がる

拓也「凜、健吾、泉、帰ろう」

下校する4人、会話は、殆ど無く、空気は、重い

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

大きな交差点に来た4人すると拓也が

拓也「悪い、俺、ちよつと野暮用があるから先に帰っててくれ」

凜「野暮用？なによそれ？」

拓也「大したことじゃないから、また、明日な、」

健吾「うん、分かった、また明日」

優「さよなら、桜井君」

拓也「おう、」

「凜・・・・・・・・またな」

凜「ちよつと、拓也！」

拓也は健吾たちとは、違う方向に歩いて行つた

それから少し歩くと、優が凜の袖をひっぱり、小さな声で話かける。

凜「何？優」

優「少し、相談があつて、ちよと付き合ってもらえないかな・・・」

顔を赤くして、もじもじ、しながら言う優

凜「分かった、良いわよ。」

「健吾、先に帰ってて、私、優とちよと用事があるから」

健吾「用事って何？」

優「ホント、全然大したことじゃないから」

慌てながら答える優、そして、凜の手をひっぱり走っていく

優「また明日、野田君」

健吾「うん．．．また、明日」

健吾の心の声「泉さん、なんであんなに慌てているんだろう？」

凜「ちよっと、優！」

人通りの少ない、わき道入る二人

優「はあ、はあ、はあ」

凜「で、相談って何なの優」

優「あのね、笑わないで聞いてもらえるかな？．．．」

凜「笑わないわよ、ホラ、お姉さんに相談してみなさい」

顔を真っ赤にしている優

優「わっ、私ね、やっと、自分の本当の気持ちが分かったの．．．」

「わっ、私は．．．の、野田君のことが、す、す、好きなの！！」

「それでね、もし、この戦いが終わったら．．．告白しようと思

っているの、それでね凜ちゃん、私の事応援してくれる？．．．」

凜「勿論、応援してあげるけど、そんなんじゃ駄目よ！」

優「えっ、！？何がだめなの？」

凜「もし、この戦いが終わったらじゃなくて、絶対この戦いを私達の勝利で終わらすの」

「そうじゃないと、駄目だろ、このおちよこちよいめ」

軽く優のおでこにデコピンする凜「パチッン！」

今にも泣きそうな顔で答える優

優「うん、そうだね、ありがとう。凜ちゃん」

凜「いいよ、お礼なんて、優のおかげで私も決心がついたから．．．」

優「えっ？」

凜「なんでもないわ、さあ今日は、早く帰ってゆつくり休みましょ
う」

そうして二人は、自分達の自宅に帰って行った

次回に続く

第22話 LOVEは、一番難しい感情（後書き）

感想 質問 アドバイス ポイント お待ちしております

第23話 繋がらない電話それは、フリゲの始まり（前書き）

読んでくださり、ありがとうございます

第23話 繋がらない電話それは、フラグの始まり

みんなと別れた後、健吾は、アパートに帰り、帰るとすぐ、制服のままベツトに倒れこんだ「ばふっ」

健吾「今日は、色々な事があつたな、バクが現れて、雨音さんに会って、母さんの本当の死を知って、神埼の目的、．．．人類を消し去って新しい世界を創ることを、知って。」

健吾は神埼に切りかかった事を思い出す

健吾「あんなに、感情をさらけ出したのは、いつ以来だろう．．．殆ど母さんの事は、覚えてないけどあそこまで、怒れることは、とても大切に思ってたんだな．．．」

「神埼は、人類を全て消し去るなんて、言ってたけど、規模が大きすぎてピンとこないや．．．僕が戦っている理由は、大切な人を護りたい、ただそれだけの、為なのだから．．．」
そう呟くと健吾は、そのまま朝まで寝てしまった。

次の日の朝、健吾は、起きてから、優の家に出発するまでの間、神埼を倒す方法を考えていたが、結局良い方法は、思いつかなかった。
健吾は、11時半にアパートを出て、優のマンションへ自転車に向かう。

マンションに着いた健吾は、入り口にあるインターホンのボードに優の部屋の番号を入力する

健吾「えーと、泉さんの部屋の番号は、703と」

優「はい」

健吾「野田です。入口を開けてもらって良いですか？」

優「分かりました、ちょっと待ってください」

「ウィーン」

優「どうぞ」

健吾は、エレベーターに乗り7階のゆうの部屋に向かう。

インターホンを押す健吾。「ピンポン」

優「はい、今行きます」

「カチャ、カチャ」鍵を二つ開けチェーンを付けたまま開け、健吾を確認する優

優「ちよつと待つて」

一回ドアをしめチェーンを外す優「ガチャ、ガチャ、カチャ」そして、ようやくドアが開いた。

優「ごめんね、遅くなつて」

健吾「別に、気にしなくて、それに何があるか分からないから、むしろこれくらい、しといたほうが良いよ」

玄関に入るとそこには、女の子の靴が2足ある。どうやら、凜はもう、来ているらしい。

凜「ちよつと遅いわよ、健吾」

健吾「まだ、12時まで、あと5分あるんですけど・・・」

凜「女の子と、待ち合わせの時は10分前には、来るものよ、良く覚えておきなさい!」

健吾「分かりました・・・それより、拓也君は、どうしたんですか?」

凜「あいつ、まだ、来て無いのよ、全く、何しているんだか・・・」

健吾「じゃあ、僕、連絡してみますね」

そう言つと、健吾は、携帯を取り出す。

凜「ちよつと、待つて拓也に連絡するなら私がするわ」

健吾「分かりました」

凜は、携帯取り出し拓也の携帯にかけた。

「ピポパ、プルルルルルルル、プルルルルルルル、プルルルルルルルルルル・・・ガチャ」

携帯「お掛けになった電話番号は、電波の届かない場所にあるか、電げん・・・」

凜「おかしいわね、繋がらないわ?それにあいつは、待ち合わせに

凜「顔が分かったほうが聞き込みしやすいでしょ、いい、無くしたら、承知しないからね！」

健吾「分かりました、ありがとうございます」

ポケットにプリクラを入れる健吾

優「これ、このマンションの鍵と、カード、念のため持ってた」

健吾「分かりました」

優「野田君．．．気をつけて」

健吾「はい」

そう答えると健吾はマンションから出て、自転車に乗り拓也を探しに行った。

次回に続く

第23話 繋がらない電話それは、フラグの始まり（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント お待ちしております

第24話 『死』それは、いつも隣にいる（前書き）

読んでくださり、ありがとうございます

第24話 『死』それは、いつも隣にいる

友話編

健吾は、自転車に乗り、拓也と別れた、交差点に向かうが、その向かう途中神埼が目の前に現れ、自転車を止める健吾、「キィー」

神埼「やあ、野田、そんなに、慌てて、何か探しものか？」

不気味に笑いながら放す、神埼

健吾「おっ、お前まさか、拓也君に何かしたんじゃないだろうな！？」

神埼「拓也？、ああ、桜井のことか、知っているには、知っているが、もう手遅れだろうな」

健吾「！？、お前、拓也君に何をした！？」

神埼「桜井の体なら、その、公園のベンチにあるが、魂は、どうだろうな」

健吾「どういう、意味だ……」

神埼に聞いている途中に、健吾は、バク of 感覚を感じた」

健吾「バク！？、……いや、おかしい、バク of 感覚の中に拓也君の夢力 of 感覚が混じっている……」

神埼「はははは、やっと、終わったか、以外に時間が、かかったな」
健吾「お前、なにをした！？」

神埼「昨日、桜井は、現実世界では、俺の能力は、使え無いだろうと、考え、俺の家まで来て、俺を倒そうとしたんだよ、まあ、考えとしては、悪くないが、だが、俺が何も手を打って無い訳ないだろう」

そう言々と神埼は、ポケットからスタンガンを取り出す。「パチ、パチ。パチ」

神埼「こいつで、眠らせた後、俺は、夢玉の力を使い、桜井の魂に、

歪みの力を流しこんだのさ、幻界にいるバクは、桜井でもあり、バクだ、さあ、お前達は、どうする？世界の為に友達を殺すか、友達の為に世界を見捨てるか、良く考えるんだな、まあ、どっちにしても、明日には、この世界が終わるから見捨てようが、見捨てなからうが、変わらないんだがな」

健吾「お前、本当にクズだな」

凄惨な形相で睨む健吾

神埼「おっと、今は、俺にかまうよりも、お前も幻界に向かった方が良くないじゃないか、他の二人は、もう、行ってみたんだぞ」

たしかに、優と凜の夢力が感じられた

神埼「じゃあ、お前達がどうするか、楽しみにしてるよ」

そう言っていると神埼は、健吾の前から去って行った

健吾「今は、あいつに、かまっている暇は無い、まず、拓也君の体を運ばないと」

健吾は、公園へ行き、拓也を見つけると、自転車に拓也を乗せ、泉のマンションに戻った。

泉から借りたカードと鍵で泉の部屋に入り、拓也を寝かせると、すぐに、幻界のバクの感覚がある場所へ行った」

幻界に着くと、そこは、住宅地だったが、周りには、全壊した家屋がいくつもあった

健吾の少し離れたところに、凜が倒れていた。凜に駆け寄る健吾

健吾「大丈夫ですか！相川さん」

凜「け、健吾、たっ拓也が・・・」

健吾「知っています・・・あいつが、神埼がやったんです、凜はかなり、傷ついていた

周りを見渡す健吾

健吾「泉さんは、どこにいるんだ」

その瞬間、50メートルほど、先に離れた道路に泉と拓也が跳んできた」

泉「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

拓也「があああああ！」

拓也の意識はすでにバクに吞まれていた

拓也が泉の方に向かって走り、襲いかかる

泉「ハッア！」

泉は自分の目の前に3枚重ねたシールドを展開する

拓也は、鎧の出た右腕でシールドに殴り付ける

「パリン！！、バリン！！、バリン！！」

シールドを、破られ、健吾の方に吹き飛ぶ優

健吾「泉さん！」

「がしっ」泉を受け止める健吾

健吾「大丈夫ですか、泉さん」

泉「・・・・・・・・・・」

泉は気を失っていた

泉を凜の所に連れて行き離れる健吾

拓也は、健吾に向かって歩いて来ている

健吾「一体、どうしたら、いいんだ・・」

そこに夢夢が体を引きずって、健吾の元へ来た

健吾「雨音さん、無事だったんですか！」

夢夢「一応ね、今の桜井君は、バクに取りつかれて、通常以上の力をもっているわ・・」

「健吾君、もう、制限時間も10分も無いわ、そして今、戦えるのは、あなた、だけなの・・」健吾君・・「拓也君の為にも、拓也君を殺してあげて・・」

健吾「！？」

健吾「そっ、そんなの出来る訳ないよ」

夢夢「でも、そうしないと、世界が、拓也君が護りたかったモノも全部無くなってしまうんだよ」

健吾「でも・・・・・・・・」

健吾と夢夢が話しているうちに、拓也は目の前まで来ていた

第24話 『死』それは、いつも隣にいる（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント お待ちしております

第25話 世界の中心は、絶望の叫び声に包まれる（前書き）

読んでくださり、ありがとうございます

第25話 世界の中心は、絶望の叫び声に包まれる

健吾「死にたくない！」

拓也の振り下ろす、右腕を、右手で受け止める、健吾、「ガシッ！」

拓也「くがああ」

そして、右手に力を入れる健吾、すると拓也の腕の鎧は、碎け散った。「パリパリパリ！！」

健吾は、拓也の脇腹にけりを入れ蹴り飛ばす、住宅を突き抜け、100メートル近く吹き飛ぶ拓也

そして、クレーターから出てきて夢夢達が見たのは、不気味に笑う、正気を失った健吾だった

気絶していた優は、目が覚めていた

優「どうしたの、野田君．．．なんなの、あの大きすぎる夢力は」

夢夢「目覚めたのよ、正統能力者としての野田君の本当の力に．．．でも力に呑みこまれている」

凜「どうなるのよ、一体！？」

夢夢「私にも分からないわ．．．」

健吾は刀を出し拓也の方へ跳んでいく

拓也「ぎやああー」

拓也の悲鳴が辺りに響くと左腕が無い拓也が、優達の20メートル程前に、吹き飛んできた。「ズドン！！」 拓也は、殆ど動かない、もう、反撃する力も残って無いみたいだ「カツ、カツ、カツ、カツ」

凜「ちよっと、優！」

優「はあ、はあ、はあ、はあ」

優は、健吾に向かって走って行く

健吾は拓也の胸ぐらを掴み体を起こし、刀を頭の方へ向けるすると拓也の体からスライムのような黒いモノが出てきた。

凜「あれは何！？」

夢夢「あれはバクよ、このままじゃ殺されると思って、桜井君の体から逃げ出したんだわ」

「あれは、私が、やるわ。夢夢はそのバクを丸いバリアの中に閉じ込め、圧縮しバクを倒した」

夢夢はその場に倒れこむ、ろくに力が回復していないのに、能力を使っただけからだ。「ばた！」

凜「じゃあ、もう、
・ ・ ・ 止めて！ 健吾、拓也は、もう大丈夫だからあ——」

泣きながら言う凜、しかし、健吾の耳には届かない……

そして、健吾が拓也の頭に刀を刺そうとした時、後ろから優が抱きついた、

優は、泣きながら言う

優「野田君……もう大丈夫だから……お願い、止めて……」

健吾の刀が拓也の頭、すれすれで、止まる

健吾は、拓也を放した

健吾「い・い・いずみ、さん？」

正氣を取り戻した健吾だったが、目の前に居る左腕の無い瀕死の拓也と自分と持っている刀に血が付いているのを見た健吾

健吾「わやああああああああああああああああああ

あああ
あああ
あああ
あああ
あああ」

健吾の叫び声が幻界に響きわたった

次回に続く

第25話 世界の中心は、絶望の叫び声に包まれる（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント お待ちしております

第26話 自分ほど遠い存在は、この世にない（前書き）

読んでくださり、ありがとうございます

第26話 自分ほど遠い存在は、この世にない

健吾「わあああああああああああああああああああああ」

叫ぶ健吾の声が、幻界に響きわたる

優「おちついて、落ち着いてよ、野田君……」

そう言っている優だが、優、自身も泣きじゃくっている

健吾「僕がやったんだ・僕がやったんだ・僕がやったんだ・僕がやったんだ・

・僕が拓也君を
・
・
・
・

健吾は目の前が真っ白になった……

真つ暗な空間にいる健吾、でも自分の周りにだけ、上から光が灯さ
れている

健吾の目の前には、幼稚園生の姿の自分がいる。紙を持って健吾に向かつてしゃべっている。

健吾幼「ぼくのしょうらいのゆめは、
・
・
・
」

健吾「やめろ、言うな」

健吾幼「わるいてきから、おかあさんやおとうさん、ともだちを」

健吾「言うなっ
ていつて
るだろ!!」

健吾「まもれるような、つよいひとになりたいです……」

健吾「やめろ――――！！」

健吾「結局、君には何一つ護れてないじゃないか」

健吾「いぬわー」

健吾幼「それどころか拓也君を殺しかけて、何が護るだよ」

健吾「いゝやうに」

健吾幼「これじゃ、あの神埼と変わらないじゃないか」

健吾「僕は、あんな奴とは、違う」

健吾幼「でも、拓也君を痛めつけている時、君は、楽しそうだったじゃないか」

健吾「あれは、意識が無くなってて．．．」

健吾幼「意識が無くなる？違うだろ、死ぬのが怖いから、殺られる前に殺ろうと思ったんだろ、そして新しい自分の力に酔いしれていたんだ、そうだろ？」

「君は、一番、自分が好きなんだろ、だったら全てを捨てて、もどっちゃえばいいだろ、ひとりに」

健吾幼「どうせ、君は、自分以外、誰一人、救えやしないよ．．．」

「

健吾「だまれーーーーー」

健吾が気が付くとそこは、病室のベットの上だった、そして横には、優が居た．．．

第26話 自分ほど遠い存在は、この世にない（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント お待ちしております

第27話 絶対は、絶対無い(前書き)

読んでくださり、ありがとうございます

第27話 絶対は、絶対無い

優「良かった、目が覚めたんだね」

周りを見渡す健吾、そしてここが病院のベッドの上だということに気づいた」

健吾は起き上りながら聞く

健吾「泉さん．．．あの．．．」

優「聞きたい事は、分かるわ、桜井君のことでしょう．．．．．」
健吾「はい．．．」

優「今は、あの戦いが終わって次の日の朝の8時なの、野田君が気を失った後、私が桜井君の左腕と、傷を治したのだけど．．．雨音さんが言うには、拓也君の魂、自体が傷ついてしまい、幻界から帰って来ても昏睡状態のまま、今でも、集中治療室に居るわ、

健吾「相川さんは、今どこに居るんですか？」

優「凜ちゃんなら、まだ集中治療室の前に．．．」

「カチャ」凜が健吾の病室に入って来た

凜「健吾、起きたのね」

健吾「はい．．．」

凜「いきなりで、悪いけど、雨音ちゃんが言うにわ、あと5時間で夢玉が完全に復活するらしいわ、あいつはもう、幻界でその準備をしているわ．．．私達で、なんとかしないと．．．．．」

それを聞いた健吾は、震えながら二人に言う

健吾「すつ、すいません、僕は、もう、戦えません．．．．」

凜「それは、どういうことよ!」

今「僕が、能力を使えば、また、正気を失うかもしれない．．．そんなことになったら、また、僕は、誰かを傷つける、もしかしたら、僕が世界を滅ぼしてしまうかも知れない、そんなのは嫌だ．．．」
凜「じゃあ、アンタ、このまま、世界が滅ぶのを黙って見ているつもりなの!」

健吾「僕が、誰かを傷つけるよりは、全然良い……」

「パチッン！」病室に凜の張り手の音が響く

凜「優、行きましょう、」

凜は、優の手を引き病室から出ようとする

凜「そんなの、自分が傷つくのが怖いだけじゃない……」

「パタン」そう言う凜と優は病室から出ていった。

健吾「もうこれで良いんだ、僕はもう戦わない」

凜「しかたないわ、私達だけで行きましょう」

優「何か、作戦でもあるの？」

凜「ごめん、無いわ、でも、こうなったら、玉砕覚悟よ……」

優「分かった、最後まで一緒だよ」

それから20分後二人は幻界に向かった

幻界で夢夢と前もって決めていた場所で合流する二人。

夢夢「あれ、健吾くんは？」

凜「あいつは、来ないわ、もう戦いたくないんですって」

夢夢「えっ、何で……」

「そんなことより、神埼は今どこにいるの？」

夢夢「神埼は夢玉を封じた場所、つまり、学校に居るわ、でも今、

私達が行ったところで、絶対、勝てっこないわ……」

凜「それでも、私は、行くわ、待ってたって、奇跡は起きないもの、

だから私は、奇跡を迎えに行くの！それに、雨音ちゃん一つ教えて

あげるわ、この世界に絶対なんて絶対ないわ！！」

優「じゃあ、その絶対は？」

凜「細かいこと気にしない！、じゃあ、行くわよ」

次回に続く

第27話 絶対は、絶対無い（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント お待ちしております

第28話 戦力の差は、圧倒的な力の差だった（前書き）

読んでくださり、ありがとうございます

第28話 戦力の差は、圧倒的な力の差だった

我話編

学校に着き、校門から入って行く、凜、優、夢夢の三人、神埼は、校庭の真ん中で、夢玉を復活させる準備をしていた。凜達と、30メートル程、離れたところから、話かける、神埼

神埼「何しに来たんだお前ら」

凜「アンタを殺しに来たのよ、」

神埼「何の冗談だ、お前らが束になって、かかって来たところで、俺には、勝てない事ぐらい分かっているだろ」

凜「うるさいわね！」

凜は、薙刀を出し、神埼に向かって走って行き切りつける、「ズッバ」

神埼は、刀を出し凜の攻撃を受け止める

神埼「この程度の攻撃で、俺が殺せるとでも思っているのか」

凜「うるさい！今、大切なのは、やるか、やらないかなのよー！」

神埼「だから、死ぬと分かかって、来たのか？、連戦で夢力もろくに回復してないのに、愚かだな」

「それと、野田と桜井は、どうした？死んだか？」

凜「死んでないわよ！」

凜は、薙刀に力をいれるが、神埼は、ビクともしない

優「凜ちゃん、避けて！」

優は、回り込んだ場所から、神埼に向けて、エネルギー弾を放つ、避ける凜だったが、神埼にも避けられてしまった。

神埼「どうしても、死にたいらしいな、いいだろう、夢玉の復活するまで、まだ、時間があるから、軽く遊んでやる。」

そう言くと、神埼は、凜に向かって、斬撃を出す。「ザッ」

夢夢「相川さん、危ない」

優「シールド展開！」

「バツン」優のシールドで凜は護れた

凜「ありがとう、優」

神埼「さて、いつまで。持つか？お前ら」

不気味に笑う神埼

夢夢「私も、戦うわ」

優「でも、雨音さん．．．まだ、力が回復してないんじゃない？」

夢夢「ええ、まだ、回復は余り出来てないわ、でも、ただ、黙って見ているなんて嫌よ。」

夢夢は、右手の手のひらから炎を出す

「発火能力、これが、私の本当の能力、前、使ったシールドは、守護者になってから、覚えたモノなの」

そして、夢夢は、手のひらの炎を大きくすると、それを、神埼に向かって放つ

夢夢「はあ！」

神埼はその場から一步も動かず、素手で炎を払いのけた

神埼「情けない、炎だな、夢夢、これじゃ、俺に火傷一つ負わせられないぜ」

夢夢「はあ、はあ、はあ」

夢力が回復していない、夢夢は、すぐ息が上がってしまった。

神埼「さて、どんどん、かかって来い、そして、死ぬ瞬間に最高の恐怖を味あわせてやる」

そう言う神埼は、笑いながら、夢夢達の方に向かっていく

それから、数分後、校庭に立っているのは、神埼ひとりだけだった

第28話 戦力の差は、圧倒的な力の差だった（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント お待ちしております

第29話 ヒーローでも勇者でもないそいつは、大魔王に立ち向かう（前書き）

読んでくださり、ありがとうございます

第29話 ヒーローでも勇者でもないそいつは、大魔王に立ち向かう

圧倒的な力の差の前に、凜、優、夢夢の3人は、意識は、あるようだが、校庭に倒れている

神埼「なんだ、もう終わりか、あっけない」

「じゃあ、誰から、殺すとするか」

3人を見た神埼は、一番近くに倒れていた、優の元に歩いて行く

神埼「まずは、お前からだ、まあ安心しろ、すぐに他の奴も逝かせてやるから」

凜「優．．」

夢夢「泉さん．．．」

神埼は、優の胸ぐらを左手で掴むと持ち上げ、右手に持った刀を優に向ける

優「くっ」

神埼「結局、お前らは、俺に利用され、俺に殺されるだよ」

「はい、ごくろうさん」

神埼は優の喉目がけ、刀を突き出した

優「の、野田くん．．．．．」

「がし！！」

「！？」

神埼の刀が優の喉に突き刺さる瞬間、誰かの手が神埼の刀を止めた？「ごめんなさい．．遅くなりました」

刀を止めたのは『健吾』だった

今から、20分ほど前の現実世界

病院のベッドの上で健吾は膝を抱えていた

健吾「僕は、戦わない、どうせ、みんな死んでしまうんだ．．．もう、どうでもいい」

健吾は凜の言葉を思い出していた

凜の言葉「自分が傷つくのが怖いだけじゃない．．．」

健吾「．．．何で僕に、こんな力（能力）があるんだよ、こんな力が無ければこんな思いをしないで済んだのに．．．」

「コンコン！」

看護婦「失礼します」

「大丈夫ですか」

健吾「．．．．．」

健吾の部屋に看護婦が入ってきて健吾にあるモノを手渡した

健吾「手紙？．．．」

看護婦「はい、さっきまで居た、女の子に、これを君に渡して欲しいと頼まれたので」

看護婦「失礼しました」

看護婦は、健吾に手紙を渡すと、すぐに部屋から出てった。「パタン」

健吾は看護婦が居なくなると、手紙に目をやる。手紙の白い封筒の後ろには、『泉 優』と書かれていた

健吾「泉さん？何だろう一体．．．」

健吾は、封筒を開け手紙を、黙って読んだ

手紙の内容

こんな時に、こんな手紙を送り、本当にすみません。でも、今日、世界が終わってしまうかも知れないので、私の気持ちを野田君に伝えます。私は、野田君の事が好きです。私は、野田君の優しいところが好きです。私は、凜ちゃん、桜井君、野田君と会うまでは、家族も友達も居ない生活で、人としての心を無くしかけていましたが、3人と会って、心を取り戻す事が、出来ました。どうか、自分を責めないでください。凜ちゃんも桜井君もきつと怒

ついでません

例え、戦わない野田君を世界中の人がを責めたとしても私が野田君を許します。だから安心して下さい。

もし、明日を迎える事が出来たら、その時は、自分の口で伝えます。
泉 優

健吾「泉さん．．．」

「カチャ」病室のドアが開く。そこには、健吾の父親が居た
健吾「父さん．．．」

父親「友達が大変な事になったらしいな」
震えた声で言う健吾

健吾「僕が悪いんだ．．．僕が」

父親「そうか、．．．健吾、齒を食いしばれ」
健吾「えっ？」

父親は、健吾の顔に、重い一発の拳を入れた。「ガシャーン」
ベットから落ちる健吾

健吾「なっ何すんだよ、いきなり」

父親「お前が、今、出来ることは、なんだ？」

「ここで、自暴自棄になっっていることか？、違うだろ」

「その友達のことを考えろ、そうすれば何をすれば良いか見えてくるはずだ」

健吾「．．．」

父親「健吾、お前に本当の事を話す。母さんは、病死したのではなく、失踪した事になっている．．．だが、母さんは、失踪する前に言った言葉がある」

美咲「大切な人を護る事は、自分を護る事にもなる。自分の為に戦う事は、大切な人の為に戦う事になる、だから私は、大切な人の為

第29話 ヒーローでも勇者でもないそいつは、大魔王に立ち向かう（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント お待ちしております

第30話 武器は、持ち主で殺すもモノと、護るモノに別れる（前書き）

読んでくださり、ありがとうございます

第30話 武器は、持ち主で殺すモノと、護るモノに別れる

「ガシ！」神埼の刀の刃を掴み、刀を止める健吾

健吾「ごめんなさい、遅くなりました」

優「野田君．．．どうして？」

健吾「何の為に戦えばいいか、分かったんです。もう、迷いません！」

健吾は神埼を蹴り飛ばそうとするが、神埼は、避け、健吾と距離をとる

健吾「泉さん、立てますか？」

泉「ごめんなさい、まだ、ちよつと無理」

拓也「じゃあ、俺が手を貸そう」

健吾、優「！？」

健吾「なんで、拓也君がここに！？」

拓也「さっき、健吾が病室に来ている途中で、少し意識が戻ったんだ、もしかしたら、『アレ』のおかげかな」

健吾「あの、拓也君」

拓也「分かっている、戦いには、参加できないが、3人を運ぶくらいなら出来る、それが言いたかったんだろ？」

健吾「はい、お願いします」

拓也は、優を連れて、凜と夢夢の元へ向かった。

優「野田君．．．自分を信じて．．．」

健吾「はい」

凜の元へ行った拓也

凜「たつ、拓也アンタ大丈夫なの？それにあそこにいるのは、健吾？」

拓也「説明は、あとだ、とにかく、ここから離れるぞ」

神埼「野田、本当に生きていたのか、しぶとい奴だ、もしかしてお

「前、俺と戦うつもりか？」

健吾「いや、お前を殺すつもりだ」

神埼「面白い事を言うなお前は、」

健吾は、4人の避難を確認する

健吾心の声「よし、避難が終わった……後は、僕が、自分の能力をコントロールできるかどうかだ

・
・
・
自分を信じろ！」

そして健吾は、手に夢力を集中させ刀を出した

健吾の頭の中に声が駆け巡った

「殺せ、壊せ、殺せ、壊せ、殺せ、壊せ、殺せ、壊せ、殺せ、壊せ、殺せ、壊せ」

ぶつ　殺せ、ぶつ　壊せ」

健吾が叫ぶ

[illegible]

健吾の周りの物が飛びつ散つた

神埼「何!？」

砂埃が晴れて行く、

健吾「はあ、はあ、はあ、はあはあ、はあ、はあ」

健吾は、健吾は能力の誘惑を断ち切り、正気を保っていた

健吾の心の声「よし、正気を保っている。凄い力を感じる、これなら．．．」

神埼「はははははははははは！面白い、どうやってその力を得たかは知らないが、ちょうど良い、これで俺の力を試すことが出来る！」

健吾「始めようか、神埼！、この戦いで、全てを終わらせてやる！
」

そして二人は、刀を構えた

次回へ続く

第30話 武器は、持ち主で殺すもモノと、護るモノに別れる（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント お待ちしております

第31話 死は、始まり（前書き）

読んでくださり、ありがとうございます

第31話 死は、始まり

刀を構え対峙する。健吾と神埼

健吾「お前が、バクでなくて良かった」

神埼「どういう、意味だ？」

健吾「時間制限も気にせず、思いつきり、戦えるということだ！」

健吾は、走って行き、神埼に切りかかかる。「ズバー！」神埼は、刀で受け止めると、周りに衝撃波が広がる「ブォン！」その影響で校舎の窓ガラスが割れ、近くに生えている木が倒れる

夢夢「きゃっ！」

遠くから見ていた。拓也達にも、衝撃波が伝わる

凜「刀を受け止めただけでこんな・・・」

拓也「俺達とは、もう次元が違う・・・」

優「野田君・・・死なないで」

神埼「少し、強くなったからって、調子に乗るなよ」

神埼は健吾を払い退ける。そして健吾に向かって斬撃を放った

「ズパッ！！」

健吾「避けきれない！」

健吾も斬撃を出し、斬撃の軌道を逸らす。

斬撃は校舎に当たり、校舎の四分の一程を壊してしまった「ガラガラガラガラ！」

健吾「危なかった」

「・・・・・・・・」

「おかしい、建物の直るスピードが遅い」

神埼「今、この場所には、俺やお前が居て、夢玉があり、こうしている間にも歪みの力が集まって来ているんだ、それがどういう意味か分かるか？」

健吾「……………」

神埼「つまり、この世界の秩序が乱れ始めているんだよ。早く俺を倒さないと現実世界に干渉するようになってっちゃうかもな」

健吾「なら、早く、お前を、倒せば良いんだろ」

神埼「無理だ、お前には、」

健吾「やってみなきゃ分からないだろ」

健吾は、また神崎に、切りかかる、物凄いスピードで二人は、刀を振るう。刀が交差するたび、辺り一面に衝撃波が広がる。「キン！」「ブオン」

切りあう、二人、健吾は、一瞬の隙を見つけ、神埼の左腕を斬り落とすが、同時に、健吾も左手首を斬り落とされた

神埼「ぐッ！」

健吾「ぐああああ！」

だが二人は、すぐに傷を治し、斬り合いを続ける。

神埼の心の声「思ったより、強いなコイツ、しかたない、アレを使うか」

神埼を少し走り出し、健吾を校庭の真ん中に誘い込んだ

健吾「待て！」

神埼の心の声「目標のポイントに入ったな」

神埼「はっ！」

健吾の足元から、バリアのようなモノがでて、健吾を包み込んだ

健吾「なんだ、これは！？」

健吾は、逃げようとし、斬りつけるがビクともせず、包み込まれてしまった

健吾「なんだこれは、お前、一体何をした！？」

神埼「なんだ、聞いて無かったのか、俺はここで、夢玉を完全に復活させる為の準備をしていたのさ」

「今の、夢玉は九割ほどは、回復しているが、残り一割がどうしても、回復しなかったから、コイツを作ったのさ、こいつには、夢力

を吸い取ることの出来る特殊なバリアだ、お前がどんなに中から斬りつけようが絶対に破れない、そして、吸い取った、夢力は夢玉に送られる、お前の夢力と魂があれば夢玉も完全に復活するだろう」

健吾「ふざけるな、クソ、ここから出せ!!」

神埼「さて、後何分、わめいていられるかな」

健吾「クソ、力が抜けて行く.....」

凜「どうする!? 健吾、捕まっちゃたわよ」

拓也「待て、何か、良い方法を考えるんだ」

健吾「まずい...意識が遠のく.....」

薄れかかった、意識の中、健吾の目に写ったのは、神埼と対峙している四人だった

神埼「なんだ、そろいも揃って、せっかく野田が逃がしてやったのに、またわざわざ、殺されにきたのか?」

優「決めたのよ.....」

神埼「何をだ?」

四人「私（俺）達は、最期で抗うってことだよ」

四人は一斉に神埼に向かって攻撃をした

拓也は、鎧を出し殴りかかり

凜は、物体浮遊の能力を使い、近くにあった大きな石を飛ばす

優は、手のひらからエネルギー弾を放つ

夢夢は、発火能力を使い神埼に向けて炎を放つ

神埼「無駄だと言う事が分らないのか?」

神埼は、刀を振るうと、その衝撃波で優以外の三人は吹き飛んだ「ぐあ!」

神埼「そう言えば、さっき、邪魔されて殺せなかったからな、まずは、お前からだ、安心しろ、殺しはしない、お前らは、全員、夢玉に魂を捧げて貰う」

神埼は、優の首を左手で掴み、右手で夢玉を持ち優の頭にあてた
健吾「やめる．．．やめてくれー！」

優「野田．．．く．．．」
「すっ」

優は、体ごと、夢玉に吸い込まれてしまった

健吾「わああああああああああああああああああああああああああああああ
ああ」

その時、健吾から光が発せられ、健吾は、バリアから逃れる事が出来ていた

神埼「おっ、お前、あのバリアをどうやって」

健吾「いい加減にしろよ、お前、よくも、よくも、泉さんを」

「スタツ」

神埼「消えた！？」

「ぶしゅ！」

神埼の左腕が宙に舞う

神埼「なっ！？」

健吾は掴まれていた優の体を左手で支えている

神埼は腕を治し全力で健吾に向かって斬撃を放つ。校舎を斬った時

の三倍は、ありそうな、斬撃が健吾を襲おうとする

健吾は優は支えたまま、片手で刀を振るうと、神埼よりも、でかい、

斬撃が出て、神埼の斬撃を押し返した

神埼「バカな、ぐあー！」

斬撃を食らった神埼は、右腕と左足を持ってかれていて、倒れている

健吾は静かに、優の体を置き、神埼の方へ向かった

神埼「おっお前、一体何なんだ．．．」

健吾「そんなの、僕が知りたいよ」

健吾は刀を神埼の首に置いた

健吾「良い残す言葉はあるか？」

神埼は左手で夢玉を持ちこう言った

神埼「後悔しやがれ．．．」

「ブシュ！！」そうして神埼は光の粒になり、現実世界からも幻界からも消えた」

次回に続く

第31話 死は、始まり（後書き）

感想 アドバイス 質問 ポイント お待ちしております

第32話 命を懸けられるモノそれは、命（前書き）

もう少しで、クライマックスです。よろしければ、最後までお付き合ってください

第32話 命を懸けられるモノそれは、命

終話編

完全に消えた神埼

健吾は、地面に膝を着き泣いていた。

健吾「いつ、泉さぁん……」

健吾の元に拓也、凜、夢夢の三人がやって来た。

凜「健吾、優は、どこへ行ったの！？、何があつたたの？」

健吾「うっ、うっ、夢玉に、体ごとを吸い込まれてしまったんです」

凜「そんな……」

健吾「護れなかった……また護れなかった」

夢夢「待って、諦めるのは、まだ早いわ」

健吾「！？雨音さん、何か、方法があるんですか！？」

夢夢「まだ、泉さんは、夢玉にまだ吸い込まれて、間もないから、まだ、自分の形を失っていないはず、だから誰かが、夢玉の中に入り、泉さんを探し、出せば……」

健吾「分かりました。僕がいきます」

凜「大丈夫なのアンタ！？」

拓也「そうだ、健吾、お前さっきまで戦っていたんだぞ」

健吾「この四人の中で、一番、夢力が残っているのは、僕です。それに……僕が行かないといけないんです！！」

夢夢「分かったわ、少し待って準備するから」

夢夢は、健吾の頭に夢玉をあてた

夢夢「いい、健吾君、これからあなたを夢玉の中に入れるけど、私も中は、一体どうなっているか分からない、けれど必ず、まだ、泉さんは、居るわ。」

「私は、あなたの夢力の感覚を見失わないようにしています。健吾君は、泉さんを見つけたら、夢力を上げて下さい、それが、戻す、合図です」

「泉さんは、恐らくあと、30分程しか持ちません。それまでに何とか泉さんを．．．」

健吾「分かりました」

凜「健吾、優を頼むわよ」

拓也「大丈夫だ、お前ならできる」

健吾「はい」

夢夢「じゃあ、行くわよ、『はっ』」

健吾は、夢玉の中に吸い込まれていった

夢玉の中は、上下左右も無く、重力も無い、そして、暗いのは無く、黒い空間だった、自分の姿以外何も無く、全てが黒い。こんな場所にいつまでも居たら、頭がおかしくなるような、そんな空間だった

健吾「泉さんは、一体どこに、居るんだ．．．」

「泉さん」

健吾は声を出す、周りに響くだけで、返事は、無かった

健吾「一体、僕が入って来て、どれくらいの時間が経っただろうか」
周りの情報が余りに少ないため、健吾の五感はおかしくなり始めていた」

健吾「まずい、このままじゃ、一体どうすれば」

「そうだ、泉さんの夢力の感覚を探せば・・・」

健吾は目を閉じ優の夢力を集中した、

健吾「もつとだ、もつと集中するんだ。泉さん・・・！」

「見つけた！」

健吾は今も消えかけそうな、泉の感覚を感じた

健吾「向こうだ」

健吾は感覚のあった方角に一目散に向かった

健吾「見つけた、泉さん」

倒れていた泉を抱える健吾

健吾「大丈夫ですか、泉さん、泉さん」

軽く揺する健吾

優「のっ野田君、どうしてここに？」

健吾「泉さんを助けに来たんですよ」

優「なんで、こんな危険なところにまで・・・」

健吾「当たり前じゃないですか、大切な人の為なら、どんな所にも行くよ！」

「さあ、みんな待っている、帰ろう」

優は泣きながら言った

「うん、ありがとう」

健吾は、夢力を上げ合図を送り、幻界へ戻った

次回に続く

第32話 命を懸けられるモノそれは、命（後書き）

もうすこし、続きます

第33話 明日が来るのは、当たり前じゃなかった（前書き）

ここまで、読んでいただき本当にありがとうございます

第33話 明日が来るのは、当たり前じゃなかった

夢玉の中から無事に帰って来た、健吾と優

凜「優」

泣きながら優の元へ駆け寄り、抱きつく凜

凜「良かったね、本当に良かったね」

優「うん、うん」

拓也は、健吾の元へ来て、手を出した。健吾はその手を強く握った
「がし！」

拓也「良くやったな、健吾、お前本当に、すげーよ」

健吾「いや、みんなが居てくれた、おかげだよ」

夢夢「健吾君、夢玉は、健吾君を一時的に取り込んだ事によって、完全に復活したわ！これで、また世界の崩壊を防ぐ事も出来るわ、本当にありがとう」

健吾「雨音さん一つお願いがあるんですけど」

夢夢「何？」

健吾「僕と守護者を変わって下さい！」

四人「！？」

夢夢「えっ、でも・・・本当に良いの？」

健吾「はい」

凜「でも、守護者になったら現実世界に戻れなくなるんじゃない・・・」

夢夢「それは、大丈夫、神埼が夢玉の制約を変えた結果、幻界に体を固定化しなくても、幻界に行けるようになったの」

優「ふう、良かった」

夢夢「でも、本当に良いの？」

健吾「はい、それが、正統能力者としての、僕の務めです。それに、今なら、母さんの思っていた事分かる気がするんです」

拓也「雨音ちゃん、大丈夫、健吾なら、上手く、やってくれるさ」

夢夢「分かった、ありがとう」

夢夢「これより、守護者交代の儀を行う、汝、世界を護る為その力を使う事を我に誓うか？」

健吾「誓います」

夢夢は、健吾の頭に手をやり、夢玉の力で、邪念や邪心が無いことを確認する

夢夢「汝、その言葉に疑い無き。よって夢玉を授ける・・・」

夢夢は健吾に夢玉を手渡した

夢夢「これで、健吾君は、もう守護者になったわ」

拓也「以外に、結構簡単なんだな」

夢夢「行為は、簡単だけど、これが、この世界でずっと伝わって来た儀式なの」

「これで、私も現実世界に、帰れるわ」

優「雨音さんは、現実世界に戻ったら、どうするの」

夢夢「とりあえず、帰ったら、考えるわ」

凜「じゃあ、帰りましょう！」

拓也「そうだな」

四人が帰ろうとした時、嫌な感覚が五人を襲った

「！？」「五人は、空を見上げる

夢夢「この感覚は、美咲さんが死んだ時と同じそれ以上に大きい、歪みの力が暴走している」

空、歪みの力が暴走し空間が歪んでいた

凜「なんでよ、神埼は、もう死んだんでしょ、なのにどうして」

健吾は神埼が死ぬ前に言った言葉を思い出す

健吾「あいつは、確か、最後に夢玉を持って『後悔しやがれ』と言っていたけどまさか！」

夢夢「きつと、その時にやったんだわ．．．まずい、このままじゃ、世界が」

健吾「．．．．．」

健吾「みんな、先に現実世界に戻って下さい。アレは、僕が抑えま
す」

優「駄目だよ！美咲さんの二の舞になるわ、死んじゃうよ、野田君．
．．」

健吾「この世界を護るのが、いや、大切な人を護るのが、守護者としての僕の、野田健吾の務めなんです」

「大丈夫です、僕は、そう簡単に死にません、一緒に明日を迎えましょう」

そう言うとき健吾は、夢玉の力を使って、空の歪みの中心に飛んでいた
った

四人「野田君、健吾、！！」

そして、健吾が飛んで行った数分後、歪みの力の暴走は、無くなった

健吾「ここは、どこだ？」

目を覚ました健吾は、周りを見渡すとそこは、夜の病院のベッドの上だった、起き上がる健吾

健吾「生きてる！？」

その病室には、健吾のベットにもたれて寝ている優と夢夢と床に毛布を敷いて、寝ている拓也と凜が居た、そして病室の端で椅子に座っている、父親が居た

父親「やっと、起きたか、半日以上も寝ていたぞお前」

「大変だったんだぞ、ここに居るみんなは、今日はここに、泊ると聞かなくて、医者も最後は、根負けして、宿泊の許可を出していたよ」

健吾は少し笑いながら四人を見た。時計の針は、11時57分を刺していた。

父親「どうして、こうなったかを聞いても、この4人は、答えてくれなくてな、健吾、お前は、答えられるか？」

健吾「ごめん……」

父親「じゃあ、いい、答えなくても」

そう言っていると父親は、立ち上がりドアへ向かった

父親「健吾、いい友達を見つけたな」

健吾「うん、大切な人だよ」

父親「そうか」

そう言っていると父親は病室から出て行った

健吾は時計を見ると12時を回ろうとしていた、そして、12時になった

健吾「初めまして、今日」

そう言っていると健吾は、みんなのいる病室でまた眠りに入った

朝、優が目を覚ますと、そこには、すでに起きてる健吾が居た

健吾「おはようございます……」

優「のっ、野田くん！」

優は泣きながら健吾に抱きついた

優「良かった、本当に良かった、心配したんだからね……」

優の声で他の3人も目を覚ます。

拓也「健吾、目を覚ましたか！て、アレ、俺達邪魔かな」

優「そんなんじや無いよ、桜井君！これは、その嬉しくて．．」

優は健吾から離れて顔を真っ赤にして拓也に言った

凜「照れるな、照れるな、それにしても、よく無事だったわね、健吾」

健吾「あの、歪みの力を抑えた後、僕、どうしたんですか？」

拓也「あの後、大変だったんだぞ、お前は、重症を負って空から落ちてくるし、それを、キャッチして傷を治して、みんな限界ギリギリだったんだからな」

健吾「すいません、迷惑かけて．．」

凜は健吾の頭を軽く叩く「パッチ！」

凜「何言ってるのよ、あんたが居なかったら、この世界、終わってるわよ、もっと、堂々としなさい堂々と！」

健吾「はっ、はい分かりました。」

それから少し雑談が続いた

健吾「そう言えば、雨音さんこれからどうするんですか？戸籍とかも、もう」

夢夢「ああ、その事なんだけど、話あって、泉さんと一緒に住むことにしたわ」

泉「戸籍とかの問題は、一応、私の保護者をやってくれている人に頼んでみようと思うの」

夢夢「記憶がありません、とか、嘘をつけば、外見が小学生の私なら何とかなるわきつと」

健吾「そうですか、良かったです」

凜「拓也も健吾も明日には、退院出来るらしいから、明日みんなでパーティーでもしましょうよ」

拓也「何のパーティーだそれ？」

凜「世界を救ったパーティー？別になんだっていいわよ」

11時を回ったあたりで、凜が拓也に言う

凜「拓也、ちょっと、着いて来て」

拓也「なんだよ、一体？」

凜「いいから、着いてきなさいよ」

凜は拓也を引っ張って病室から出て行った

健吾「行っちゃた、なんだろう？」

3人になった病室

夢夢「あつ、私ちょっと、コンビニに買い物があるんだつた、ちょっと行つて来るね。」

夢夢は病室から手出て行く「パタン」

夢夢「はあゝあ、私も早く恋したいな」

屋上にいる凜と拓也が少し離れて話をしている

拓也「何か俺に用か？」

凜「拓也、アンタ、私の事、どう思っているの？」

拓也「どうて、幼馴染で気の合う友達だろ、俺達の関係って」

凜「そうね、じゃあ．．」

拓也の元に歩いていく

凜は、拓也の胸ぐらを掴む「がし！」

凜「拓也、目をつぶりなさい！」

拓也「は？、なんでだよ急に」

凜「いいから、ホラ！」

拓也「分かったよ」

目をつぶる拓也

拓也の心の声「なんだ？叩かれるのか？何かまずいこと言ったかな俺？」

目をつぶった拓也の唇に温かい感触が伝わった

拓也「!？」

拓也は、驚いて目を開けると、

凜が『キス』をしていた

凜「これで、アンタと私は、幼馴染で気の合う友達、とは、違う関係になったそうでしょ、ひとりの女の子に対してアンタなんか、言う事無いの？」

拓也「相変わらず、強引だなお前は、まあ、そんなところが好きだからな俺は・・・」

拓也「こんな、俺で良かったら、付き合ってください」

凜は拓也の胸にもたれる

凜「遅いのよ・・・バカ」

健吾の病室

夢夢が居なくなり、静まる病室

ふたり「・・・」

健吾、優「あっあの！」

同時に言ってしまった、ふたり

健吾「泉さんからどうぞ」

優「いえ、野田君からどうぞ」

健吾「じゃあ、僕から話します。・・・」

「手紙ありがとうございます。あの手紙のおかげで、今僕は、こうして生きていられています。」

「僕も、いつ泉さんのことが、すっ好きです。でも僕は、泉さんが思っているよりも、汚くて、醜くて、泉さんが思っているほど、優

しい存在じゃありません．．．．．」

優「野田君は、そう言うところが、優しいんだよ．．．私は、そんな野田君好きなの、だから言わせて」

健吾「僕も言いたいので、一緒にいいですか？」

優「うん」

健吾、優「（僕と）（私と）付きあってください！！」

殆どの人が昨日世界が滅びかけたと知らないで生きている今日、この世界に新しいカップルが、二組できた

第33話 明日が来るのは、当たり前じゃなかった（後書き）

この物語は夜、散歩をしている時に、偶然思いついた、世界観にキャラクターをあてはめ作ったものです。今まで小説など、ほとんど、読んだこともありませんでしたが、書きたいと衝動が走り、一気にここまで来ました。本当に未熟で分かりにく所や、誤字、脱字が多かったと思いますが読んでいただき、本当にありがとうございます。この後の日常編を少し書くかも知れないので、気になる方は、また来て下さい あひる

第34話 彼女との登下校は、高校生の夢（前書き）

。
お願いします

第34話 彼女との登下校は、高校生の夢

健吾が退院した数日後

健吾のアパート

健吾は、テレビを見ながら食パンを二枚出してマーガリンを付け食べている

健吾「たしか、初めて、3人にあつた日も、こんな朝だったなあ」

健吾は、学校の支度をすませ、部屋から出ようとした時、インターホンが鳴った。「ピンポン！」

健吾「はい」

健吾がドアを開けるとそこには、優と、ランドセルを背負った夢夢が居た。

夢夢「おはよう、健吾君」

優「おはよう、野田君、あの．．一緒に学校まで行こう」

健吾「おはようございます、泉さん、雨音さん、今、ちょうど支度が終わったとこなので、一緒に行きましょう」

健吾はアパートを出て、優と夢夢と一緒に登校する

健吾「雨音さん、もう学校に行けるようになったんですか？」

夢夢「うん、いろいろと、大変だったけど、今日、初めて、行くの」

「本当は、私も高校に行きたかったんだけど、この体じゃね」

優「夢夢ちゃん、ランドセルとっても、可愛いよ」

夢夢「ありがと、でも、私も早くセーラー服着たいな」

健吾「大丈夫ですよ、ちゃんと5年後には、着れますから」

夢夢「5年後か、遠いな」

それから、数分程、話をしていると、夢夢の小学校の近くまで来た夢夢「じゃあ、行つて来るよ」

夢夢は、健吾と優に手を振る

優「ちゃんと、友達作ってね」

夢夢は、学校に入って行った

健吾「じゃあ、行こうか」

優「うん」

二人は、また歩き出す

優の心の声「どうしよう．．．こういう時って、手とか、つないじやっても、いいのかな」

健吾の心の声「どうしよう．．．こういう場合、手とか握っちゃても、いいのかな」

優の心の声「もう、付き合ってるんだし、よし！」

健吾の心の声「もう、告白もしたんだし、よし！」

健吾、優「あ、あの」

健吾「あ、泉さんからどうぞ」

泉「いえ。野田君から、良いですよ」

健吾「．．．」

「じゃあ、学校の近くまで、て、手をつないでも良いですか？」

「くす」優は、少し笑う

優「私も、同じ事言おうとしてた」

「パシ」健吾の手を握る優

優「じゃあ、行こー！」

健吾「はい」

拓也の家

拓也の家の玄関で叫ぶ凜

凜「拓也ーまだなの、置いてくわよー！」

拓也「ちよつと、待てよ、今、行くつて」

拓也は、食パンをくわえながら、飛び出て来た

凜「ちゃんと、食べてから来なさいよ」

拓也「お前が、叫んで呼ぶからだろ」

凜「まあ、いいわ、行くわよ」

拓也「俺の意見、無視かよ．．．」

拓也がパンを食べ終わると、凜は、拓也の前に手を出した

凜「んっ！」

拓也「なんだ？」

凜「ホント、鈍感ねー、登校中に女の子が手を出しているんだから少しは、察しなさいよー」

拓也「ああ、繋ぐのか．．．」

拓也は、凜の手を握る

凜「たく」

「．．．」

凜「どうするの？」

拓也「どうするつて、何が？」

凜「だから、いつ、優達に、私達が付きあってるか、言っつてことよ」

拓也「うーん。そうだな、見つかったからで、いいんじゃないか、もし聞かれたら、付き合ってます、て、言えばいいし」

凜「たく、アンタは、こういう事は、ちゃんと、タイミングを考えて言うものよ．．．」

拓也と凜が、交差点の角を曲がると、手を繋いだ健吾と優が居た

4人「あっ！！」

凜「アンタ達、もう付き合ってるの！？」

優「凜ちゃんも桜井君と！？．．．」

拓也「これは、見たまんま、解釈しちゃて良いんじゃないか」

健吾「そうだね．．．」

拓也「じゃあ、4人一斉に言おうぜ」

凜「そうね、タイミングも関係無いわ、もう」

優「うん」

健吾「分かった」

「（僕 私 俺 私）は、（泉さん 野田君 凜 拓也）とつきあ
っ……」

「キーン、コーン、カーン、コーン」

拓也「やべ、遅刻する、みんな、走れ！！」

凜「ちよっと、どうすのよ、これ」

優「また、今度ってことで」

健吾「そうだね」

そう言うのと、4人は、学校に向かって走って行っていく

「ガラ！」

教室になだれ込む四人

四人「スイマセン、遅くなりました」

先生「また、お前らか、怪我して入院したり、四人揃って休んだり、遅刻したり、一体、お前達四人は、何処で何をしていたんだ？」

健吾「えーと……夢のようで夢じゃないリアルな世界で大切なモノ
を見つけてきました。」

第34話 彼女との登下校は、高校生の夢（後書き）

ここまで、読んでいただき本当にありがとうございました

あらためて、キャラ紹介（前書き）

前に一度、作中の中でキャラ紹介をしています。主要キャラをまとめて紹介したいと思います。投稿するタイミングが悪かったため、この紹介は、第33部。第43部に投稿ので、ご了承下さい

あらためて、キャラ紹介

野田^{のだ} 健吾^{けんこ}

高校1年生の男子、この物語の主人公。性格は、優しいが、心配性で、人見知り、基本、臆病者だったが、拓也達と出会い、少しずつ成長している。一人暮らしをしているので、料理は、得意で、家事は、大概できる。苦手なものは、女の子だが、現在、一応、優と付き合っている（まだ、手をつなぐ程度）友達の為に、死を覚悟して戦ったこともあり、以外に熱い一面もあるが、基本は、へたれ。身長は、低くもなく高くもなく、平均的で、体型は、少し痩せ型。ただいま、アパートで一人暮らし、携帯の電話帳には、二桁いない・・・勉強は中の中

能力・日本刀を出し、刀から斬撃を出せる。5人の中で、一番強い

泉^{いずみ} 優^{ゆう}

健吾と一緒に高校に通う、高校1年生の女子。性格は、優しくて、おとなしいが、たまに、積極的な行動をすることもある。料理が得意で、家事もできて、しっかり者だが、少しドジ一面もある。両親は、昔、事故で亡くしているので、マンションで、今は、夢夢と一緒に二人で住んでいる。凜や拓也、健吾と会うまでは、暗い性格をしていたが、今は、大分、明るい性格になった。可愛い顔をしているが、体型が、小柄で小さく、貧乳で、本人もそのことを気にしている（一応、健吾と交際中、手をつなぐ程度）勉強は、上の上能力・シールドを張る事ができ、手からエネルギー弾（かめ〇め波のようなモノ）を出せる

桜井^{さくらい} 拓也^{たくや}

健吾と一緒に高校に通う、高校1年生の男子。性格は、明るく、リーダーシップがあり、誰とでも気がなく話せる。体型は、長身で、細身だが筋肉はついている。それで顔はイケメンなので女子にモテル。

苦手なモノは、『凜』。凜とは、幼稚園からの幼馴染だったが、凜の積極的なアプローチによりただいま交際中（告白の時にキス経験あり。詳しくは、第33話参照）運動神経は、学校トップクラスだが、勉強は、下の中

能力・右腕に黒い鎧が現れ、それで攻撃をする（攻撃力がウリ）

相川 凛
あいかわ りん

健吾と一緒に高校に通う、高校1年生の女子。性格は、口数が多く、みんなの盛り上げ役だけど、素直になれないこともあり、基本、ツンデレ。体型は、女子の中では、少し背が高く、出るトコは、出て、締まるところは、締まっている、モデルのようなスタイルで、顔も美人で、男子にモテル。拓也とは、幼稚園からの幼馴染だったが、積極的なアプローチによりただいま交際中告白の時にキス経験あり。

（詳しくは、第33話参照）運動神経は、学校トップクラス。勉強は、上の下

能力・薙刀を出せて、物体浮遊も出来る（動かないモノに限る）

雨音 夢夢
あまね むむ

優のマンションに住んでいて、近くの小学校に通う小学5生だが、本当の歳は、健吾達と同級生の15歳。幻界に守護者として5年間いたので、体の成長が5年分遅いため、小学校に通っている。性格は、幻界に5年間、ほとんど、人と関わりない生活をしていた為か、15歳にしては、性格が幼い。ちよっとしたイタズラや、面白いことが大好き。体型は、小学5年生の女の子でまだまだ、おこちゃま。

好きな食べ物カレーライス。恋愛経験は無し？
能力・発火能力、他にも、優ほどじゃないが、シールドも張る事が
出来き、5年間、守護者をしていたので、色々な技が使える

あらためて、キャラ紹介（後書き）

あらためて、キャラ紹介

第35話 人に知られたくない秘密は、唐突にばれる（前書き）

内緒話編です

久々のスタートとです

今回から、コメディ的な感じで、あの五人がまた、トラブルに巻き込まれます

お楽しみに

第35話 人に知られたくない秘密は、唐突にばれる

内緒話編

あの戦いから約一カ月。今は六月の下旬の平日のお昼時だ、学校は昼休みの時間。あの四人はいつも通り机をつけ、お弁当を食べたいた。

凜「あゝも。本当に暑いわね」

凜は、お弁当を食べながら、暑さについて愚痴っていた。

凜「あゝ、何で日本には、春夏秋冬があるのかしら、いつそ、春秋になればいいのに！」

拓也「何をメチャクチャ言っているんだお前は、夏と冬に謝れ」

健吾「確かに暑いけど、せつかく、季節があるんだし、もっと季節を楽しめばいいんじゃないかな」

凜「例えば？」

健吾「えゝと……」

優「例えば、明日からプール開きだし、泳ぐ事を楽しむのも、夏の良いところじゃないかな」

凜「明日からプール開き！？忘れてたわ、帰ったら水着用意しないと！」

凜は、忘れていたイベントを思い出し子供みたいに喜んでいる

拓也「凜は、昔から、泳ぐ事が好きだからな」

健吾「へえーじゃあ、泳ぐ事も得意なんですか」

健吾は、凜に尋ねる

凜「当然よ、なんたつて私は水泳で県ベスト4になったんだから」
拓也「俺は16だったけどな」

健吾「二人とも凄いなだね」

拓也「まあな、俺はともかく凜はあと少しで関東大会に出れたからな」

拓也「凜、あんまり、プールだからと言ってはしゃぐなよ、小学生の時大変だったろ」

少し呆れた口調で拓也が言う

それを聞いた優が拓也に尋ねる

優「何かあったの？」

拓也「小5のプール開きの時こいつ、はしゃいで、家から水着を着てったんだよ、そしたら、パンツを忘れて、その日短いスカートを穿いて来てたから、ノーパンで居る訳もいなくて、仕方なく俺のブリーフを……」

「ドカ！ボキ！グリ！メリ！」

次の瞬間、健吾と優が見たのは、床に倒れている拓也と拓也を見上げている凜であつた

凜がしゃがみ、拓也の胸ぐらを掴む

凜は、物凄く怖い笑顔で

凜「たーくーや」

「何を言おうとしたのかなーそれは、二人だけの秘密でしょー」

拓也「スマンかった、忘れていました。けど、お前やりすぎだぞ、

一瞬、花畑が見えたぞ！」

凜「そうなんだ」お花畑が見えたんだ」どんな花があつたか知りた
いからもう一度見て来てくれない（ニコ）」

拳を構える凜

拓也「分かった、本当に俺が悪かった、この記憶は、俺の海馬から
削除しとくから勘弁してくれ」

凜「分かればよろしい、あと」

凜は健吾と優の方を見る

健吾・優「ゾク！」

凜「けんご、ゆう」

健吾・優「は、はい」

凜「二人は何も聞いてないわよね？（ニコ）」

物凄く怖い笑顔で聞く凜

健吾「もっ、勿論です。」

優「なっ、何も聞いてないよ、いいえ、聞こえませんでした」

凜「そう、良かった」

「じゃあ、お弁当を再開しましょうか」

「拓也、何、寝てるの、早く食べましょ」

健吾達の昼休みは次話も続く

第35話 人に知られたくない秘密は、唐突にばれる（後書き）

今回は凜がメインになりました。

もし、読んでくれた方でお暇があれば、どのキャラが好きかなど教えてくれればとても嬉しいです

第36話 泉さんのお宅は、カレー（前書き）

羨ましいくらい、青春してます

第36話 泉さんのお宅は、カレー

前回からの続き

凜「拓也、何、寝てるの、早くご飯食べましょう。」

拓也「あ、ああ」

ボロボロの体を起こし、席に戻る拓也

拓也「アレ、健吾、今日は、コンビニ弁当なんだな」

優「珍しいね、健吾君がコンビニ弁当なんて」

凜「また、寝坊でもしたの？」

3人が健吾に聞く

健吾「いやゝ実は、昨日冷蔵庫が壊れちゃって中身が全滅しちゃって、朝は、ご飯とふりかけで昼は仕方なく、コンビニで買って来たんだ」

優「.....」

優は、黙って何かを考えているようだ

拓也「この時期に壊れるなんて最悪だなホント」

健吾「そうなんだよ、新しいの買うお金も無いし、昨日電気屋さんで電話したら、今、修理の注文が多いから数日はかかるって言われたし、これから数日はコンビニとファミレスで頑張らないと」

そんな話をして昼休みが終わり、下校の時間になった

4人はいつも途中までは、自転車を押して話しながら帰っている

健吾「あつ、僕、ちょっとコンビニ寄って来るから、3人は、先に帰ってて」

拓也「おう、分かった、じゃあな、健吾」

凜「健吾、明日、水着忘れちゃだめよ」

健吾「分かりました、帰ったらすぐ準備します」

そして健吾はコンビ二向かって行った

3人で少し歩くと、優がこう言いだした

優「あつ、私も、ちょっとコンビ二に用があるんだった、ゴメンね、ちよつと行っててくる」

そう言うとは、自転車で乗ると健吾を追いかけて行った

凜「優も明日水着忘れちゃだめだよ」

優「分かった」

自転車を漕ぐ優、健吾は、自転車を押していたので、すぐに追いついて、優は健吾の横で自転車を止めた

健吾「泉さん、どうしたんですか？」

優「あつあの、健吾君は、冷蔵庫が壊れてて困っているんだよね？」

健吾「はい、そうですけど」

優「だったら、あの、今日、私の家でご飯食べない？、夢夢ちゃんも居るし、みんなで食べたほうが楽しいし、…………私達、付き合ってるだから…………」

顔を真っ赤にして言う優。

健吾「じゃあ、お願いして良いですか」

健吾も顔を赤くして言った

優「ちなみに、今日は夢夢ちゃんのリクエストでカレーなんだけどいいかな？」

健吾「はい、カレー大好きなのでお願いします。」

優「うん！」

健吾「それじゃあ、一回家に帰って着替えてから、泉さんの家に行きますね」

優「分かった、作って待ってるね」

そして、健吾は、一旦家に戻り、優は自宅でカレーの準備に向かった

第36話 泉さんのお宅は、カレー（後書き）

次から、トラブルが・・・さて一体どうなる！？

第37話 予想外の出来事は、想定外の事でもある（前書き）

トラブル発生です

第37話 予想外の出来事は、想定外の事でもある

健吾は家帰ると、凜に言われた通り、水泳の用意と明日使う教科書を鞆の中に入れた

健吾「これで、良しと」

そして健吾は、着がえをすませ、自転車で、優の家のマンションに向かった

優は家に帰ると、健吾と同じように明日の支度を終え、カレーを作る為台所へ立っている、優は、一人暮らしが、長いた為、テキパキと料理をこなしていく。

「タツタツタツタ」 「ジュージュー」 「コトコト」

午後6時頃、「ピンポン」優の部屋のインターホンが鳴った。

優「はい」

玄関を開ける優「ガチャ」

健吾「こんばんわ」

優「こんばんわ、健吾君。さあ、どうぞ上がって」

健吾「お邪魔します。」

健吾が部屋に入るとそこはカレーの良い匂いがしていた

健吾「もう、完成ですか？」

台所に立つ優に聞く健吾

優「あと、もう少しで完成するよ」

健吾「雨音さんは、まだ帰って来て無いんですか」

優「今日は友達の家に行くって言っていたから、もう少しで帰って来ると思うわ」

「完成するまで、テレビでも見て待ってて」

健吾はテレビを見ながらカレーが完成するのを待っていると、幻界に歪みの力が多く溜まって来ているを感じた。

健吾「泉さん、少し、幻界に行つて、守護者の仕事をしてきます。」

健吾は、その場で、横になり、目を閉じ、魂を幻界に向かわせる

優「ちよつと、待って、私も行く」

そう言つと優は、健吾の隣に来て、手を握り、横になり、限界に向かった

幻界の学校のグラウンドに居る健吾、少し経つと、健吾の目の前に、光の粒が集まり、優が現れた

健吾「アレ！？泉さん」

優「ごめんね、健吾君、着いてきちゃった・・・迷惑だった？」

健吾「いや、迷惑なんて、そんな事無いですよ、泉さんは、心配して、ついて来てくれたんですね？」

泉「うん・・・」

健吾「だったら、気にしないで下さい。」

「すぐ、終わらせますので」を

そう言つと健吾は、夢玉を取り出し、夢玉の力で、溜まっていた、歪みの力を消した。

健吾「これで、良しと」

優「もう、終わり？」

健吾「はい、これで、終わりです、じゃあ、戻りましょう」

健吾は優の手を掴み、帰りたいと願つと、健吾の体が光の粒になつていくのと同時に、優も帰りたいと願い優の体も光の粒になつてい

つた。

優「じゃあ、戻ったら、夢夢ちゃんか帰ってきたら、ご飯にしよ」

健吾「はい！」

そうして二人は、幻界から消えて行った

『自分』の手を握っていた

健吾・優「えっ!？」

健吾の心の声「おかしい、おかしいぞ、待て、落ち着け健吾、まず状況の把握だ、まず目の前に自分が居る、そしていつもより目線が低い、自分の着ている服が変わっている、控え目に膨らんでいる胸……」

健吾は目の前に居る自分に話しかける

健吾「すつ、すいません、鏡つて何処にありますか？」

もう一人の健吾「こっ、コッチ」

震えた声で洗面台に案内するもう一人の健吾

そして、鏡を見ると、健吾は優の体に、優は健吾の体に入れ替わっていた

健吾・優「えー……………!!!!!!」

第37話 予想外の出来事は、想定外の事でもある（後書き）

感想、アドバイスなどお待ちしております。

第38話 入れ替わりは、現実に起きたら本当に大変（前書き）

さあ、これからどうなるか・・・

第38話 入れ替わりは、現実に起きたら本当に大変

優「けっ、健吾君と、かつ体が入れ替わってる、何で？、どうして？」

健吾と泉は洗面台の鏡の前で、自分の姿に混乱している

健吾「泉さんで良いんですよ？とりあえず、落ち着いて下さい」
自分の体に向かって言う健吾

健吾「これは、きつと夢です」

優「夢？そうだよね夢だよね・・・」

そう言う二人は向かい合い、黙って、目の前にある、自分の顔に手をやり

健吾「行くよ」

優「うん」

健吾・優「いつせーの！」

二人は自分の顔をつねった

健吾「いてててててててて！」

優「きゃっいったーい」

二人は改めて鏡を見るが何も変わっていないかった

健吾・優「・・・ゆっ夢じゃない・・・」

そんな時、玄関から声が

夢夢「優ちゃん、ただいまー、男の人の靴があるけど誰か来てるの？」

廊下を歩きながら、二人の方に向かう夢夢

優「夢夢ちゃん（泣き）」

優は、廊下に居る夢夢に泣きながら、抱きついていった（健吾の体で）

「がし！」

夢夢「えっ えっえっ何この状況？健吾君、どおしたの、恥ずかしいから離れてよ（困）」

夢夢は、状況が読みこめず、とても困っている。

優「私が健吾君で、健吾君が私で、どうしたらいいかもう分かんないよ」

夢夢「すいません、健吾君『まったく意味が分かりません、離れて下さい』」

健吾は、夢夢に近づき、夢夢に、こうなったおおよその経緯を話す健吾「簡単に説明すると、僕と泉さんの意識が入れ替わってしまったみたいで．．かくかくしかじか（以下省略）」

夢夢「なるほど、そうゆう事だったのね、つまり、今、優ちゃんの体に居るのが健吾君で、健吾君の体に居るのが優ちゃんって訳ね」

健吾「はい、その通りです！」

夢夢「原因は、あれね、手を繋いで、幻界に行って、戻って来る時に二人魂が、違う体に入って、しまったのよ」

優「夢夢ちゃん、戻る方法は無いの？」

夢夢から、抱きつくのをやめて、優が聞いた

夢夢「美咲さんから、ずいぶん前に幻界に居た人にも同じようなことが起こった事があると聞いたことが在るよ」

健吾「じゃあ、戻る方法も知っているんですか！？」

健吾が期待を持った口調で夢夢に聞く

夢夢「もう一度、幻界に行って手を繋いで戻れば、元通りに戻ると

聞いたよ、ただし．．．」

健吾「ホントですか!？」

それを聞いた健吾は、夢夢の話の途中で、幻界に行こうとするが、どうやっても幻界に行く事が出来なかった

健吾「あれ？どおして、行けないんだ!？」

夢夢「二人は、入れ替わって直ぐだから、その体に慣れてないから、幻界に行く事が出来ないんだよ」

優「じゃあ一体どうすればいいの？」

夢夢「まず、元に戻るには、体に慣れないといけないから、まず二人のいつもの生活をして体を慣らして行くのが、早く戻るコツだよ、ずいぶん前の守護者の時は、五日程で元に戻れたと聞いているよ」

健吾「じゃあ、学校にも行かないといけないんですか!？」

健吾が重い口調で夢夢に聞く

夢夢「そうだね、家で、じっと、しているだけじゃ、体が慣れないから、ちゃんと学校に行った方が早く戻れるようになるよ」

夢夢が明るい感じで二人に言う

優「もしかして、夢夢ちゃん、この状況、楽しんでる？」

夢夢「そんなこと、ないよ、ただ、貴重な体験だし、二人とも少しは楽しんでみたら？」

健吾・優「楽しめないよ!」

と言い終わったその時、優のお腹から「ぐうぐう」と鳴る（健吾の体）

顔が赤くなる優

健吾「すいません、僕、お腹が空いていたので．．．」

夢夢「じゃあ、とりあえず、三人でカレー食べよう!」

優「うん．．．」

そう言つて優は、台所に行きカレーの準備に取り掛かった

続く

第38話 入れ替わりは、現実に起きたら本当に大変（後書き）

感想、質問、アドバイス、お待ちしております

第39話 秘密とは、知られたくない事（前書き）

感想、質問、アドバイス、お待ちしております

第39話 秘密とは、知られたくない事

カレーの準備が出来、三人はテーブルに着いた

優「どうぞ、召し上がれ」

夢夢「いただきまーす」

健吾「いただきます」

一口食べる健吾

健吾「泉さん、とても美味しいです」

優「ありがとう」

夢夢「優ちゃんは、料理が得意で、カレーだけじゃ無く、他の料理も美味しいんだよ」

優「そんなこと無いよ、普通だよ」

明るい会話が続いたが、これからどうするか、健吾が話を切り出した

211

健吾「これから、どうしましょう？」

健吾「とりあえず、相川さんと拓也君に、この状況を説明したほうがいいですかね？」

優「そうだね、学校で生活することを考えると、二人には、入れ替わってしまった事を説明した方がいいかもしれないけれど・・・恥ずかしいですね」

健吾「確かに、相川さんになんて言われるか・・・」

優「出来れば、この事は、三人だけの秘密で終わらせたいな」

夢夢「確かに、拓也君と凜ちゃんに、入れ替わった事を話してしまったら、健吾君と優ちゃんの接し方が逆になるから、周りのみんなに変に思われるかもね」

健吾・優「それは、嫌だ・・・」

優「じゃあ、この事は三人だけの秘密と言う事で、いいかな？」

健吾「分かりました」

夢夢「うん」

カレーを食べ終わり、夢夢が健吾に聞く

夢夢「健吾君、今日は此处に泊って行ったら？」

健吾「!？」

「えっでも女の子の家に泊まるなんて・・・」

健吾は戸惑いながら言う

夢夢「だって、二人とも、お互いの体の事知らないでしょ、だから、一緒に居たほうが良いと思うけど」

健吾「そうですけど、泉さんが、なんと言うか・・・」

優「私も泊っていった方が、いいと思うな」

健吾「それじゃ、お言葉に甘えて、今日は、お願いします」

夢夢「はい!じゃあ決まりね、あたし、カレー食べて汗かいちゃたから、お風呂入って来るね」

健吾・夢夢「お風呂!？」

続く

第39話 秘密とは、知られたくない事（後書き）

さてさて、健吾、優は、数々の困難に耐えられるか

第40話 この状況は、問題が山積み（前書き）

祝『1,000』ユニーク突破
短いですが、更新します

第40話 この状況は、問題が山積み

健吾・優「お風呂!？」

健吾と優は、自分達の、今の状況を思い出し、声を上げた

健吾の心の声「そうだった、今、僕は、泉さんの体なんだ．．．お
っお風呂や、とっトイレなんかは、どうすればいいんだー」

優の心の声「そうだ、私達、体が入れ替わっているんだから．．．
健吾君に、私の体、みつ見られちゃう．．．でも、今日も暑かつ
たから、汗をかいてるから、お風呂に入らない訳にも行かないし．
．．トイレだってあるし、どうしょー」

二人は顔を赤くして、固まっている

夢夢「もしもし、二人とも大丈夫？」

夢夢が少し笑いながら、二人に話しかける

健吾・優「はっ!」

健吾と優は、我に帰る

優「だっ大丈夫だから、夢夢ちゃんは、早くお風呂に入って来て」

夢夢「はい、じゃあ、二人とも、がんばってね」

夢夢は、少し面白がっているみたいだ

「タッタッタッタ」夢夢は、お風呂場に向かった

夢夢が部屋から居なくなってから、顔を赤くして、優が健吾に言う

優「あつ、あの、健吾君」

健吾「はっ、はい」

優「恥ずかしいから、私の．．．体を余り見ないでね．．．」

「お風呂は、健吾君に目隠しをして貰って、私が洗うから．．．．
トイレの時は、出来るだけ、見ないようにして．．．．」

健吾「はっ、はい、分かりました、絶対、見ませんから、安心して下さい」

優「ホント？、良かった」

健吾の心の声「絶対見ないなんて、言っちゃたけど大丈夫かな？、耐えてくれ、僕の理性」

優「それじゃ、夢夢ちゃんが、出たら、お風呂ら入る」

続く

第40話 この状況は、問題が山積み（後書き）

感想など、お待ちしております

第41話 お風呂上がりは、なんか色っぽい(前書き)

最近、忙しいので、少しずつ、更新していきますので、ご了承ください(謝)

第41話 お風呂上がりは、なんか色っぽい

健吾と優が話しあつて15分程たち、夢夢がお風呂から出て来た
夢夢「はぁーいいお湯だったー。次は、誰が入るのー？」

夢夢は髪の毛をタオルで拭きながら、大きめのTシャツとパンツ姿
で、健吾と優に聞く

健吾「あつ、雨音さん、ちゃんと服を着て下さいよ」

健吾は、夢夢を見ない様に後ろ向きで言う

優「そくだよ、夢夢ちゃん、今は、健吾君もいるんだし、その格好
は、ちよつと・・・」

夢夢「別に良いじゃん。いつもの事だし、パンツは、見えてないで
しょ？それに、こんなお子ちゃま体型なんか、気にしないでしょ、
ねえ、健吾君？」

健吾「それは、体型の問題じゃ無くて、女の子として、もっと、恥
じらいを持ったほうが、いいと・・・・・・・・・・」

夢夢は後ろを向いている健吾の前まで、歩いて行く

夢夢「健吾君、女の子に対して、免疫が無いのは、分かるけど、こ
んなんじゃ、体が慣れるまで、優ちゃんの体でやっていけいよ」

健吾「そうですけど・・・」

夢夢「分かったら、二人とも、お風呂に行つてらっしゃーい」

そう言つと、夢夢は、二人を部屋の外へと押していく

優「ちよつと、夢夢ちゃん」

健吾「雨音さん」

部屋の外へと押された、健吾と優

夢夢「じゃあ、ごゆつくり」

「パタン」そう言つと、夢夢は、部屋のドアを閉めた

健吾・優「・・・・・・・・・・」

健吾「雨音さん・・・・・・・・」

優「夢夢ちゃん」

健吾・優「絶対、楽しんでる!!」

第41話 お風呂上がりは、なんか色っぽい（後書き）

感想など。お待ちしております

第42話 女の子は、気にする（前書き）

楽しんでもらえれば、嬉しいです

第42話 女の子は、気にする

健吾と優は、脱衣所に向かって歩く

健吾・優「ドッキン、ドッキン、ドッキン」

健吾の心の声「落ち着け、自分、これから、何が起ころうと平常心だ、平常心。変な事を考えちゃ駄目だ……」

優が何やら重い脱衣所のドアを開ける。「ガチャ」

脱衣所は、さつきまで、夢夢がお風呂に入っていたので、少し熱気に包まれていた

「チラ」健吾は、ふとも脱衣籠に目をやると、そこには、夢夢の脱いだ服、パンツなどが置いてあった

健吾の心の声「はう！雨音さん！僕が入る事知ってるんだから、少しは、考えて下さいよ……落ち着け健吾。ポーカーフェイスだ平常心だ、これくらいで騒いでたら、この先やってけないぞ」

顔を赤くして優が健吾に言う

優「じゃあ、健吾君……私が、体を洗うから、目を瞑って、服を脱いで……絶対、目を開けちゃだめだよ！」

健吾「はっはい、分かりました」

健吾は、目を瞑り、まずＴシャツに手をかけた

健吾の心の声「深い事を考えちゃだめだ、ただ服を脱ぐだけ、服を脱ぐだけ」

「ばっ」健吾はＴシャツを脱いだ

健吾「あの、泉さん、見えないので、これを脱衣籠に入れて貰っていいですか？」

健吾は、脱いだＴシャツを前に出す

優「うん、分かった。」

「どさ」優は、脱いだＴシャツを脱衣籠の中に入れる
続いて健吾は、ズボンを脱ぎ、優に渡し、優は、また、脱衣籠に入る

健吾「あつあの、泉さん．．」

優「何？どうしたの？」

健吾「あの、これ．．」

健吾は胸のあたりを指しながら優に聞く

健吾「これの、外し方が分からないんですけど．．」

優「あつゴメンそうだね、男の子が知っている訳ないよね、ちょっと待って」

「カチャ」ブラジャーを外す優

優「．．．．．」

自分の体の胸を見る優

優の心の声「こう、改めて、他人目線で見ると、相変わらず、ちっちゃいなー。凜ちゃんなんか、すごく立派なのに、これじゃ、夢ちゃんと余り変わらないかも．．．」

健吾「泉さん？どうしたんですか、黙り込んで」

優「べつ、別になんでも無いよ、ちよつと考え事してただけ、それより、健吾君、パンツを脱ぐ前に、疑う訳じゃないけど、一応、目隠しするけど、いいかな？」

健吾「よろしくお願いします（自分に負けそうなので）」

優は、健吾にタオルで目隠しをした

優「これで良しと、大丈夫？きつくない？」

健吾「はい、大丈夫ですし、何も見えません」

優「よかった、じゃあ．．脱いで．．入るよ」

健吾「．．．．」

健吾は、意を決してパンツを脱いだ

健吾の心の声「天国のお母さん、僕は今、男として、大切なモノも

脱いでしまったようです．．」

優はズボンを脱いで、トランク스와Tシャツ姿になっている

優がお風呂場の入り口を開ける「ガチャ」

優「足元に気をつけて」

優は健吾の手をひいて、ゆっくりお風呂場に案内する

健吾「はっはい」

「ガチャ」二人が入り終わり、優がドアを閉める

優「そのまま、ゆっくりしゃがんで、この椅子に座って」

健吾「はい」

健吾は、お風呂場にある椅子（すいません、名前が分かりません）に無事座ることが出来た

優「さてと、まず、髪の毛を洗うよ」

健吾「髪の毛くらいなら、僕が洗いますか？」

優「駄目だよ、男の子と女の子じゃ、洗い方違うから、健吾君は、そのままで居て」

健吾「そうなんですか、分かりました」

優は、健吾の髪の毛（自分の髪）を洗っていく

健吾の心の声「へえー女の子って、こんな風に、丁寧に洗うんだ。だから女の子の髪は、こんなに綺麗なのかな？」

「．．．．．」

数分後

優「これで良しと、じゃあ、次は体を洗っていくね」

健吾「あっはい」

優は、健吾の背中や足など、優しくどんどん洗っていく

優の心の声「まさか、自分の体を他人の体で洗う日が来るなんて、思わなかったな」

優は視線を自分の胸に向ける

優の心の声「やっぱり、ちっちゃいな、私の胸、どうにかしてあと少しくらい大きくならないかな．．．」

「あっ！そうだ、たしか前、凜ちゃん、男の人に揉んでも貰えば大きくなるって言ってたっけ．．．今、私は、健吾君の体だから、一応男の人、だよな．．．だったら、今ここで私の体の胸を揉めば、お大きくなるのかな．．．だけど、そんなことしたら、健吾に迷惑だよな、でも、こんなチャンス、もう無いかもしれないし．．．少しだけ、少しだけ、洗うフリをして少しだけなら大丈夫だよな．．．」

優は、自分の体の胸に手をやる

「モミモミ」

健吾「！？」

健吾の心の声「気のせいだよな、なんか今、胸を揉まれた気が．．

」

「モミモミモミ」

健吾「あっん！？」

健吾は、声が出そうになったが、押し殺した

健吾の心の声「やっぱり揉んでる！？いや、女の子の体の洗い方なんて、知らないし、これが普通なのかな？」

優の心の声「まだ、揉んでるって、気付いてない、みたいだし、もう少しだけ．．．」

「モミモミモミモミモミモミ」

健吾「ひあっん！？」

健吾は、押し殺していた声が出ってしまった

健吾「い、泉さん、もしかして、揉んでいるんじゃない．．．」

優「えっ！（汗）そんなこと無いよ、えっと、ちょっと、こってるかなと思って（汗）」

優は、立ちあがって、顔を赤くして慌てていると、足元にあった石

鹹を踏み「ツルーン」

優「きゃっ」

「ドツカーン、ガタガタガタ．．」

優は石鹹を踏んで、転び、健吾に覆いかぶさるようにぶつかる。そのせいで、健吾の目隠しが取れてしまった

健吾「いててててて」

優「いたたたたた」

「ガチャ」

夢夢「ちよつと、どうしたの、凄い落としたけど」

その音を聞きつけ夢夢がお風呂場に入ってくる

健吾・優「あっ」

夢夢がそこで見たのは、

Tシャツとトランクス姿で健吾に覆いかぶさっている優（健吾の体）と、裸で抑えつけられているような健吾（優の体）の姿だった
健吾・優・夢夢・「．．．．．」

夢夢「えっ——と」

「おじやましました、ごゆっくり」

「ガチャ」ドアを閉める夢夢

健吾・優「ちが——————う!!!!」

第42話 女の子は、気にする（後書き）

感想など、お待ちしております

あらためて、キャラ紹介（前書き）

主要キャラをまとめて紹介したいと思います

5月26日。すいませんが一つ訂正させていただきます。神崎が夢玉の制約を変えたおかげで、今の健吾は、魂だけでも、体ごとでも、自由に幻界に行くことができるので、基本、健吾は魂だけで幻界に行っています。優と入れ替わった時は、体ごとでなく、魂だけで、幻界に行き、戻って来る時に手をつないで、戻って来たせいで、魂が入れ替わってしまったというのに訂正させていただきます。自分で読んでいておかしいことに気づいたので、変えさせていただきます。本当に、スイマセン

あらためて、キャラ紹介

野田^{のだ} 健吾^{けんこ}

高校1年生の男子、この物語の主人公。性格は、優しいが、心配性で、人見知り、基本、臆病者だったが、拓也達と出会い、少しずつ成長している。一人暮らしをしているので、料理は、得意で、家事は、大概できる。苦手なものは、女の子だが、現在、一応、優と付き合っている（まだ、手をつなぐ程度）友達の為に、死を覚悟して戦ったこともあり、以外に熱い一面もあるが、基本は、へたれ。身長は、低くもなく高くもなく、平均的で、体型は、少し痩せ型。ただいま、アパートで一人暮らし、携帯の電話帳には、二桁いない・・・勉強は中の中

能力・日本刀を出し、刀から斬撃を出せる。5人の中で、一番強い

泉^{いずみ} 優^{ゆう}

健吾と一緒に高校に通う、高校1年生の女子。性格は、優しくて、おとなしいが、たまに、積極的な行動をすることもある。料理が得意で、家事もできて、しっかり者だが、少しドジ一面もある。両親は、昔、事故で亡しているので、マンションで、今は、夢夢と一緒に二人で住んでいる。凜や拓也、健吾と会うまでは、暗い性格をしていたが、今は、大分、明るい性格になった。可愛い顔をしているが、体型が、小柄で小さく、貧乳で、本人もそのことを気にしている（一応、健吾と交際中、手をつなぐ程度）勉強は、上の上能力・シールドを張る事ができ、手からエネルギー弾（かめ〇め波のようなモノ）を出せる

桜井^{さくらい} 拓也^{たくや}

健吾と一緒に高校に通う、高校1年生の男子。性格は、明るく、リーダーシップがあり、誰とでも気がなく話せる。体型は、長身で、細身だが筋肉はついている。それで顔はイケメンなので女子にモテル。

苦手なモノは、『凜』。凜とは、幼稚園からの幼馴染だったが、凜の積極的なアプローチによりただいま交際中（告白の時にキス経験あり。詳しくは、第33話参照）運動神経は、学校トップクラスだが、勉強は、下の中

能力・右腕に黒い鎧が現れ、それで攻撃をする（攻撃力がウリ）

相川 凛
あいかわ りん

健吾と一緒に高校に通う、高校1年生の女子。性格は、口数が多く、みんなの盛り上げ役だけど、素直になれないこともあり、基本、ツンデレ。体型は、女子の中では、少し背が高く、出るトコは、出て、締まるところは、締まっている、モデルのようなスタイルで、顔も美人で、男子にモデル。拓也とは、幼稚園からの幼馴染だったが、積極的なアプローチによりただいま交際中告白の時にキス経験あり。

（詳しくは、第33話参照）運動神経は、学校トップクラス。勉強は、上の下

能力・薙刀を出せて、物体浮遊も出来る（動かないモノに限る）

雨音 夢夢
あまね むむ

優のマンションに住んでいて、近くの小学校に通う小学5生だが、本当の歳は、健吾達と同級生の15歳。幻界に守護者として5年間いたので、体の成長が5年分遅いため、小学校に通っている。性格は、幻界に5年間、ほとんど、人と関わりない生活をしていた為か、15歳にしては、性格が幼い。ちよつとしたイタズラや、面白いことが大好き。体型は、小学5年生の女の子でまだまだ、おこちゃま。

好きな食べ物カレーライス。恋愛経験は無し？
能力・発火能力、他にも、優ほどじゃないが、シールドも張る事が
出来き、5年間、守護者をしていたので、色々な技が使える

あらためて、キャラ紹介（後書き）

こんな、愉快的な、仲間達です。
もしよろしければ、好きなキャラなど教えてください

第43話 誤解は、中々解けない(前書き)

短いですが、
お願いします

第43話 誤解は、中々解けない

お風呂から出てきて、水色のパジャマ姿でリビングに向かう健吾。

「ガチャ」ドアを開ける

夢夢は、ソファで寝そべって、テレビを見ていた。

夢夢「あつ、え〜と、最近の高校生は、積極的なんだね．．大丈夫、私、口が堅いから安心して」

顔を赤くして言う夢夢

健吾「ちつ、ちがいますよー何勘違いしているんですか。さっきのアレは、事故なんですよ」

健吾は顔から火が吹きそうな顔をしている

夢夢「はいはい。分かってるよ、分かってるよ。あれは、事故だったんだよね」

健吾の心の声「ぜつ絶対分かってない．．．」

夢夢「それより、優ちゃんは？」

健吾「泉さんは、服が濡れてしまったので、今、お風呂に入っています。」

夢夢「あつ、そうなんだ」

健吾「だから、僕は、これから、家に戻って着がえと明日の学校の準備を取ってきますけど、その前に、雨音さん、冷蔵庫を開けさせて、貰いますよ」

夢夢「別に良いけど、何で？」

健吾は、台所に行きコップを取り出す

健吾「さつき、泉さんに、私は、いつも、お風呂上りに牛乳を飲んでいるから変わりに飲んでおいて、と言われたので」

健吾は、冷蔵庫から、三つあったパックの牛乳を一つ出して、コップに注ぐ「トク、トク、トク」

夢夢「あーやつぱり、そのために、あんなに牛乳、買って来たんだ」

健吾「ごくごくごく」

「どうゆう、意味ですかそれ？」

健吾が夢夢に聞くと夢夢がある雑誌を取り出し、健吾に見せる

雑誌の表紙「胸を大きくする10の心得!!」

健吾「・・・・・・・・」

夢夢「この中に、心得1、お風呂でマッサージ、心得2、お風呂上りの、牛乳って書いてあったから」

健吾「ぶっふ」

健吾は、牛乳を吐きだしそうになった

夢夢「健吾君、もしかして、お風呂で、おっぱい揉まれた？」

健吾「そっそんな事、ある訳ないじゃないですか」

メチャクチャ動揺する健吾

健吾「それよりも、泉さんが、私の私服を適当に選んで、ダンスから持ってきてあげてと言っていたので、持って来て貰っても、言いですか？」

夢夢「分かったわ、ちょっと待ってて」

夢夢は、優の部屋に向かった

続く

第43話 誤解は、中々解けない（後書き）

すみません、終わりが中途半端でした。

第44話 女子の意見は、男子の意見と違う場合が多い（前書き）

ペンネームを変えてみました。『あひる』いう、名前が、他にもあるので、『ある日のあひる』に変えました。気分を変えて、この物語を面白くするために、がんばります。

優の家に来てから、中々進みません。この先にバトルもやるつもりですが、そこまで行くのに、イベントが多いので何時までかかるかわかりませんが、頑張って、書きます

第44話 女子の意見は、男子の意見と違う場合が多い

夢夢は、優の部屋のダンスから、服を一着選んで、持ってきて健吾に見せる。

夢夢「こんなのが、良いんじゃない？」

夢夢は、白のワンピースを笑顔で健吾に見せる

健吾「．．．あつ、あの、雨音さん、もう少し、男っぽい、というか、ズボンとＴシャツのような、僕にも着た事がある、服とかは、無いんですか？」

夢夢「あるけど、優ちゃんには、こうゆう服が似あうから、これ着て行きなよ」

夢夢は、『健吾』に、このワンピースを着せたいみたいだ

健吾「でも、こんなの、恥ずかしいですし．．．」

夢夢「大丈夫だよ、今は、優ちゃんの体なんだから。それに早くしないと、優ちゃん、のぼせちゃうよ」

健吾心の声「駄目だ、雨音さんは、どうしても、僕にこの服を着せたいらしい、多分、他の服を持って来るなんて事は、無いだろうな、かといって、勝手にダンスを開けるなんて事、僕には、出来ないし．．．」

健吾「分かりました。着ますよ」

健吾は、夢夢の言葉に負け、しぶしぶワンピースを着る事にした。ワンピースを受け取った健吾は、数秒、ワンピースを見て、夢夢に聞く

健吾「これって、どう着るんですか？」

夢夢「簡単だよ、下から穿いて、肩にかければ、いいだけだよ。」

健吾「分かりました．．．」

健吾は、目を瞑りながら、パジャマを脱ぎ、ワンピースに、着替えた

夢夢「やっぱり、似あーう」

健吾は、顔を真っ赤にしてる

健吾の心の声「何これ？下半身が、スースーして、凄く変な感じがする」

健吾「じゃあ、雨音さん、僕は、着がえや荷物を取って来ますので」
夢夢「うん、もう、8時を回っているから気を着つけてね」

健吾「はい、行ってきます」

そう言つと健吾は、玄関を出て、アパートに向かう

無事に行つて帰つてくれるか！？

第44話 女子の意見は、男子の意見と違う場合が多い（後書き）

アドバイス、感想など、お待ちしております

第45話 得たモノは、失ったモノと同等とは限らない（前書き）

ようやく、長い夜が終わりました。ここまで来るのに、色々あったな

まだ先になりますが、バトルも書く予定なので、お楽しみに。

第45話 得たモノは、失ったモノと同等とは限らない

優のマンションを出て、自転車置き場に向かう健吾

健吾「さてと、よっと」

健吾は、自転車にまたがったが

健吾「．．．足が届かない」

優の体に入れ替わっているの、健吾は、地面に足が届かなかった

健吾「はあ．．．仕方ないな」

健吾は、サドルを低くし、足を地面に着くようにした

健吾「これで、よし！さて、行くか！」

自転車を漕ぎ始めた健吾だったが、バランスが上手く取れず。ふらついてしまい、自転車に乗れなかった

健吾「．．．そうか、泉さんの体にまだ慣れていないから、自転車にも乗れないのか．．．」

仕方なく、健吾は、歩いて、アパートに向かったが、途中で何度も転びそうになったが、無事、アパートに着き、学校の鞆や着がえ、制服などを持って、優のマンションに戻る途中に、人気のない道路で、ガラの悪いチンピラ一人に絡まれてしまった。

チンピラ「その君、こんな時間に、そんな荷物抱えてどうしたの？良かつたらお兄さんが、良い所を連れてってあげるよ」

健吾「えっと、これから、友達の家に行くから、大丈夫です。」

健吾は、その場から、離れよう、早歩きになるが、チンピラが健吾の肩を掴む

チンピラ「そんなこと、言うなよ、お兄さんが、良い所へ、連れてってあげるって言ってるんだからさ」

チンピラは、健吾を睨みつけながら言った

健吾「痛た！手を放して下さい！！」

チンピラ「君が、ついて来てくれるなら、放してあげるよ」

健吾「いつ、いい加減にしろよ!!」

チンピラ「えっ!？」

「ひゅっ!!」健吾は、チンピラの股間を右足で蹴り上げた
チンピラ「はっはう!!」

その場でしゃがみ悶絶するチンピラ、その隙に健吾は、その場から、
立ち去ることが出来た。

健吾「はあ、はあ、はあ、はあ」

走って立ち去る健吾

健吾「まったく、今日は、厄日だな」

優のマンションに戻り、玄関の前に居る健吾

健吾の心の声「もう、出かけてから、1時間半以上経っているけど、

泉さん、大丈夫かな？」

「ガチャ」ドアを開ける健吾

健吾「ただいま、戻りました」

健吾は、リビングに向かうとそこには、バスタオルを巻いて、体を
真っ赤にして横になっている優と、優をうちわで煽いでいる夢夢が
居た。

夢夢「遅いよ、健吾君、優ちゃん、のぼせちゃったよ」

健吾「すっ、すいません、泉さん大丈夫ですか」

泉「もう大丈夫だから、気にしないで・・・」

そう言うしと優は、体を起こすと、バスタオルが取れそうになった
健吾は、すかさず、バスタオルを抑える

健吾「あの、これ、着がえを持って来たので、すいませんけど、脱
衣所で着替えて来て下さい」

健吾は、持ってきた着がえを優に渡す。

優「分かったありがとう。」

優は、着がえを受け取ると、バスタオルを抑え、脱衣所に向かった
健吾「良かった〜危ないところだった〜」

夢夢「何の話？」

健吾「いえ、なんでもないです、気にしないで下さい」

夢夢「ふ〜ん、まあ別に良いけど、そう言えば、歳の割に健吾君の
可愛かったよ〜」

健吾「えっ！？それってどういう意味ですか・・・」

健吾の顔からは、血の気が引いている

夢夢「さあ〜なんだろう〜良い子は、寝る時間だから、私は、寝
るね」

そう言つと夢夢は、優の部屋に入って行く

健吾「ちよつと、雨音さん！」

「バツタン」ドアを閉める夢夢

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

健吾「あーーーーー絶対見られたーーーー（泣）」

健吾は、今日、色々なモノを失った

第45話 得たモノは、失ったモノと同等とは限らない（後書き）

この話に、登場したチンピラが、この先のストーリーに欠かせないキャラになるかも

第46話 世界は、毎日変わっている(前書き)

久しぶりに凜が登場

第46話 世界は、毎日変わっている

健吾と優の体が入れ替わって次の日の朝、健吾は、優のマンションの和室で起きた

優と夢夢は、一緒の部屋で寝ているが、さすがに、年頃の男子と女子が同じ部屋で寝る訳もいかず、このような形になった

健吾は、起きるとまず、携帯で自分の顔を確認した。

健吾「やっぱり、夢じゃなかったか」

健吾の体は、優と入れ替わったままだった

健吾が和室から出ると、優が朝食の準備をしていた。

優「健吾君、おはよう」

健吾「おはようございます、すいません、何から何まで、やって貰って、僕に手伝える事があつたら、言つて下さい」

優「気持ちだけ、貰っておくよ、もう朝ごはんは、できたから一緒に食べよ」

何気ない会話をしながら、3人で、優の作った、美味しい日本の朝食を食べた後、健吾は、セーラー服に、優は、学ラン、衣替えをしたから、上は、ワイシャツに着がえた

健吾の心の声「やっぱり、スカートって恥ずかしいし、落ち着かないな」

着替えが終わった健吾達は、荷物を持って、学校に向かった

歩く3人

夢夢「あっそうだ、健吾君、私に夢玉を貸してくれないかな」

健吾「いいですけど、どうしてですか？」

夢夢「今、健吾君は、幻界に行けない、状態だから、私が一時的に

守護者を代わるわ」

優「そんなこと、出来るの？」

優が夢夢に聞く

夢夢「私は、元守護者だから、一時的に代わるくらいなら出来るの」

健吾「分かりました。」

健吾は、夢玉を取り出し、夢夢に渡した

健吾「雨音さん、前から気になっていたのですが、確かに夢玉を使えば、色々な事が、出来るようになる事が、分かったのですが、神埼みたいに夢玉の力で自分自身の能力の強化などは出来ないのですか」

夢夢「それは、神埼が特別な力を持っていたからよ、普通の守護者がそんなことをしようとすれば、能力を強化する前に、体がおかしくなってしまうわ」

健吾「なるほど、神埼が特別だったのか・・・」

そんなことを話していると、夢夢の通う小学校に差し掛かった。

夢夢「じゃあ、私は、行ってくるから、二人とも。ばれないように気をつけてね。」

優「うん」

健吾「分かりました」

夢夢「行ってきまーす」

そう言うと夢夢は小学校へ走って行った

健吾と優は、二人で学校へ向かう

優「バレないように気をつけないといけないね」

健吾「そうですね、特に拓也君と相川さんには、自然に接しないといけないですね」

健吾と優が話していると後ろから、聞きなれた声が聞こえて来た

凜「ゆう〜けん〜、おはよう〜」

健吾、優「!？」

続く

第46話 世界は、毎日変わっている（後書き）

さてさて、これから、入れ替わったまま、学校がスタート。果たして、健吾と優は、バレずに過ごせるか

第47話 学校は、危険地帯（前書き）

入れ替わったまま、ハイスクールに向かう健吾と優、果たして、このまま誰にもバレずに、過ごせるか！？

バトル好きでこの小説を読んでくれている人は、最近の話をどう思っているのか、それが心配です、バトル好きな人は、後半に入れば、バトルも入るので、お待ち下さい

第47話 学校は、危険地帯

凜「ゆう〜けんごーおはよー」

健吾と優が後振り向くと、そこには、凜と拓也が居た

健吾「おはようございます、相川さん、拓也君」

凜・拓也「えっ!？」

健吾の心の声「あっしまった、泉さんは、こんな風に二人を呼ばないんだった。考える、健吾、上手く、切り返すんだ」

健吾「ごめんね、ちよつと、寝ぼけてて、凜ちゃん、桜井君、おはよう」

凜「なんだ、寝ぼけてたんだ、優のしゃべり方が、健吾みたいで、びつくりしちゃった。」

健吾・優「ギク!！」

焦る二人

優「そんなことより、早く学校に行こうよ、また遅刻するといけないし」

優が話を逸らす

拓也「そうだな、先生の小言聞くのも、嫌だし行こうか」

健吾達の教室

バれることなく、無事に教室まで着いた健吾は、ちゃんと優の席に座り、鞆から、教科書などを入れてみると、そこに、凜が来た。

凜「優、ちゃんとプールの用意は、持ってきた?」

凜は、鞆に手をやり、中を見て確認する

凜「ちゃんと持ってきているわね、関心、関心、さつき健吾の鞆も確認したら、ちゃんと持ってきてたから、これで4人とも、プールに入れるわね」

健吾と優は、昨日、凜にプールの用意を絶対持つてくるように言わ

れていたもので、二人ともプールの用意を鞆に入れてしまっていた。

健吾の心の声「しまった。今日は、プール開きだった．．．どうしよう、もう、用意を忘れたと言う最高の言い訳が使えない、だったら．．．」

健吾「あの、凜ちゃん、今日、私ちよつと熱ぽいから、プールに入れないかも．．．」

健吾の心の声「これで、どうだ」

凜「何、健吾（優）と同じ事言ってるの」

健吾「えっ!？」

凜は健吾のおでこに、手をあてる

凜「熱なんか、全然ないわよ」

「分かった、優も健吾も実は泳げないんでしょ、大丈夫、心配なくても、ちゃんと、お姉さんが教えてあげるから」

健吾「いや、そうゆう訳じゃ．．．」

そこに拓也が来て凜に言う

拓也「凜、ちゃんと、パンツは、持ってきたか？」

「どおおおん!」凜の蹴りが拓也の腹にクリティカルヒットした

拓也「ぐは、何すんだよ凜、俺は、お前を心配してだな」

凜「おおきな、お世話よ」

健吾の心の声「だめだ、相川さんを止める術は、僕には、見つからない。でも何とかして、4時間目のプールに入らない言い訳を作らないと」

「キーン、コーンカーン、コーン」

チャイムが鳴り、先生が入ってくる「ガラ」

先生「席に着けー、出席をとるぞ」

先生「阿久津」「はい」

先生「安部」「はい」

先生「泉」

優「はい」

「えっ」

クラスの視線が、優に集中した

先生「野田、お前いつから、名前を泉に変えたんだ」

優「あつすいません．．．間違えました」

クラスのみんなが笑ったが、健吾だけは、笑えなかった

それから、あつという間に3時間目の授業まで過ぎてしまい、今は、4時間目が始まる前の休み時間だ。

教室の隅で話をしている、健吾と優

健吾「泉さん、プール入らない為の何か良い方法はありませんか．．

」

優「ごめんね、何も思いつかなかった．．．」

健吾「まずいですね．．．．」

優「まずいよね．．．」

そこに凜と拓也が来る

拓也「そんなところで、何してんだ？みんなプールに移動したぞ」

凜「さあ、早く行きましょう、今日は、絶好のプール日和よ」

そう言くと凜は、健吾の手を引っ張って、教室から出て行った

健吾「ちよつと待って、相か、凜ちゃん」

拓也「相変わらず、はしゃいでるな、俺達も行こうぜ」

優「．．．うん」

健吾と優は、プールを回避する方法を完全見失った

第47話 学校は、危険地帯（後書き）

夏だ、プールだ、青春だ、こんな高校生が羨ましい

第48話 プールの時は、よく柔軟を（前書き）

プールに出る事を回避、出来なかった、健吾と優、果たして、これからどうなるか？

第48話 プールの時は、よく柔軟を

今、健吾は、凜に連れて来られ、プールの女子更衣室の前に居る健吾の心の声「どうしょ、どうしょ、どうしょ、どうしょ、どうしょ」

この先のエデン（楽園）に踏み込んだら、2度と、帰ってこれない気が．．．」

凜「何してるの優、早く入るわよ」

凜は、健吾の手を掴み更衣室に入って行く

健吾「ちよつと、まつ．．．」

そこに入ると、クラスメイトの裸が．．．

女子1「○○ちゃん大きいー」

女子2「□□ちゃんのそれ可愛い」

など、普段、男子に縁のない、会話や光景が。

健吾は顔を真っ赤にしている

凜「さあ、私達も着替えるわよ」

健吾の心の声「着替えるって言われても、スク水なんてどう着れば分からないし、ただ履いて肩にかけるだけで良いのかな、てか、本当に僕これを着るの!？」

凜は、慣れているのか、いつの間にか、もう着替え終わっていた

凜「なんで、着替えないの優？」

健吾「えーと、ちよつと．．．」

凜「はあはあーん、さては、そのペチャパイが恥ずかしいんだな」

そう言つと凜は健吾の後から手を回し胸を揉み出した

「モミモミモミ」

健吾「きゃっ！何するんですか!？」

凜「何って、スキンシップよスキンシップ、それに、もう時間が余りないから、お姉さんが、着替えるのを手伝ってあげるわ」
健吾「えっ・・・わあああー」

2分後、健吾は、ちゃんとスク水を着て、プールサイドに居たそこには、すでに優が居たが二人とも顔を見ただけで分かった。

健吾・優の心の声「そっちも、大変だった、みたいだな（ね）・・・」

健吾と凜は、コッチを見て、話している男子4人の声が聞こえた

男子1「やつぱり、相川は、スタイルが良いよな」

男子2「でも、スク水が似あってるのは、泉だよな」

男子3「俺もそう思う」

男子4「相川は、ビキニが似あうな」

凜「ちよつと、優ここで待ってて、」

健吾「えっ何処行くの」

凜が物凄く怖い笑顔で

凜「ちよつと、どざえもん4体、作ってくる」

健吾「ゾク」

凜の殺気を感じた拓也は、4人の所へ行き、一人の肩を軽く叩きながら言う

拓也「お前ら、水死、決定だ・・・」

4人の男子「えっ？」

そう言う拓也は、4人から離れて行った

凜「アンタ達」

4人の男子「!？」

凜「人のこと、変な目で見てるんじゃないわよ!!」

凜は、一人ずつ捕まえ、プールに思いっきり、投げ込んでいく

男子1「ぎゃー!!」

男子2「わああああ!!」

男子3「ああああああ!!」

「バシャーン!!、バシャーン!!バシャーン!!」

一人の男子が拓也の所へ行く

男子4「拓也!相川を止めてくれ、止められるのは、お前しかない」

拓也「無茶言うな、今のアイツを止めるには、特殊部隊、2小隊は必要だ」

「という訳で、行つて来い、後ろに迎えが来てるぞ」

男子4、の後ろにはすでに凜の姿が

男子4「ひいい」

「バシャーン!!」

最後の一人もプールに放りこまれた。

拓也「あんまり、無茶するなよ、怪我人出るぞ」

凜「これくらいなら、大丈夫よ、さてと気分もすっきりしたし、早く泳ぎたいな」

「キンコンカンコン」

体育先生がプールサイドに入つて来た。

体育の先生「整列しろ、ん?、何でお前ら4人は、濡れているんだ?」

男子「すいません、少し、はしゃいでしまつて」

先生「まあ、いい、次からするなよ」

「今日の体育は、初日だから、最初に全員に25メートルのタイムを取るぞ、そしたらフリーだ」

凜「やったーこれでいっぱい、泳げるわね」

準備体操をし、軽く、プールの中で体を動かした後、タイム測定が始まった

先生「男子3人、女子3人ずつ泳いでいくから、まず、最初のグループに桜井、相川、お前ら確か中学の時、県大会で入賞したろ、だから、みんなに見本を見してやってくれ」

凜「はい」

拓也「分かりました」

「ぴいつ」

先生が笛を吹き第一グループがスタートした、拓也と凜は、他の4人を、大きく引き離し、同着でゴールした」

凜「はあ、はあ、はあ。なかなかやるわね、拓也」

拓也「いや、男子と女子差を考えれば、俺の負けだよ」

それを見ていた健吾と優

健吾「さすがに速いですね、あの二人は」

優「うん、すごいね」

第2グループも終わり、健吾の順番が回って来た

優「大丈夫？まだ私の体に慣れてないから、上手く泳げないと思うから、無理しないでね」

健吾「分かりました、いけるとこまで、泳いできます」

「ぴいつ」

第3グループがスタートし、泳ぎだす健吾、慣れていない、体で頑張って泳いでいたが半分を過ぎた辺りで、足をつってしまった

健吾「しまった、足をつった、溺れる」

「バシャ、バシャ、バシャ」

優が健吾が溺れていることに気づく

優「健吾君！！」

拓也「なんで、健吾が自分の名前を叫んでいるんだ？」

凜「拓也、そんなこと言ってる場合じゃないわ！優が溺れているわ」

凜と拓也も溺れている事に気づき、プールに飛び込んだ、

凜「優待ってて、今行くから！」

健吾は、沈んでしまい、そこで意識が途切れた

第48話 プールの時は、よく柔軟を（後書き）

次の話から、ストーリーが大きく動きます

第49話 お前らのやったことは、全てお見通しだ！！（前書き）

名探偵？凜、登場

第49話 お前らのやったことは、全てお見通しだ！！

保健の先生「少し、水を飲んでるけど、大したことないわ、多分、もう少しで起きると思うから、起きたら、安静にさせといてね、何かあったら、私は、職員室に居るから、その時は、呼んでね」
凜「分かりました、ありがとうございます」

健吾「ううーん」

健吾は、ゆつくりと目を開け腰を起こすと、そこには、優、凜、拓也の3人の姿があつた

凜「やつと、起きたわね」

拓也「心配したぞ」

優「大丈夫？」

健吾「あれ、みんなどうして、僕のベットの周りに？」

凜「『アンタ』覚えてないの？プールの時間に、溺れたから、私と拓也で助けてあげたのよ、40分位寝てたから今は、昼休みよ」

健吾は、周りを見渡すと、ここが保健室のベットの上だと気付いた
健吾「あっそうか、僕、プールで、溺れたのか、．．．まだ頭が痛いや．．．」

凜「ちよつと、しつかりしなさい！私は『健吾』と『優』に聞いた
い事があるんだから！」

健吾・優「！？」

健吾「何を聞きたいのかな、凜ちゃん？」

健吾が優の言葉使いで凜に聞く

凜「とぼけたつて、無駄よ、もうネタは、上がっているんだから」
優「何の事かな、相川さん」

優が健吾の言葉使いで凜に聞く

凜「あっそう、しらを切るのね二人とも．．．じゃあ、私の名推理を聞かせてあげるわ!!」

拓也「一体、何を言ってるんだ、お前は．．．」

凜「拓也は、黙って聞いてればいいから」

凜「まず、最初に、おかしかったのは、朝、登校中に会った時に、優は、私と拓也の事を、相川さん、拓也君と言ったわ、拓也覚えてる？」

拓也「確かに言ってたな、でもそれは、寝ぼけててだろ？」

凜「そんなのは、嘘よ、私の事を相川さん、拓也の事を、拓也君と言う人物は、私の知る限り、健吾しかいないわ!あとそれだけじゃない、朝の、出席の時に優の点呼の時に健吾が返事したり、優がおぼれている時に、健吾は、「健吾君が溺れている」って叫んだわ、これだけでも十分だけど、さらに動かぬ証拠が在るわ」

凜は、携帯を取り出し、優に電話をかける

優の持っている携帯が鳴った「ブーン、ブーン、ブーン」

凜は、携帯の画面を優に見せながら聞く

凜「私は、優に電話をかけているのに、なんで、健吾の持っている携帯が鳴ってるの？」

優「それは．．．」

凜「それに、さっき、優を着替えさせるために、バックを覗いたら、健吾の携帯が出てきたわ」

拓也「もしかして、健吾と泉は．．．」

凜は優（健吾）の顔指差し

凜「優、健吾、あなた達二人は、体が入れ替わっているわね」

健吾・優「ドキ!!」

凜「お前らのやったことは、全て、まるっと、すりっとお見通しだ。
（元ネタ分かる人居るかな？）」

拓也「お前、それやりたかったただけだろ」
凜「うるさい」

続く

第49話 お前らのやったことは、全てお見通しだ!!（後書き）

お前らがこの小説を見て、苦笑いをしている事なんて、全てお見通しだ!!」

第50話 内緒話は、みんな聞きたくなる（前書き）

ついに、50話まで来てしまいました。実際にここまで読んでくれる人が何人居るか分かりませんが、読んでくれる人が居る限り、キーボードを叩こうと思います。

第50話 内緒話は、みんな聞きたくなる

凜「お前達のやった事は、全て、まるっと、すりっとお見通しだ」

拓也「お前、それやりたかった、だけだろ」

凜「うねさい」

健吾「もう駄目だね、泉さん．．．」

優「そうだね．．」

健吾「相川さんの言う通りです、今、僕と泉さんは、体が入れ替わってしまっています」

拓也「なんで、そんなことが、起こったんだ？」

健吾と優に聞く拓也

健吾「じつは、昨日、泉さん家で．．かくかく、しかじか．．以下省略」

凜「成程、つまり、お互いが、体が慣れるまで、自分の体に戻れないんだ」

拓也「なんで、俺達に相談しなかったんだ？」

凜「そうよ、なんでしなかったの？」

健吾「いや、なんか、恥ずかしいですし、もし、二人が、僕達にいつも通り、接したら、周りに変な風に見られると思って．．．」

凜「理由は、分かったけど、そのせいで、私の着替え姿、健吾に見られちゃったじゃない！どうしてくれるのよ！」

凜は、顔を赤くして、健吾に言う

健吾「それは、だって、僕達、本当は、今日、プールに入るつもり無かったんですよ、でも相川さんが無理やり、引っ張っていくんですもん」

凜「うっ」

拓也「確かに、手を引っ張って、プールに連れててたよな」

健吾「それに、相川さんは、着替えるのが早かったから、考え事している間に、着替え終わってて、着替え姿なんて見てないですよ」

凜「まあいいわ、私のせいで、健吾は、溺れちゃったみたいだし、今日のところは、痛み分けとゆうことにしてあげる」

拓也「自分の良いように、収めたな」

「キーン、コーン、カーン、コーン」

優「あつ、昼休み、終わっちゃった」

健吾「みんなは、お昼は、食べたんですか？」

凜「まだ、食べてないわよ」

拓也「じゃあ、5時間目は、サボって、ここで、メシ食べてくか」
健吾「大丈夫なんですか、そんなとして？」

凜「大丈夫よ、私、保健の先生と、仲がいいから、問題ないわ」

優「健吾君の、お弁当もちゃんと、作って持ってきたから。」

健吾「ありがとうございます、泉さん」

凜「それじゃあ」

4人「いただきます!!」

続く

第50話 内緒話は、みんな聞きたくなる（後書き）

次から、新しい編がスタートします。次は、一体どんな敵が現れるか

第51話 友達の友達は、友達？（前書き）

鬼話編スタートです。編の名前で敵キャラ分かってしまいます。不覚でした。

祝、一万アクセス突破

第51話 友達の友達は、友達？

4人は、保健室で昼食を取り、6時間目は、ちゃんと授業に出た

放課後

健吾達4人が昇降口で、靴を履き替えてると、一人の女の子が、凜に話しかけて来た

ミキ「凜ちゃん、ちょっと、今、時間大丈夫？」

久々のキャラ紹介

鬼討 ミキ（おにうち みき）

黒髪のロングストレートで日本的な女の子

凜「どうしたの、ミキ？」

ミキ「ちよつと、頼みごとがあつていいかな？」

凜「分かった、いいわよ」

「じゃあ、拓也達は、先に帰ってて」

拓也「おう、分かった、じゃあな」

健吾「さようなら、相川さん」

優「バイバイ、凜ちゃん」

凜「うん、またね」

凜に用事が出来た為、健吾達は、3人で帰る事にした。

校門を出て、歩く3人、

健吾「拓也君、さっきの女の子は、誰だか知っていますか？」

拓也に聞く健吾

拓也「ああ、アイツは、隣のクラスの『鬼討ミキ』だよ。俺と凜と同じ中学校出身で、凜と結構仲が良いんだ」

健吾「鬼討なんて、迫力のある苗字ですね」

拓也「鬼討の家は、神社だからな、多分そのせいだよ」

そう言っていると拓也は、10キロ程離れたところにある、中々大きな山を指さす

拓也「あの山一体が鬼討の家のものであそこに、神社があるんだ、確か今度、お祭りがあるって聞いたな、何時だったけかな？」

健吾「あの山一体が鬼討さんのモノ？凄いな」

拓也「一体、鬼討と何の話をしてるだろうな」

そんな話をしていると、拓也と別れる、交差点まで来た

健吾「じゃあ、僕と泉さんは、コッチだから」

健吾は、自分達の行く道を指さす

拓也「あれ、もしかして、健吾、泉のマンションに泊ってるのか？」

健吾「そうだけど・・・」

それを聞いた拓也は、少し笑いながら、健吾に近づき、耳元で呟いた

拓也「変なこと、するんじゃないぞ」

健吾「なっ何言つての拓也君、そんなことする訳ないじゃん、それに、今この体なんだし」

健吾は、顔を赤くして、拓也に言う

拓也「へえー元の体なら、何かあるかもしれないんだな」

健吾「そんなこと言ってないよ！」

優「何の話をしているの？」

話の内容が、分かってない優が健吾に聞く

健吾「なんでもありません、全然大した事じゃないんで・・・」

拓也「悪い、悪い、冗談だよ、じゃあな、お二人さん」

そう言っていると拓也は、自分の家の方向に歩いて行った

健吾「さあ、僕達も帰りましょう」

健吾が泉の手を引く

優「結局、さっきは、何の話をしていたの？」

健吾「本当に大したことじゃないんで！」

そう言って健吾は、優の手を繋ぎ、マンションに向かった

続く

第51話 友達の友達は、友達？（後書き）

久々の新キャラも出て、また大きく動き出した？リアルドリーム、これから先、健吾達は、どうなるか、お楽しみに

第52話 電話をするときは、主語と述語を（前書き）

改めて見ると、内緒話編が異常に長かった気がするのは、僕だけでしょうか、よくそんな、ネタがあつたなあーと自分で思いました。

第52話 電話をするときは、主語と述語を

鬼話編

健吾と優がマンションに着き、リビングに入ると今日は、夢夢が先に帰っていた

夢夢「お帰りなさい、二人とも、どうだった、学校は？」

健吾「実は、相川さんと、拓也君にバレてしまつて」

夢夢「でも、仕方ないね、凜ちゃん、勘が鋭いし」

優は、夕食の準備に取り掛かろうとしていたが、今日は健吾も一緒に手伝い、ハンバーグを作った

夢夢「いただきまーす」

健吾・優「いただきまーす」

「パク」

夢夢「とっても、美味しいよ、このハンバーグ」

優「ありがとう」

健吾「雨音さんは、何か料理は、出来ないんですか？」

健吾は、ハンバーグを食べようとしていた夢夢に聞く

夢夢「出来るよ、ゆで卵とスクランブルエッグなら」

健吾の心の声「それは、料理と言えるのか？」

夢夢「今、心の中で私の事、バカにしたでしょ！」

健吾「えっ、そんなことないですよ」

夢夢「いいもーん、後で、優ちゃんに、ちゃんと教えて貰うから」

そんな、明るい会話をしながら食事をして、食べ終わってから、2

0分程経った時、優の携帯が鳴った「ヴーン、ヴゥーン、ヴーン」
優「誰からだろ？」

携帯を手取る優

優「凜ちゃんからだ、二人ともちよつと静かにしててね」

「ピッ」

優「もしもし」

凜「もしもし、優、いきなりで悪いんだけど、明日の土曜日、空いてる？」

優「別にこれといって用事は、無いけど」

凜「良かった、それと、今、そこに、健吾と夢夢ちゃんも居る？居たら二人にも明日、空いてるかどうかが聞いてくれない？」

優「分かった、ちよつと待ってて」

優「二人とも、明日何か用事ある？」

健吾と夢夢に聞く優

健吾「何も用事は、無いですよ」

夢夢「私もフリーだよ」

優「分かったありがとう」

電話に戻る優

優「もしもし、凜ちゃん、二人とも大丈夫だつて」

凜「そう、良かった、じゃあ、明日の10時に、駅前の〇〇喫茶に来てくれない？、拓也叫んでるし、私も行くから」

優「いいけど、何で？」

凜「ちよつと、電話だと、長くなりそうだから、それは、明日話すね、じゃあそうゆう事で、また明日」

そう言う凜は、携帯を切ってしまった

優「なんだろう、一体」

夢夢「で、凜ちゃんは、なんだって？」

携帯をポケットにしまおうとしている優に、夢夢が聞く

優「えーと、明日．．かくかくしかじか．．．」

優「という、訳で、明日の10時に〇〇喫茶に行く事になったんだけど、二人とも大丈夫かな？」

健吾と夢夢に聞く、優

健吾「大丈夫ですけど、なんですかね、話って」

夢夢「私も大丈夫だけど、気になる〜」

優「話の感じからして、そんな悪い話じゃないと思うけど、結局、明日にならないと、分からないね」

それから、今日の夜は、他に、これといって何事もなく、平和に健吾達は、過ごせた

続く

第52話 電話をするときは、主語と述語を（後書き）

どうもです、ある日のあひるです。すいません、ネーミングセンス0です

次からは、また、幻界や、バクの話が出て来るのでお楽しみに！なんて書いてみるけど、ここ、読んでくれる人居るのかな？

第53話 話合う場所は、喫茶店が一番（前書き）

凜達は、今、あの5人で居る時は、健吾と優の事をちゃんと、魂があるほうで呼んでいます。誰か他に居る時は、健吾の事を優、優の事を健吾と、周りから変に思われないように、そう、呼んでいます。すいません、ややこしくて

第53話 話合う場所は、喫茶店が一番

健吾と優が入れ替わって二日目の土曜日

健吾と優と夢夢は、前の日に凜に言われた通り、10時に駅前の○喫茶に間に合うようにマンションを出て、自転車を漕いでいる体が入れ替わってすぐは、乗れなかった自転車も体が慣れてきて、乗れるようになった

まだ、時間は、9時台だが、外は、どんどん、気温が上がりはじめている

優「ここだよね」

健吾達は、9時50分に喫茶店に着いた

「カラン、カラン」喫茶店の中に入る3人

定員「いらつしやいませ、3名様でおこしですか？」

優「いえ、友達と待ち合わせを・・・」

凜「ゆうーこっち、こっち」

凜の声が奥のテーブルから聞こえて来た

健吾達はそのテーブルに向かうと凜と拓也と、そこに、鬼討ミキが居た

席に座る3人

ミキ「こんにちわ、えっと、泉さん、野田君、雨音ちゃん、ですよね、凜ちゃんから聞いてます」

「今日は、ごめんなさい、私の為に集まって貰って」

健吾「なんで、今日、ぼく・・・私達は、呼ばれたのですか？」

ミキ「それは・・・」

凜「私が説明するわ、ミキの家は、神社で明日、10年に一度のお祭りがあるの、そこで、神社の入り口でパンフレットを渡す女の子を3人ほど探していて、私が最初に頼まれて、残り二人を誰にする

かを考えたら、優と夢夢ちゃんが出て来た訳。」

ミキ「あの、もし良かったら、凜ちゃんと一緒にやってくれませんか？ちゃんと、バイト代は出すので」

夢夢「私は、全然大丈夫だけど、どうする優ちゃん（健吾）」

健吾の心の声「女の子を探してるって事は、今、泉さんの体の僕が、やるんだよね、まあ、パンフレットを渡すだけだし、昨日、助けて貰った、相川さんの頼みだしな」

健吾「分かりました、ぼく．．私もやります」

ミキ「本当！じゃあ、ちよつと、凜ちゃん、泉さん、雨音ちゃん、ちよつとトイレに来て」

健吾「えっ！何ですか？」

ミキ「明日は、巫女服を着て貰うから、その為のサイズを図りたいの」

ミキは、笑顔で言う

健吾「ちよつと、相川さん、聞いてないですよ、巫女服なんて、そんな、人の多く来るところで恥ずかしいですよ」

凜「あれ、言ってなかったけ」

ミキ「えっ、巫女服って恥ずかしいの？私は、何か行事があるたび着てるのに．．．」

ミキは、少し傷ついてる

凜「ちよつと、ミキが傷ついちゃったじゃない、どうすんのよ優（

健吾）」

健吾「いや、えつと、やっぱり、巫女服は、可愛くていいと思います。」

健吾は、ミキを慰める為に言うと

ミキ「そうだよな、可愛いよね、じゃあ、トイレに来て色々図るか」

「びつ」ミキは、笑顔で、メジャーを構えた
健吾「・・・・はい、分かりました（泣）」

それから、健吾、凜、夢夢、ミキの四人は、トイレに行つて、10
分程で図り終わりテーブルに戻つて来た

ミキ「じゃあ、明日の4時位に、神社に来て、パンフレットを配る
のは、5時から7時の2時間だから」

ミキはバックから、パンフレットを5枚取り出して、5人に配る

ミキ「これが明日配る、パンフレット、明日のお祭りの歴史などが
載つてゐるから暇があつたら読んでね」

そう言つとミキは立ち上がり、財布から5000円札を出して凜に
渡す

ミキ「私、これから、お祭りの準備があるから、それで、みんなで
好きな物を頼んでね。じゃあ、今日は、ありがとう、また明日」

凜「分かった、ありがたく、使わせて貰うわ、明日は、私達も頑張
るから、いいお祭りにしようね」

健吾「じゃあ、また明日、鬼討さん」

拓也「またな」

優・夢夢「さよならー」

それから、健吾達は、好きなモノを頼み、パンフレットを読んでみ
ると、そこには、健吾達にとって、驚くべき内容が書かれていた

続く

第53話 話合つ場所は、喫茶店が一番（後書き）

アドバイスや感想お待ちしております

第54話 言い伝えは、何かしらの意味がある（前書き）

今回の話には、バクの補足説明などが、入っています

第54話 言い伝えは、何かしらの意味がある

ミキが帰ってから、健吾達は好きなモノを頼み、まだ喫茶店に居た健吾「せっかく、ですから、パンフレットでも、読んでみませんか」拓也「そうだな」

健吾達五人は、パンフレットを読み始めた、パンフレットには、鬼討神社の歴史と、昔から伝わる言い伝えが書いてあった

言い伝え

時代は、戦乱の世だったがこの地域では、戦は、起こらず、村は平和であった。ある年の水無月の終わり頃の夕暮れ、突如、空が裂け、そこから一体の鬼が現る。村の若者総出で立ち向かうも、その鬼の力、牛、千頭にも匹敵し、我々、なす術あらず。そこへ、鬼と同じく、空から一人の侍が現れる。その侍、手に小さき玉を持ち言葉を放つと、右手に光が集まり、刀が生まれた。それから、侍は、鬼との死闘を繰り広げ、この山にて言霊の力を使い、鬼の力を抑えつけ、封じること成功する。戦いが終わり、我に言葉を授け、侍は、消えて行った。我、それから、名を鬼討とし、ここに神社を作り、我が一族が、鬼を見張り、授かりし言葉を伝え続ける。

あとがき

それから、10年に一度、六月の終わりに、その侍に感謝し、鬼の事を忘れない為に、『鬼討ち祭り』が始まりました。。

固まる5人

5人「……………」

健吾「これって、守護者と、バクだよな……」

拓也「そう、考えられるな……」

凜「そうとしか、考えられないわよ」

優「つまり、戦国時代に、幻界から現実世界にバクが来て、それを追って、守護者が来て、鬼を倒したって事かな」

夢夢「もし、それが本当なら、その鬼も守護者も相当凄いよ、現実世界まで来てしまう、バクと守護者と、現実世界でも能力が使える守護者なんて聞いたことがない。」

健吾「刀を出す前に言った言葉に、何らかの力があつたんじゃないかな」

夢夢「多分、その言葉と夢玉を使って、現実世界でも、能力を使えるようにしたと思うけど、そんな言葉、今の私達には、伝わってないよ」

拓也「つまり、この侍は、とても、凄い人で、俺達の大先輩に当たる訳だから、明日の祭りは、この侍に感謝して、楽しもうぜ」

凜「軽すぎよ、もしその鬼が復活したらどうするのよ」

凜が拓也に聞く

拓也「大丈夫だろ、戦国時代って事は、500年位前の話なんだから、もう、消えてるんじゃないか？」

凜「まあ、そうかもね」

拓也「それにしても、鬼か、なんでバクって、神話や伝説とかに出て来る怪物の形をしてるんだ？」

夢夢が拓也の疑問に答える

夢夢「前にも言ったけど、バクは、この世界の歪みの力、つまり、人や動物が無意識に出している、負の感情のエネルギー集まって具現化したのが、バクって言ったよね」

拓也「ああ」

夢夢「大体、負の感情は、動物よりも、人間の感情の方が圧倒的に多いから、人間の中には、誰にだって、恐怖や恐ろしいモノのイメージは、あるでしょ、歪みの力の中には、そんなイメージも流れてきてしまうの、そして、その時の強い感情のイメージによって、バクの姿は出来上がるの」

凜「だから、あんな怪物の姿をしてたのね」

優「でも、バクって守護者がちゃんと、歪みの力を消していれば、生まれないんだよね？」

優が夢夢に聞く

夢夢「基本は、ちゃんと消していれば生まれることは、無いけど、一度に大量の歪みの力が流れて来た時や、幻界のちよつとした異常によつてもバクは、生まれるの、こないだみたいに、短期間にあれだけのバクが現れることは、無いけど」

健吾「それにしても、雨音さんは、幻界の知識が凄いですね」

夢夢「私の知識は、全部、美咲さんに教えて貰った事なの、だから、健吾君も、ちゃんと覚えて、次の守護者が決まった時に説明出来るようにしてね」

健吾「が、がんばります・・・」

続く

第54話 言い伝えは、何かしらの意味がある（後書き）

どうもです。ある日のあひるです。リアルドリームも皆様に支えられ、54話まで来ることが出来ました。最近色々と疲れています。

そんな僕に「読者のみんなオラに力を分けてくれー！！」「．．

．」あつ、少し力が湧いてきた気が．．．しなかった。ヤバイ、ホント疲れてる

第55話 祭りは、計画を立てないで行った方が楽しい（前書き）

鬼話編も、だいぶ進んできました。これから先健吾達はどうなるか、果たして、ちゃんと、元の体に戻るか。

第55話 祭りは、計画を立てないで行った方が楽しい

日曜日、天候、晴れ

拓也と凜は、一旦、優のマンションに集まって、5人でそこから、でバスで鬼討神社に向かう事にした。

バスの中

夢夢「私、お祭りなんて、久しぶりだから、凄く楽しみ！」

優「そうだね、楽しみだね、夢夢ちゃん、何がしたいの？」

夢夢「私はね、射的に金魚すくい、輪投げ、他にも、色々見たいし、食べたいな」

夢夢「健吾君は、何がしたい？」

夢夢が健吾に聞く

健吾「僕も、最後にお祭りに行ったのが、母さんが亡くなる前だったんで、本当に久しぶりなんですけど、リンゴ飴が食べたいですね」それを聞いた拓也が言う

拓也「リンゴ飴？珍しいな、祭りと言ったら、やっぱり焼きそばが定番だろ」

拓也の言葉に凜が反論する

凜「はあ？まだそんなこと言ってるの？お祭りの定番と言ったら、お好み焼きに決まってるじゃない」

拓也「いや、焼きそばだ！」

凜「いいえ、お好み焼きよ！」

そんな事を拓也と凜は、言い合ってる

優「でも、健吾君何で、リンゴ飴が食べたいの？どっちかと言うと、綿飴のほうが、甘いものだったらメジャーじゃない？」

健吾「幼稚園の時に行ったお祭りで、母さんに買って貰った、リンゴ飴がとても夢美味しかったと記憶があるので、久しぶりに食べ

てみたいと思つて」

優「そうなんだ、じゃあ、あるといいね、リンゴ飴」

健吾「はい」

そんなこんな、話をしていると、バスは、鬼討神社のある山に着いたが、拓也と凜は、お祭りの定番は、焼きそばか、お好み焼き、どっちだという答えは、決着が付かなかった。

健吾達は、バスから降り、少し歩くと、大きくて立派な石階段があった

凜「神社は、この上よ、さあ、行きましょ」

凜を先頭にして、歩く、健吾達、階段には、荷物を持った大人の人達が行ったり来たりをしている。恐らく、何かの準備をしているんだろう。

100段程の階段を上り、少し歩いた先の鳥居を抜けると、とても広い境内に、多くの出店が準備をしていた。

健吾「うわぁー予想以上に立派な神社ですね」

優「ホント、世界遺産で言われても納得できるよこれじゃ」

ミキ「ふふ、ありがと、ただいま、ユ○スコに申請中なんだ」

ミキが健吾達の後ろから、巫女服を着て、笑顔で話しかけた。

ミキ「みんな、来るの早かったね、まだ、3時半だよ」

拓也「誰かさんが、張り切つてな」

凜の方を見ながら拓也が言う

夢夢「それにしても、ミキさんの巫女服姿綺麗ですね。」

凜「ホント、よく、着こなしてるわね」

ミキ「当たり前よ、物心つく前から着てるんだもん。」

ミキ「それと、ちゃんと、3人の分も用意してあるから、期待して

てね！」

健吾の心の声「あー恥ずかしいな」

ミキ「せっかく、早く来たんだから、10年一度つまり、10年に一回しか、一般公開されない、
仏像を近くで見せてあげる」

そう言うミキは、健吾達を神社の中に案内した。
健吾達が神社の中に入り扉を開けると、そこ、右手に刀を、左手に巻物を等身大の迫力のある、仏像が立っていた。

5人「おおー」

ミキ「凄いでしょ、神社の本殿の所に飾るから、今、掃除してるんだ、普通の人は、こんなに近くで見れないよ」

健吾「これが、鬼を封じたっていう、侍ですか？」

ミキ「そうよ、その人は、言い伝えだと、名前も名乗らずに消えちゃったらしいから、名前は、分からないけど」

夢夢「この仏像が持つてる巻物は、なんですか？」

ミキ「私も中を見た事ないから、分からないけど、なんでも、鬼を封じる時に使った言霊が書いてあると、聞いてるわ」

夢夢「へえーそうなんだ」

ミキ「あと私の家では、先祖代々伝えて行く言葉を覚えたりするの」
凜「どう言う言葉なの？」

ミキ「えっと、こんなのだよ、鬼、再び現れし時、赤き小さい玉を持つ者に、この言葉を授けよ」

凜「この言葉って何？」

ミキ「ごめん、この言葉は、時が来るまで、他言しちゃいけない事になってるの」

凜「そうなんだ、ミキも色々大変ね」

ミキ「さて、そろそろ、いいかな？女の子3人は、私と一緒に隣の

部屋に来て、巫女服を着せてあげるから」

夢夢「やったー」

凜「一度着てみたかったのよね」

夢夢と凜は、ノリノリだったが、健吾は、余り乗る気ではなかった。そんな健吾に優が話しかける

優「ごめんね、本当は、私が着るはずだったのに・・・」

健吾「いえ、大丈夫です、気にしないでください・・・」

凜「さあ、行くわよ優（健吾）！」

健吾「ちよつと、相川さん！」

健吾は凜に手を引っ張られ、隣の部屋に連れてかれた

つづく

第55話 祭りは、計画を立てないで行った方が楽しい（後書き）

今、思い返すと、健吾は、泉の体に入ってから、いろんな服を着てますね。ワンピース、セーラー服、スク水、巫女服、この流れからだど、次は、メイド服でも、出てきそうな感じですが、残念ながら、そのフラグは、立ちそうにありません。

第56話 巫女服は、巫女さんが着なければコスプレ（前書き）

感想でアドバイスをいただき、この話からは、台本書きをやめました。そのため今までと違い、変に思つかもしれませんが、頑張ってますので、これからもよろしく願います。

第56話 巫女服は、巫女さんが着なければコスプレ

凜に手を引っ張られ隣の部屋に連れて行かれる健吾。そして部屋に入ると、そこには、三着の巫女服が、綺麗に並べられていた。

「さて、誰が最初に着る？」

ミキが健吾達三人を見て聞く。

「私が着る！」

夢夢が元気良く手を上げ名乗り出た。

「じゃあ、夢夢ちゃん、こっちに着て」

「うん」

夢夢がミキの所に歩いている時、凜が健吾の耳元で呟く。

「アンタは、私達が着替えてる時は、後ろでも、向いてなさい」

「わっ、分かりました」

健吾が顔を赤くして答える、ここ三日ほどで、女の子の裸は、『不可抗力』で何度も見ているが、やっぱり、慣れるものでもない。

ミキは、慣れた手つきで、夢夢と凜に巫女服を着せる。

「優（健吾）次は、貴方の番だから、こっちを向いていいわよ」

凜と呼ばれ、健吾が振り向くと、そこには、見事に巫女服を着こなしている、夢夢と凜が居た。

「うわあ、二人とも、とても良く似合ってますね」

「ありがとう」

夢夢が健吾の言葉に答える。

「さあ、次は、アンタの番よ、ちゃっちゃと、着せて貰っちゃいなさい」

そう言う凜は、健吾の背中をミキの方に押す。

「よろしく願います・・・」

「うん、じゃあまず、その、上着とＴシャツとズボンを脱いでちょうだい」

「えっ、Ｔシャツも脱ぐんですか？」

健吾は、戸惑いながら、ミキに聞く。

「そうよ、そうしないと、着崩れしちゃうし、ほら、早く脱いで」

健吾は、しぶしぶ、上着とズボンを脱いだが、Ｔシャツに手をかけ止まる。

「どうしたの？」

ミキは、首をかしげ、健吾に聞く。

「もう、早く、着替えなさいよ！」

そう言うた凛は、健吾の元に行き、Ｔシャツを無理やり脱がせた。

「ちよっと、相川さん！」

Ｔシャツを脱がされる健吾

健吾は、慌てて、両腕で抱え込むように、胸を隠した。

「どうして、ブラを着けてないのよ」

凛が健吾に聞く

「いや、だって、アレ、窮屈ですし……」

「その胸で何言ってるの、その言葉は、貧乳に使う権利は、無いのよ！」

「まあまあ、凛ちゃん、これは、これで、良い心がけだよ、本来、巫女服を着る時は、ブラは、着けないからね」

そう言いながらミキは、健吾に巫女服を着せていく。

「これで良しと」

最後に帯を締めながら、言うミキ。

「優ちゃん（健吾）も良く似あってるよ」

夢夢が健吾に言った。

「ありがとう……」

素直に喜べない健吾。

「それじゃ、みんな着替え終わったし、隣のバカと健吾（優）に見せに行きますか」

そう言うた凛は、部屋出て、隣の部屋に向かった。

その凛の姿を見て、夢夢は、思った。

（なんだかんだで、拓也君に見て貰いたいんだな、凛ちゃんは）

そして、健吾、夢夢、ミキも隣の部屋に向かった

続く

第56話 巫女服は、巫女さんが着なければコスプレ（後書き）

僕は、技量が、余りないので、気になる事があれば、アドバイスを
お願いします。

第57話 思い出は、残そう（前書き）

この間、アドバイスをいただき、小説の書き方を変えた、僕です。
これから、今まで書いた話なども少しずつ直して行こうと思います
ので、よろしくお願いします。

第57話 思い出は、残そう

健吾、凜、夢夢は、巫女服に着替え終わり、優と拓也の待っている、隣の部屋に入る

「おお！ 三人共、良く似合ってるな」

「ホント、みんな、似あってるよ」

拓也と優は、健吾達三人を見て言う。

「当たり前よ、みんな、元が良いんだから」

凜が、自信満々に答える。

「じゃあ、貴方達三人は、鳥居の立っている場所で、このパンフレットを来てくれた人達に五時から七時位まで、配ってね」

ミキは、部屋の隅にある大きな段ボールを拓也に差し出す

「この段ボールは、結構重いから、拓也君お願いね」

「ああ、分かったけど、凜達が配ってる時は、俺と健吾（優）は、どうすればいいんだ」

「そうね」

そう言つと、ミキは、部屋にあるタンスから、青い、背中に鬼討と書かれた、ハッピを健吾と優に渡した。

「じゃあ、拓也君と野田君も、これを着て、凜ちゃん達を手伝ってあげて」

「おう」

「うん、分かりました」

「じゃあ、私は、他に、仕事があるから、後は、よろしくね、パンフレットが余ったら、近くに台が置いてあるからその上に置いといて」

「その後は、私服は、この部屋の隣の部屋に置いておくから、お祭りが終わる10時まで、楽しんでいてね」

「分かりました、それじゃあ、行って来ます」

そう言つと健吾達は、鳥居のある場所に向かった

鳥居の前

健吾達は、5時になる少し前から、パンフレットを配り始めると、多くのお客さんが、パンフレットを貰ってってくれた。

「どうぞー どうぞー どうぞー どうぞー どうぞー」

健吾、凜、夢夢の巫女服姿が、人気を集め、1時間半もしないうちに、パンフレットの入った段ボールは、空になった。

「ふうー 随分早く、配り終わったわね」

凜がみんなに言う

「ああ、俺もう、腹減ったから、早く着替えて、みんなで出店に行こうぜ」

拓也が4人に促す

「ちよつと、待て」

4人が歩き出そうとした時、夢夢が引きとめ、使い捨てカメラを取り出した。

「せっかく、こんな格好しているんだから、写真取ってこよう」

「それは、いいわね、ちようど、鳥居が見える、あっちで取りましよう」

凜が笑顔でみんなに言う。

「じゃあ、ちよつと待ってて」

「すいません、ちよつといいですか？」

夢夢が近くのお兄さんに頼みその人に取ってもらう事にした。

「いくよー はい、チーズ！」

「カッシャー！」

5人は、写真を撮ってもらい、私服に着替え、お祭りを楽しむ為に、境内の出店へと、向かった。

続く。

第57話 思い出は、残そう（後書き）

みなさん、こんにちは（夜、朝だったら、ごめんなさい）今、僕は、専門学生をしています。が、中学、高校と、殆ど勉強をしておらず、自分の文章力の無さに嘆いています。ちゃんと、国語の勉強をもつとしておけば良かったと、最近後悔しております。

第58話 お祭りには、逢いたくない人も居る（前書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

第58話 お祭りには、逢いたくない人も居る

私服に着替え、お祭りの出店の中を歩いている、健吾達、境内には、多くの出店が並び、多くの人達が、お祭りを楽しんでいた。

「じゃあ、みんな、最初、何処へ行く？」

夢夢が目をか輝かせて、四人に聞く

「当然、『お好み焼き』『焼そば』（でしょ！）（だろ！）」

拓也と凜が、同時に言った。

「お好み焼きよ！」

「いや、焼そばだ！」

拓也と凜は、目から、火花を散らしている。

言い合っている二人を横目に夢夢が優に聞いた。

「決まりそうに無いな〜じゃあ、優ちゃんは、何が食べたい？」

「そうだね、私は……あれが良いか」

優は、近くにあった、たこ焼き屋を指さした。

「じゃあ決まり」

「えつ、『お好み焼き』『焼そば』は？」

結局、たこ焼きをみんなで食べて、それから、健吾達は、焼そば、お好み焼き、金魚すくい、綿あめ、お面、チョコバナナ、などの出店を回り、お祭りを楽しんでいたが、途中で、健吾と優は、拓也達三人と、はぐれてしまった。

「みんな何処行ったんだろ〜」

「これだけ、人が多いと中々見つかりませんね、さつき、境内の隅にベンチをみつけたので、とりあえず、そこへ行つて、見ませんか？」

健吾は、綿あめを持って、お面を着けていて、優は、綿あめ持ち、

腰には、さつき出店で買った、侍の刀と書かれた木刀を差している。
提案する健吾。

「そつだね、荷物も、結構あるし、そうしようか」

健吾と優は、境内の隅のベンチへ向かい、健吾は、ベンチに座りながら、拓也に電話をかけた。

「プルルルル、プルルルルル、プルルルルル、ガチャ！」

「あつ、拓也君、今、何処に居るの？」

「健吾か、今、俺達は——」

「ちよつと、今、当たったじゃない、何で倒れないのよ——」

「残念だったね、凜ちゃん、あの、縫いぐるみは、私が倒すよ！」

電話ごしから、凜と夢夢の元気な声が聞こえて来た。

「大体、分かったか？」

「うん、射的かな？」

「ああ、二人とも、変なスイッチ入ってて、まだかかりそうだ——」

また、電話ごしに二人の声が聞こえて来る。

「ちよつと、拓也、コレ持ってて、本気出すから——」

「拓也君、コツチもお願い」

「おっおい！ という訳でこっちは、まだまだ、終わりそうにないから、そっちは、泉と一緒に祭りを楽しんでるよ、じゃあそつゆうことで——」

「たっ、拓也君」

「プープープー」

「拓也君は、何だつて？」

「三人は、今、射的をしていて、まだまだ終わりそうにないから、そっちは、そつちで楽しめと言つ事です」

「ふーん、そうなんだ」

「……………」

静かなベンチで少し、沈黙する二人。

健吾の心の声

（せっかく、良い分囲気なのになー体が逆じゃ無ければよかったのに）

「ねえ、健吾君、健吾君は、体の方は慣れた？」

「体ですか、そうですね、もうずいぶん、慣れてきたと思うので、あと、少しで、幻界にも行けるようになると思いますが」

「わたしも、だいぶ慣れてきたから、もしかしたら、明日か明後日には、自分の体に戻れるかもね」

「そうですね」

「あっ！」

何かを思い出したらしく、立ち上がる優

「私、ちよつと買い忘れたモノがあるから、ちよつとここで待って」

「分かりました、何を買に行くんですか？」

「……内緒」

そう言つと優は、出店の方に歩いて行つた。

優が買い物に向かつてすぐ、健吾の座るベンチに、ガラの悪い、八人組みの男達が、しゃべりながら向かつて来た。

「結局、一人も女、掴まんなかったじゃねーか」

「お前の誘い方が、悪いんだろ」

「いや、あれくらい、強引なのが良いんだよ」

「それで、失敗してんじゃねーか」

健吾の心の声

（うるさいなー早くどっか行かないかなー）

「おつ、あそこの、ベンチに居る女の子可愛くね」
「ホントだ」

男達は、健吾が座っている、ベンチを取り囲んだ

「な、何ですか……」

「君、可愛いね、一人？俺達と一緒に、祭りを楽しまない？」

「いえ、大丈夫です、一緒に来ている人が居るので」

「一緒？それって、さっきここを通った男？ あいつが彼氏？」

「……そうですけど」

そんな話を話している時、一人の男が健吾の顔見て、あることに気付いた。

「あつ！ テメーは、三日前、俺の股間を蹴りやがった、ガキだな！」

「あつ」

健吾も三日のしつこく、絡んできた、ガラの悪いチンピラの事を思い出した。

「テメーのせいで大変だったんだからな」

「何？ この女の子、お前に何かしたの？」

「ああ、実は……かくかくしかじか、以下省略」

「へえーじゃあ、そうゆう、いけない娘には、お仕置きをしないと
いけないね」

健吾は、ヤバイと思いその場から、逃げようとするが、男達に掴まれてしまう。

「やめてください！大声出しますよ」

「別に、出しても良いけど、そんな事したら、君を彼氏を探して、
痛い目みて、貰うよ、ちゃんと、顔

を覚えてるから、まだ近くに居るんだろ？」

「くっ」

「それが、嫌だったら、ちょっと、俺達について来て貰おうか？」

優の事を出されて、健吾に、選択権は無かった。

「……わかりました——」

「よし、じゃあコツチだ」

健吾は、男達に山の中に連れて行かれてしまった。

続く

第58話 お祭りには、逢いたくない人も居る（後書き）

お祭りの事を書いたので、思ったのですが、僕は、綿飴が好きなので、お祭りに行ったら、良く買うのですが、最近の綿飴ってキャラクターのプリントしてある袋に入ってるんで、買う時少し、恥ずかしいですね。

第59話 戦力の差は、圧倒的な経験値の差だった（前書き）

読んで下さり、ありがとうございます。

第59話 戦力の差は、圧倒的な経験値の差だった

健吾は、男達に腕を掴まれ、山の中に連れて行かれてしまう。

少し、歩いて行くと、木が生えてない、広場のような場所に出た。

「ここまで、来れば、誰も来ないだろ、どうする？ 輪姦^{まわす}か？」

「もちろん、当たり前だろ」

「なに言ってるんだよ！ 冗談だろ！ ふざけんな！」

健吾は、逃げようとして、暴れるが、両腕を二人の男に掴まれてしまった。

「くっ」

「なんだ、コイツ、男みたいやしやべり方して、まあ、そうやって抵抗してくれたほうが、俺達は、燃えるけどね」

こないだのチンピラが不気味な笑いをして、健吾の顎に手をかけながら、言った。

「くそ」

健吾は、最後の抵抗で、チンピラの指に咬みついた。

「痛て！ このガキ、そんなに痛い目がみてーのか！！」

チンピラは、健吾の顔目がけ、拳を振り上げる。

目を瞑る健吾

「がし！」

何かが、掴む音がし、健吾が目を開けると、そこには、チンピラの腕を掴む優の姿があった。

「いつ、泉さん！？」

「男の人が、こんな大勢で、女の子を、襲うなんて、恥ずかしくないんですか！！」

優の言葉には、怒りが読みとれた。

「お前、さつきコイツと一緒にいた彼氏だな、せつかく彼女がお前の事を見逃せてやったのに、わざわざ、ボコられに来たのか？」

一人の男が言った。

「とりあえず、この手を離せよ」

チンピラが優の顔を睨みつける。

「分かったわ、離すよ、でも、その前に」

「ヒツユ！ ドカ！！ ドカ！！」

優は、健吾の腕を掴んでいた、二人の男を蹴り飛ばし、健吾を抱えて、男達と少し距離をとった。

健吾を降ろす優

「どさ」

「いつ、泉さん、どうしてここに？」

「ベンチの近くに居た人が教えてくれたんだよ、女の子が男の人に囲まれて、山の中に入って行ったって」

「健吾君、私を庇ってくれたのは、嬉しいけど、こんな時くらい、私を頼ってよ」

「すいません、僕——」

「言い訳は、後で聞いてあげる、それよりも、あの人達を片づけよう」

優は、男達の方を見る。

「片づけるなんて、無理ですよ、あつちは、八人も居るんですよ！」

「健吾君、多分、大丈夫、私達は、負けないよ、さっきのパンチだって、私には、ゆっくりに見えたし、あんな、人達、バクに比べたら、どおってこと無いよ」

優は、腰に差しといた、出店で買った、木刀を健吾に渡す。

「確かに、私の体は、小さくて、力も弱いけど、健吾君なら、それがあればきつと大丈夫だよ」

「何をごちゃごちゃ、しゃべってんだ、ガキ、二人に俺達が、殺られる訳ねーだろ！」

男たちは、健吾と優に向かって走って来る。

健吾と優に殴りかかる男達だが、二人には、一発も当たらない。

「おらー！」

健吾の心の声

（おつ、遅い、これなら）

健吾は、持っている、木刀を使い男達むを圧倒する。

優も、素手で男達を次々倒して行く。

健吾達が、負ける要素は無かった、なぜなら、今まで、幻界で、何
度もバクと命がけの戦いをし、例え、体が違っても、能力が使えな
くても、ギリギリの戦いで、魂に染み込んだ、スキルは、その辺の
チンピラに負ける訳がなかった。

「何だこいつら！？ 強すぎる」

「駄目だ、逃げろー」

男たちは、体を引き摺ったり、肩を貸し合ったりして、ボロボロ
になりながら、山の中へ逃げて行った。

続く

第59話 戦力の差は、圧倒的な経験値の差だった（後書き）

最近、あとがきが、変な愚痴コーナーになってきたと気付いた、あの日のあひるです。

お祭りで、思ったのですが、ノリでやってしまった、金魚すくいの、金魚の1カ月後の生存率ってどれくらいなんでしょう？やったは、いいけど、家に水槽がないとか、よくありそうだと思うのですが。やっぱり、命って大切だよな。小学校の時、ノリで買った、亀がまだ元気な、今日この頃です。

第60話 秘密は、ばれた（前書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

第60話 秘密は、ばれた

男達が逃げてった後の、健吾と優。

「泉さん、本当にありがとうございました。もし、泉さんが来なければ僕は——」

健吾は、本当に申し訳ない顔をして、優に頭を下げた。

「やめてよ、健吾君、今まで、健吾君がしてくれた事に比べれば大したことじゃ無いよ」

「でも——」

「いいってもう、早く、境内に戻ろう」

優が健吾の手を引き一歩踏み出した時二人に、ある感覚が流れた。

「あっ！」

二人同時に、声を上げる。

「自分の体に——」

健吾が手を見ながら言う。

「戻る！」

言葉では、表わせないが、二人には、確かに、戻れるという、感覚が体、いや、魂にまで感じ取れた。

「健吾君も！？ 私も今、戻れるっていう感覚を感じたよ、きっとさっきの戦いで、完全に体が慣れたんだよ」

「やった、戻るよ、戻るよ！」

二人は手を繋ぎ合って喜んだ。

健吾と優は、さっきまで居た、ベンチから、幻界に行く事にし、さっきのベンチへ、小走りで行った。

ベンチに着くと二人は、すぐに座った。

「じゃあ、幻界に行くよ、場所は、今居る場所と同じ所で」
「うん、分かった」

二人は、目を瞑り幻界に向かった。

幻界に着き、健吾が目を開けるとそこには、優の姿があった。

「やった、幻界に来れたよ、健吾君！」

「はい、これで、現実世界に戻って、体が元に戻っていれば成功なのですが」

「じゃあ、早く戻って確かめよう！」

「はい！」

今度は現実世界に戻る二人、そして、健吾が目を開けると。

「……」

久々に肉眼で見た、優の姿が。

「戻れたー！ー！！」

大喜びをする二人、

「やった、やった、戻れたよー」

久々の自分の体を確認する二人だったが、優があることに気付いた。

「健吾君……………」

顔を赤くしている優。

「はい、何ですか？」

「なんで、ぶっブラ、してないの？ ちゃんと、渡したよね？」

「ギクッ！ いや、え〜と、あの、窮屈だったんで……………」

「まさか、ずっと、着けないで、遊んでたの？」

「はっ、はい……………」

「もう〜〜恥ずかしいじゃん！！」

優は、上着のチャックを一番上まであげる。

「もう……」

優も健吾も、二人とも顔が真っ赤だ。

「この三日間で、見た物は、全部無かった事にしよ……」

「分かりました……」

せつかく、元の体に戻れたのに、ちょっと気まずい空気になってしまった、二人であった。

続く

第60話 秘密は、ばれた（後書き）

やっと、元の体に戻れました。だいぶ長かったと、サブタイトルを見直して、改めて思いました。

第61話 あの時君達は、何をしてた？（前書き）

では、第61話、どうぞ

第61話 あの時君達は、何をしてた？

境内の端のベンチに座っている、健吾と優。

「そう言えば、凜ちゃん達は、今どうしているのかな？」

はぐれてしまった、凜達を思い出し、健吾に聞く優。

「そう言えば、そうですね、ちょっと、待って下さい、今、拓也君に電話をしてみます」

健吾は、携帯を取り出し、拓也に電話をかけた。

「プルルルル、プルルルル、プルルルル——」

「ただいま、この電話は、電源が入っていないか、電波の届かない

「おかしいな、繋がらないですね」

「じゃあ、とりあえず、射的のお店の所に行ってみよ」

優が、ベンチから立ち上がりながら言う。

「そうですね、行ってみましょう」

健吾と優は、射的の outlet に向かった。

少し、時を戻り、健吾と優が、チンピラ達と戦っている頃の拓也達は。

拓也、凜、夢夢の3人は、お祭りの中を歩いていた。

「いやー熱い、銃撃戦だったわね」

凜は、指でピストルの形を作り、得意げに言う。

「何が、熱い、銃撃戦だよ、コレどうするんだよ！」

拓也は、大きな、ぬいぐるみを両手で抱えながら、持っている。

「こんなの、持ってたなら、遊べねーぞ」

「分かってるわよ、とりあえず、さっき服を置かして貰った、部屋に置いてきましょう」

拓也達は、ぬいぐるみなどの、荷物を置く為に、神社の方に向か

った。

神社に着くとそこには、ミキの姿があった。

「あつミキさん」

夢夢がミキを見つけ叫ぶ。

「やあ、みんな、お祭りは、楽しんでるみたいだね」

ミキは、拓也の持つている、ぬいぐるみを見て笑顔で、言った。

「私が仕留めたのよ、それより、ミキ、お酒なんて持って、何処行くの？」

ミキの手には、一升瓶が握られていた。

「これから、鬼を封じてあると言われている、祠ほに、お供えに行くんだけど」

ミキは、山の方を指差し、言った。

「へえーそうなんだ、私達も一緒に行つていい？」

好奇心旺盛な凜が言う。

「別に良いけど、そんな、面白いモノでも無いよ、ただ、祠の前にお供えするだけだから」

「山の中に女の子一人つて、危ないし、みんなで、行こうよ、それに私も少し興味があるし」

夢夢は、ミキに言う。

「分かった、ありがとう」

「じゃあ、決まりね、ちよつと待つて、今、荷物を置いて来るから」

「健吾と泉は、どうするんだ？」

「せっかく、二人で、居るんだし、邪魔しちゃ悪いわよ」

「それもそうだな」

拓也達は、荷物を置き、4人で、森の中の祠に向かった。

続く

第61話 あの時君達は、何をしてた？（後書き）

どうも、ある日のおひるです、こないだ、同じクラスの人が、なぜかポケモンをやっていたのですが、最近のは、凄いですね、何が凄かって、通信ケーブルが必要ないんですから、昔じゃ、考えられません。それに、ゲーム機も今は、充電式ですからいいですね、僕が、ポケモンをやっていた時は単三電池が無いと動きませんでしたからね、便利な世の中になったものです。

第62話 鬼は、現れた（前書き）

さてさて、鬼話編も後半突入です。

第62話 鬼は、現れた

鬼を封じている、祠に向かう、拓也、凜、夢夢、ミキの三人。

「ミキ、あと、どれくらい？」

「もう少しで、見えてくるよ」

少し、歩いて行くと、開けた場所に出て、そこには、一メートル程大きさの小さな木の家のようなモノあり、それには、鉄の鎖がグルグルに巻かれ、御札が張ってあった。どうやらこれが鬼が封じてある祠らしい。

「ミキあれがそう？」

「そうだけど、おかしいな？誰か居る？」

そこには、先ほど、健吾と優にやられた、男、八人組みが居た。

「あなた達、そこで、何をしているの、そこは、鬼が封じてある場所なの、無関係な人は、ここから立ち去りなさい」

ミキが男達に向かって叫ぶ。

「うるせえな、何だお前、巫女か、俺達がどこに居ようと俺達の勝手だろ」

「なんで、こいつら、こんな、ボロボロ何だ？」

拓也が疑問に思った。

「誰かに、喧嘩売って負けたんじゃない？」

「ギク！」

男達の顔がこわばる。

「凶星か」

「凶星みたいね」

「うるせえー、だから、俺達がどこに居ようと、俺達の勝手だろ」

「ここは、私の家の土地です、立ち去らないなら、不法侵入で警察

に突き出しますよ」

「うるせえなー何が私の土地だよ、何が鬼だよ、そんなもの居るわけねーだろ」

「ドカ！ バキー！」

チンピラの男が祠を蹴飛ばし、祠を壊してしまった。

「何が、鬼だ、見る、何も起きねえじゃねえーか——」

周りの空気が変わった。

いきなり、この周囲に突風が吹き荒れる。

「なに、これ、祠のあった場所から、大きな、歪みの力が漏れ出してる」

夢夢が震えた声で言う。

拓也、凜、夢夢の三人は、歪みの力を感じ取れているが。歪みの力を感じられない、ミキや、チンピラ達も、この異常さを感じ取っていた。

「何！？」

ミキが叫ぶ

「何だよ、いったい何が起こってんだ！？」

男達も状況が解らず、混乱している。

祠から光の粒が出てきて、一つに集まっていく。

「マジか！？ マジで出てくるつもりか、鬼が」

拓也が叫ぶ

光の粒は、どんどん集まっていき、そして、約四メートル、体表、赤く、頭には、長い角が一本、体は、細く、眼は、鋭い、右手には、黒い金棒を持ち、二本足で立っている、『ソイツ』が居た。

続く

第62話 鬼は、現れた（後書き）

チンピラ、お前の役目は、終わった。

第63話 能力は、必要な時に使えないと意味がない（前書き）

短いですが、どうぞ

第63話 能力は、必要な時に使えないと意味がない

「なんだよ、これ!？」

「いいから、逃げろー!!」

目の前に現れた鬼を目の当たりにし、逃げようとする男達

「ううううぎややややややー」

「どおーん!!」

鬼は、叫び金棒を男達に向かって振り下ろしたが、男達には当たりはしなかったが、地震のような大きな振動が起き、辺り一面に亀裂が走った。

「ひいひい」

男達は、一目散に、来た方向へ逃げていくが、鬼も男達を追って行く。

「どうする？ 鬼が出て来ちゃったわよ!」

凜もが拓也に言う。

「どうするも何も、現実世界じゃ俺達、能力使えないんだぞ、どうしようもないだろ!」

「まさか、本当に鬼が居るなんて……あっちの方向だと、お祭りの会場に行っちゃう……どうしょ、どうしょ……」

ミキは、頭を抱え、怯えている

「あっ!」

夢夢は、何かを思い出したらしく、パンフレットを取り出した。

「確か、パンフレットに――」

夢夢は、パンフレットを取り出し、ある部分に注目した。

パンフレット

『その侍、手に小さき玉を持ち言葉を放つと、右手に光が集まり、

刀が生まれた』

「これだ！ 小さき玉……つまり夢玉、言葉を放つ、夢玉の力で、現実世界でも能力を使えるようにする何らかの『キーワード』これが分かれば……」

「そうだ、ミキちゃん、先祖代々伝えていく言葉があるっていったよね！？」

「うん、確かにあるけど」

「なんて言う言葉を私に教えて！」

「でも、その言葉は、赤き小さな玉を持つ者にしか教えちゃ駄目だつて……」

「それなら、大丈夫」

夢夢は、ポケットから健吾から預かっていた夢玉を取り出し、ミキに見せた。

「！？ 夢夢ちゃんそれって——」

「説明は、後ですから、早く言葉を——」

「鬼再び現れし時、赤き小さな玉を持つ者にこの言葉を授けよ——」

「その言葉——『夢放解』（むほうかい）——夢放解というの」

「分かった、ありがと」

「凜ちゃん！ 拓也君！ 夢玉を握っている私の右手を握って——」

「おう！」

「分かったわ」

凜と拓也は、夢夢の右手を握った。

「じゃあ、三人一緒に言うよ、せーの」

「……夢放解！」「」「」

夢玉から光が放たれた。

続く

第64話 戦は、始まる

「『夢放解！』」

拓也、凜、夢夢の三人が、そう、言い放つと、夢玉から、光が放たれた。

鬼は、逃げていくチンピラ達を追って、さっきまで、健吾と優が、チンピラ達と戦っていた、広場にさしかかっていた。

「あつ！」「ドタ！」

一人のチンピラが石に躓き倒れた、

「ドスン！ドスン！ドスン！」

「ひっいいい、嫌だ、嫌だ、ウソだ、夢だ」

ゆつくりと歩いてきた鬼が、その男に向かって、金棒を振り下ろす。

「あああああーーーーー」

「ヒュッ！」

「どツがあああん！！！！」

間一髪、拓也がチンピラを掴み、金棒をから避けた。

「さっさと逃げろ！死ぬぞ！」

強い口調で言う拓也。

「わっ分かった……ありがとう」

チンピラ達は逃げてて行き、広場には、拓也、凜、夢夢の三人の姿だけが残った。

三人は、鬼から、三十メートル程の距離を取っており、鬼は、金棒を振り降ろした位置で静止していた。

「たく、なんつう、破壊力だ」

拓也が鬼の足元を見て言う。さっき振り下ろした金棒が、その場所にクレーターを作り、地面の亀裂が拓也達の足元にまで来ていた。

「さすが、現実世界まで来れるだけあって、今までのバクとは、格が違っわ」

夢夢が鬼から発せられている、歪みの力を感じ取って言った。

「でも、昔の侍に出来たんだから、私達だって、倒せる筈よ、ミキが巻物を持って来るまで時間をかせぐわよ」

そう言くと、凜は、右手に集中し、光を集め長刀を取り出した。

「ああ」

「うん」

拓也も、右腕に黒い鎧出し、夢夢は、手のひらに炎を出した。

「はあ、はあ、はあ」

その頃、ミキは、本殿を目指し、山の中を走っていた。

そして健吾と優も走っていた。
続く

第65話 巫女は、走る（前書き）

ちよつと、走っている、ミキがなぜ、走っているのか？と言つ話です。

第65話 巫女は、走る

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

ミキは、山の中を本殿に向かって、走っていた、さつき、夢夢に巻物を持ってきて欲しいと頼まれたからだ。

先ほど、3人が「夢放解」と叫んだ後、ミキは夢夢に、こう言われた。

「ミキちゃん、さつき本殿で言ったよね、侍の仏像に握られていた巻物には、侍が、鬼を封じる為に使った『言霊』が書いてあるって？」

「うん、私も中身は見た事ないけど、そう伝えられているわ」

「ミキちゃん、私達があの鬼を何とか、踏み止ませておくから、その巻物を持ってきて！お願い」

夢夢が真剣な眼差しで、ミキに言う。

「踏みと止ませる、なんて無理だよ、夢夢ちゃん達に何ができるって言うの？」

ミキが震えながら、言った。

夢夢は自分の体の前に手のひらを出し、自分の発火能力で、手のひらに炎を出した。

「ボッオ！」

「えっ！？」

それを見て、驚くミキ。

「大丈夫よ、ミキ、私達普通じゃないから、あんな鬼なんか、怖くないから……だから、お願い、私からも頼むわ」

笑顔で言う凜だが、その声は、震えていた。

「ぎゅっ！」

両手を握り閉めるミキ

「分かった、すぐ持ってくるから、無理しちゃ駄目だよ」

「うん」

そして、ミキは、本殿に向かって、走り出した。

「凜、お前、こういう嘘が下手だな（怖くないから）」

「嘘なんかじゃ、無いわよ！」

「分かったよ」

そして、凜の頭を撫でながら、拓也が言った。

「行くぞ！」

「「うん！」」

第6話 油断は、禁物

拓也、凜、夢夢達が鬼と対峙している時、健吾と優は、ミキと同様に走っていた、なぜなら、鬼が現れた時に歪みの力を感じ取ったからだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

「健吾君コッチ、さっきの広場の方だよ」

「うん、分かってる、多分この大きな歪みの力の正体は……」

「きつと、此処に、封じられていた、鬼だろうね……」

二人を走りながらどうにか、状況の把握をしようとしている。

「それにしても、なんで、歪みの力だけじゃなく、拓也君達の、夢力も感じられるんだ？此処は、幻界じゃないのに」

健吾が優に聞いてみる。

「きつと、何かの方法があつて、現実世界でも能力が使えるようになったんだよ、とにかく、今は急いで、凜ちゃん達の元に行こう！」

「うん！」

（拓也達）

拓也、凜、夢夢の三人は、三十メートル程離れたところで、鬼と対峙している。

「さて、どうしたものかな？」

拓也が左手で頭を掻きながら言う。

「あの、破壊力を見ると接近戦は、危険すぎるわ」
凜が鬼によって破壊された地面を見る。

「じゃあ、中・遠距離の攻撃で……」

「ドツツ!!」

夢夢が言いかけていた瞬間、鬼が凄いスピードで、三人の間合いを詰めて来た、そして、凜に向かって金棒を振り下ろす
「ビュツツツ!!」

「え？」

「凜ちゃん!!」

続く

第67話 ゴングは、鳴った

「凜ちゃん!!」

夢夢が悲鳴にも似た声が辺りに響いた。

鬼は、凜に向かって金棒を振り下ろす。

「ビュッッッ!!」

「危ねええ!!」

「ドガァン!!」

間一髪のところ、鬼の金棒を拓也が右腕の鎧で思いっきり殴り付け、軌道を逸らすことが出来た。

「きゃやあああ!!」

それでも、鬼が振り下ろした、金棒は、辺りの地面を抉り、その衝撃波で、凜と夢夢は、30メートル程吹き飛んだ。

「凜! 雨音ちゃん!!」

「ガシ!!」

鬼が左手で拓也の右足を掴んだ。

「な!?!」

そして、鬼は、拓也の右足を掴み、頭上で振り回すと、まるで子供が飽きたおもちゃを投げ捨てるように、山の中に投げ込んだ。

「ぐああああああ」

「バキ、バキバキ、バキバキバキバキ!!」

10本以上の木が、拓也にぶつかり、折れた。
「がはっ」

「拓也！」

体制を立て直した、凜が心配そうに名前を叫ぶ。

「よくも拓也を」

「パタっ」

「はああ」

凜は、その場に薙刀を置き、両手を自分の頭上の持ちあげた、そして、凜の能力の一つの物体浮遊を使い、さっき折れた木を鬼に勢い良く、飛ばせた。

「はあ！」

「ドオオン！ドオオオン！ドオン！ドオオオオン！ドオオオン！ドオオ！……」

鬼は、その場から、一步も動かず、辺り一体に砂埃が舞い上がった。

「はあ、はああ、はあ、はああ、手ごたえあったわよ」

次の瞬間、砂埃の中から、一本の丸太が、凜に向かって飛んできた。

「きやつっ！」

激突し倒れこむ凜、砂埃が晴れていくとそこには、まるで、何事も無かったかのように立っている鬼の姿があった。

「あれを食らって、無傷なの！？」

「ぐへへえええ、ぐはあああ」

鬼が、まるで、何をしても無駄だと言うように、不気味に笑う。

「我、全て、燃やしたく、汝、私の為、灰塵となれ……」

「夢夢!？」

凜が夢夢の方を見ると、夢夢が何かの、呪文のような言葉を放っていた、そして、どンドン、夢夢が頭上に持ち上げた手のひらの上にある炎の球が大きくなっていく。

そして、夢夢の手のひらの球は、直径2メートル程になった。

「はぁ、はぁ、はぁ、灰になってよ」

つづく

第68話 燃えるものは、燃やしてしまおう（前書き）

読んでいただき、ありがとうございます、もしよろしければ感想などお願いします。

第68話 燃えるものは、燃やしてしまおう

「はあ、はあ、はあ、はあ、灰になってよ」

そう言つと夢夢は、鬼向かつて走っていき、15メートル程まで近づいたところで、手のひらの直径2メートル程の炎の球を鬼に向かって、投げつけた。

「はあっ！」

炎の球は、鬼に当たると、直径10メートル程に拡大し、鬼を包みこんだ。

「ぐぎややややああああ」

「効いてる！？」

その様子を見ていた凜が、体を起こし、叫ぶ。

「ううううう、そのまま、死んじゃえええー！！」

夢夢がそう叫ぶと、炎の球が一気に光を上げ、辺り一面を煙が覆った。

「はあ、はあ、はあ、はあはあ」

「やったのか？」

体を引き摺りながら、拓也も凜の元に来た。

「拓也！？アンタ、大丈夫なの！？」

「ああ、なんとかな、傷は、大体は、夢力で治したが、少し力を使いすぎたみたいだ、それより、鬼は？」

煙が晴れていく、そしてそこには、黒焦げになって、うつ伏せに倒れている、鬼と、それを見ている夢夢の姿があった。

「やったわ！ 夢夢ちゃんが鬼を倒したわ」

「いや、まだだ、鬼が消えてないから、まだ、鬼は、死んでない、雨音ちゃん早く、止めを！！」

「はあ、はあ、はあ、分かってるよ」

夢夢が返事をするため、拓也の方に振り向いた瞬間、夢夢の腰に衝撃が走った。

「夢夢ちゃん、後ろおおおお」

「えっ？」

「ヴァギー！！」

何かが折れる、いや、固いモノが砕ける音がした、夢夢の腰に鬼の金棒が襲い、夢夢は、悲鳴を上げる暇もなく、山の中まで、吹き飛ばされた。

「雨音ちゃん！」

「夢夢ちゃん！」

夢夢を吹き飛ばし、立ちあがった鬼の黒焦げになった体表に、多くのヒビが入っている、そして数秒後、「パラパラ」と黒焦げにな

った体表が落ち、元の赤い体表に戻った。

「あの攻撃で、ダメージが無いの？　アイツは、不死身なの？」
凜が、震える声で言う。

「凜、お前は、夢夢ちゃんを見つけて、一緒に逃げろ！それまで俺が時間を稼ぐ」

「何バカ言つてのよ、アンター人で死ぬつもり！？」

「ドスン、ドスン、ドスン」

鬼は、ゆっくりと近づいてきている。

「大丈夫、俺は、そう簡単に、死なねーから」
拓也そう、笑顔で言うと、鬼に向かって走っていった。

「うおおおおおお！！」

続く

第69話 勝負は、これから

「うおおおおおお」

鬼に向かつて走って行く拓也。

「（今、健吾と優は、入れ替わっているんだ、俺がしっかりしなきゃ駄目だ）」

鬼の金棒の、間合いに入った瞬間、鬼が金棒を拓也目掛けて、振り下ろす。

「（集中だ集中するんだ）」

髪を金棒がかすめ、ギリギリのところまで、かわし、鬼の懷に飛び込んだ、次に、鬼の左拳が拓也を襲おうとするが、それもかわし、左腕を蹴り、拓也は、鬼の顔の前に来た。

「どんなに、防御力があっても、目玉は弱いだろ！眼球ごと頭を貫いてやる！！」

拓也が鬼の左目、目がけ右拳を突き出す

「うおおおお！！」

「グチャッ」

「ぐぎややややややややや」

「やった……」

確かに、拓也は、鬼の眼球を潰す事が出来、殺す事が出来たと思

えた、しかし、鬼が拓也の胴体を左手で掴み、眼球を潰すまでしか、腕が行かなかった。

「クソ！クソ！！後少しかったのに、離しやがれ」

拓也は、両腕も握られ身動きが取れないようになってしまった。

「拓也！」

凜の声が空しく広場に響きわた。

鬼は、拓也を掴んでいる、左手に力を入れる。

「ぐああああ、クソ、もう目玉が再生してやがる」

そして鬼が、拓也の頭目がけ、金棒を振った。

「もう、駄目だ死んだ……」

「ブシュッ！」

拓也を掴んでいた、鬼の左手が宙を舞った。

「ごめん、拓也君、遅くなつて」

そこには、拓也を担いで、鬼から、距離を取った健吾の姿があった。

続
く

第70話 変わらない『モノ』は、無い（前書き）

感想、質問など御待ちしております。

第70話 変わらない『モノ』は、無い

「ぐぎやややあぁあ」

左手を健吾に斬られ、痛がる鬼、その隙に健吾は、拓也を担いで、凜の居る所まで、距離を取っていた、そこには、優と夢夢の姿もあった。

「お前は、健吾なのか？それとも優なのか？」

元の体に戻ったこのと知らない、拓也は、健吾に尋ねた。

「僕は、僕です、健吾ですよ、お祭りの途中で元の体に戻れたんです、そして歪みの力を感じて、此処へ来る途中に、怪我をした、雨音さんを見つけて、能力を使うための言霊を教えて貰って、雨音さんの怪我を治して、此処に来た訳です」

「そうか、悪いな、また助けて貰って、今、鬼討が、侍が鬼を封じる時に使った、言霊が書いてある巻物を本殿に取りに行っている、それまで何とか、俺達で時間を……痛っ！」

「拓也君、無理しちゃ駄目だよ、もうあまり夢力も残ってないんだから」

「泉さん、少し、此処から離れてて、拓也君と相川さんの傷を治してあげ、て僕は、鬼討さんが巻物を持つてくるまで、時間を稼ぐから」

「うん、分かった、健吾君、無理しないで」

「はい」

優達達が、少し此処を離れ始めると、左手を再生した、鬼が健吾

に向かって突進してきた。

「はっ早い！」

しかし、鬼の攻撃は直線的なモノだったので、健吾は、金棒を避けた瞬間、カウンターで鬼の左わき腹を斬り裂く

「ぐぎやややや」

そして、健吾は、鬼から少し距離を取り、鬼に向かって斬撃を放った。

「ツバーン！」

「（アイツは、確かに、パワーもスピードも凄いけど、攻撃も直線的で、動きも隙が多い、これならいける）」

健吾は、鬼に向かって走っていき、鬼の金棒をかわし、懷に潜り込み、何度も鬼を斬り付けた。

「ブシュッ！ズバ！、バシュ、ズボッ！」

それを見ていた夢夢が何かに気が付いた。

「おかしい、おかしいよ……」

「ああ、確かにおかしい、健吾が、あれだけ優勢的に戦っていて、あれだけ斬りつけているのに、あの鬼の歪みの力が全く減ってない」

「違うわ、むしろ、増えているわ」

「増えてるって、一体どういう事！？」

凜が夢夢の肩を掴み聞く。

「それは、つまり……」

「はあ、はあ、はあ、はあ」

「はあッ！」

「ドオオンー！」

健吾は、を鬼を数メートル蹴り飛ばし、そこから、少し離れて、
斬撃を放つ

「いい加減、くたばれー！」

辺りに砂埃が舞い上がる、

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

「ぎぎぎ ややややああああ」

その瞬間、鬼の歪みの力に大きな変化が在った事をその場に居た、
五人は、感じ取った。

砂埃が晴れるとそこには、体長約二メートル程になった鬼が居た。

夢夢

「それは、つまり、あの鬼は、今まで、本気を出していなかったんだよ」

続く

第71話 鬼は、覚醒した

砂埃が晴れると、そこには、体長が二メートル程になり、金棒も細くなり、人型に近づいた『鬼』が立っていた。

「なっ!？」

健吾達は、その姿を見て、驚いていた、ただ、姿が変わっただけでは無いことを、鬼から発せられる、歪みの力で感じ取っていた。

「何なのよ、あの姿は」

凜が震えた声で、呟いた。

「恐らく、あの鬼は、長い間、封印されていたせいで、今まで、十分に、力を発揮出来ていなかったんだよ、それが、健吾君と戦ったせいで、本当の力に目覚めてしまったんだよ」

そう、夢夢が鬼の歪みの力を感じ取り、推測した。

「ギロ」

鬼が、健吾を睨み、ゆっくりと、右手で、金棒を頭上に上げた。

「？」

「ヒュッ!」

そして、鬼は、健吾に向かって、金棒を振り下ろすと、その衝撃波で、地面が健吾に向かって、一直線に割れ、健吾を襲おうとする。
「ドガガガガガアアア!」

「何!？」

健吾は、素早く反応し、右後方に跳び、鬼の衝撃波を避けるが、

次の瞬間、鬼は、健吾の背後に周りこみ、右脇腹を金棒で叩きつけた。

「な?!」

「ヒュッ!」

「ボォギ!バァギ!」

鈍い音が、辺りに響き渡り、健吾は、地面に叩きけられる。

「ドガァァァン!」

「ぐぁぁぁ!」

健吾が叩きつけられた地面は、割れ、辺り一帯の地面にひび割れが起こったが、健吾、すぐさま、体制を整え刀を構え、鬼の方見た。
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

「(さつきまでと、まるで動きが違う……そう長く時間を稼いでられないぞ)」

「健吾君!」

健吾の様子を見て、優が健吾の元へ行こうとするが、それを拓也が肩を掴み止めた

「待て、泉!今行っても、健吾の足でまといになるだけだぞ!」

「でも……」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

「みんな、大丈夫?、持って来たよ」

そこには、息を切らして、右手に巻物を持っている、ミキの姿があった。

「ミキ!」

続
く

第72話 希望は、到着した（前書き）

感想、御待ちしております。

第72話 希望は、到着した

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

「みんな、大丈夫？、持って来たよ」

そこには、息を切らして、右手に巻物を持っている、ミキの姿があった。

「ミキ！」

ミキの姿は、ボロボロだった、巫女服は、泥で汚れ、ところどころ、破けていた、山の中を必死で走って来た事が、一目で分かった。

「大丈夫！？ミキちゃん」

夢夢が心配そうに声をかけた。

「私は、大丈夫だから、あの鬼を……」

そう言つとミキは、夢夢に巻物を手渡した。

その頃、健吾は、鬼とギリギリの戦いを続けていた。

「カッン！カッン！カッン！！」

健吾り刀と、鬼の金棒が交差するたび、周りに衝撃が走る、健吾は致命傷になるような傷は負っていないが、鬼の攻撃を受けるたび、健吾の夢力は徐々に減っていつている。

「はぁ、はぁはぁ、はぁはぁ、クソ！」

健吾は、後方に跳び、鬼と距離を置くと、両手で刀を握り、思いっきり斬撃を放った。

「ハァ！」

鬼は、その場から一步も動かず、片手で金棒を振り衝撃波を放つ。

「ドガアアアアアアアアアア！」

健吾の斬撃は、鬼の衝撃波に負け、衝撃波が健吾を襲つ。

「ぐぁぁぁぁ」

「ぐひひいいいい」

鬼の不気味な笑い声が辺り響きわたった。

ミキに巻物を手渡された夢夢は、さっそく巻物を開いた。

「で、夢夢ちゃん、巻物には、なんて書いてあるの？」

凜が、せかすように、夢夢に聞く。

「ちよつと待つて……え!？」

巻物は、難しい漢字や、古文で書かれていたので、小学五年生の知力しかない夢夢には、全く何が書いてあるか解らなかった。

「何だこれ!？凜、泉、お前達、頭良いだろ、読めるか？」

「こんな、難しい文章、少しは読めるけど、全然理解できないわよ」

「私も……」

学校で頭の良い、凜と優もこの文章を読む事が出来なかった。

「貸して!私が読むわ!」

ミキが巻物に触り言った。

「ミキ、これが読めるの？」

「だてに、巫女さん、やってないわよ、それより急ぎましょう、早くしないと野田君が……」

健吾の夢力は、さっきよりも、ずっと、減っていた

続く

第73話 暗号は、解読しなければならない

健吾の夢力は、さつきよりも、ずっと、減っていた、それでも、健吾は、鬼に必死に食らいついていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

「はっ！」

「スバ！」

健吾は、鬼の胸に一太刀を食らわせるが、鬼は、怯むことなく、反撃してくる。

鬼の金棒が左から、右へと健吾の体を襲おうとするが、健吾は、しゃがみ、健吾の髪を金棒がかすめる、そして健吾は、鬼の体を下から上へと斬り付ける。

「ズババアア！！」

「グギヤヤヤヤ」

「（このまま首まで、斬りつけてやる！）」

そう思った健吾だったが、鬼の金棒が健吾の頭を襲いかかり、健吾は、避ける事が出来ず、刀でガードする。

「バァギ！」

「えっ！？」

健吾の刀が鬼の金棒によって折れ、金棒が健吾の頭を直撃した。

「ぐああ！」

「健吾君！」

優の悲鳴にも似た声が響く。

二十メートル程吹き飛ばされる、健吾だったが、何とか、まだ立ち上がる事が出来た。

「がはっ……くそお」

「やばいぞ、健吾の夢力がどんどん弱まってる、鬼討、巻物には、なんて書いてあるんだ」

「うん、今、読むわ」

そして、ミキが巻物を読み始めた。

「ええと、まず最初に、この巻物には、言霊を使った鬼を封じる為の術の方法が書かれているみたい」

「どうすればいいんだ!？」

拓也がせかす。

「まって、読むわね——6点の星を、地に大きく描き、その中心に、鬼を呼び込み、玉に力を込めながら、言霊を唱えよ——」

「どういう意味なんだこれは？」

「6点の星……きつと六坊星のことで、そして、玉に力を込めながら……つまり、夢玉に夢力を込める、という事だよきつと！」

学校トップクラスの学力を誇る優が、巻物の文章の意味を理解した。

「つまり、こうゆうことだね、優ちゃん、まず地面に、大きな六坊星を描いて、その中心に鬼を呼び込み、夢玉に夢力を込めながら、言霊を唱えれば良いんだね!？」

夢夢が優に確認する。

「うん、多分、そういう意味だと思うよ」

「じゃあ、急ごう、健吾が危ない」

続く

第74話 チャンスは、ピンチ（前書き）

感想など、お待ちしております。

第74話 チャンスは、ピンチ

拓也達は、健吾と鬼が戦っている場所から、少し離れた場所に、急いで、直径二十メートル程の六坊星を地面に掘り始めた。

「拓也！そこ曲がつてるわよ！」

「おお、悪い」

そして、二分程で、六坊星は、描きあがったところで、凜が言った。

「で、誰が、言霊を唱えて、どうやって、鬼をこの六坊星に誘い込む？」

「言霊は、夢玉を持つてる、夢夢ちゃんがするのが良いんじゃないかな、此处に居る他の人は、夢玉を使った事無いし」

優が提案する。

「でも、私、巻物が全く読めないよ」

「それなら、大丈夫、私が先に読むから、夢夢ちゃんは、それを復唱すればいいから」

「ミキさん……」

「じゃあ、後は、どうやって、鬼を此处へ誘い込むかね」

「……………」

少し沈黙する、四人。

「それは、俺が鬼を引きつけて……………」

拓也が言おうとした時、優が名乗りを上げた。

「わたしが…………私が、鬼を誘い込むわ」

「危険すぎる、ここは、やっぱり俺が」

「うっん、いいの拓也君、今この中で一番、夢力が残っているのは、私だから、拓也君達は、夢夢ちゃんの援護をお願い」

「でも、優……」

「それに、私は、健吾君の彼女だしね」

「そう言つと優は、健吾と鬼が戦っているところへ走っていった。
「優!!」」

その頃、健吾はもう、限界だった。

「ドガガアアアン!!」

「ぐあああ!!」

鬼の衝撃波によって、吹き飛ばされる健吾。

そして、吹き飛ばされ、仰向けに倒れる健吾に、鬼がゆっくり歩いていく。

「ドスン、ドスン、ドスン、ドスン」

「ぐへへへ」

「ドガン!!」

その時、鬼の頭にエネルギー弾が、命中する、二十メートル程離れたところから、優のエネルギー弾が命中たのだ。

「コッチよ!バケモノー」

「いつ泉さん……」
体を起こす健吾。

鬼は、優の挑発に乗り、優めがけ走っていく。

「よし、挑発が成功した、後は、このまま鬼を六坊星のところまで、誘い込めば……」

そう、考え走りだした、優だったが、六坊星にたどり着く前に、鬼に追い付かれてしまった。

「（ウソ！？こんなに速いの！？）」

鬼は、優めがけ、金棒を振り下ろす。

「ヒュッ！」

「（ヤバイ、シールドを出してガードを）」

優は自分の体に金棒が当たる前に、四枚のシールドを自分の前に出すが、シールドの四枚中、三枚は、割れ、優は、残った一枚のシールド共に、地面に叩きつけられてしまう。

「バリッ！バリッ！！バリッ！！ドガァァン！！！！」

「きゃあー！」

さらに、鬼は、追い打ちをかけるように、金棒を優、目がけ振り下ろす。

「（もう一度、シールドを……駄目……間にあわない）」

続く

第75 決着は、誰の手で（前書き）

最近、サブタイトルに良いのと思いつきません（泣）

第75 決着は、誰の手で

鬼は、追い打ちをかけるように、金棒を優、目がけ振り下ろす。

「（もう一度、シールドを……駄目……間にあわない）」

「泉さん！」

「!？」

優に金棒が当たる直前、健吾が優を抱きかかえて、身をていして、優を護った。

「ドガアアアン!!」

「ぐああ！」

「健吾君！」

40メートル程吹き飛ばされ、転がる健吾と優。

そして、二人を追い、鬼もすぐやって来た、健吾は、意識を失い、優も意識が飛びかけていた。

「ゆう、けんご、○○か〇、〇〇れて！」

飛びかけていた、優の意識に、凜の声が途切れ、途切れ、聞こえて来る。

「（凜ちゃんの声が聞こえる……）」

鬼は、もうすぐそこまで、迫っている。

鬼は、健吾と優に止めを刺そうと、金棒を頭上に持ち上げる、そして、振り下ろした。

「ヒュッ！」

「優、健吾、そこから離れて……!!」

その時、本当にギリギリ、拓也が、金棒を当たる寸前、二人を抱

えて、その場所から離れた。

「はあ、はあ、はあ、危なかった、雨音ちゃん！『六坊星』から二人を出したぞ」

健吾と優が、鬼に吹き飛ばされ、転がって来た場所は、運良くも、六坊星の中だった。

「分かった、ミキさん、言霊をお願い」

夢夢が夢玉を両手で持ち、ミキに言う。

「うん、分かった——その、悪しき、力よ、我が、言葉により、消え去りたまえ——」

夢夢は、ミキに続いて、言葉を夢玉に夢力を込めながら、復唱する。

「その、悪しき、力よ、我が、言葉により、消え去りたまえ」

夢夢が言葉を発し始めると、六坊星の線から、天に昇るバリアーのような光が放たれ、鬼を六坊星の中に閉じ込めた。

そして、ミキと夢夢が言霊を放つ。

「南無為、観連、滅私、涯時、霸氣、慾、不聯、甦無益、——」

「」

「くぎやややあああー!!」

その言霊を聞いた鬼は、苦しみ出し、バリアーを金棒で殴りつけ、必死に出ようとする。

「キャッ」

「どうしたの、夢夢ちゃん!？」

凜が、心配そうに聞く。

「この術は、とても、大きな、夢力を使うみたいなの、あんなふうに、攻撃され続けたら、私の残っている夢力じゃ持たないよ……」

夢夢は、つらそうな顔で、言った。

「じゃあ……」

「俺達の……」

「私達の……」

「夢力を使ってくれ！」

そう言つと、拓也、凜、優の三人は、夢夢の肩に手をやり、夢力を送ろうとする。

「でも、三人とも、余り夢力がもう、残つて無いでしょ！そんな状態で夢力なんて送つたら……」

「なあに、気にすんなよ、ここでやんなきゃ、死んじまうんだ、だつたらやるだけの事をやろうぜ」

「うん」

「たまには、拓也も良い事言つね！」

「もう、どうなつても、知らないからね」

そして三人は、夢力を限界まで送つた、そして、力を送りすぎた、凜、拓也、優は、その場に倒れ込んだ。

「はあ、はあ、はあ、後は頼むわね、夢夢ちゃん」

「うん！」

そして、ミキと夢夢は、言霊を続けた。

「破異滅、邪貢遜、莉猶、御異、迺是、空示威、羅夢差、驅燐――」

「その、悪しき、力よ、天に滅せ！！」

「ぐざいいいいぎやややああああああ――」

夢夢が言霊を言い終わると同時に、鬼は、うつ伏せに倒れたが、

夢夢も限界まで力を使い、その場に倒れ込んだ。

「やったのか?……」

拓也の小さな声が、静かになった、広場に響いた。

「ドスン!ドスン!」

「うううう」

鬼は、立ちあがってしまった。

「(やっぱり、弱った私達じゃ夢力が足りなかったんだ……)」
今、この広場に立っているのは、鬼とミキだけだった。

「あああ、嫌……」

「ミキ!逃げて!」

凜が叫ぶが、ミキは、恐怖で、その場から、一步も動く事が出来なかった。

「(本当に駄目だ、もう俺達には、夢力を使いすぎて立つことも出来ないのに……これまでか……)」

誰もが、駄目だと思った瞬間、一人が、鬼の前に立ちふさがった、それは、目を覚ました健吾だった。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、本当にこれが最後だ……」

健吾は、右手に夢力を集め、刀を出し、構えた。

10秒、いや、もっとかもしれない、健吾と鬼は、にらみ合い、

鬼が先に仕掛け、健吾に向かって走っていった、そして、健吾も鬼に向かって走っていく。

「うおおおおおおお！」

「ブシュ!!」

「どさ！」

健吾は、その場に倒れ込んだ。

そして鬼は……鬼の体には、首から上が無く、頭が宙を飛んでいた、そして、頭が地面に落下してくる頃、体と頭は、光の粒になって消えていった

続く

第76話 夜空は、綺麗だった（前書き）

一応、これで完結にしておりますが、また続けて、書くこともある
思いますので、ご了承ください。

第76話 夜空は、綺麗だった

鬼は、光の粒になって消えていった。

「うん」

広い和室で、布団に入り、横になっている健吾、その部屋には、優、拓也、凜、夢夢の姿もあった。

「おっ！起きたか、健吾」

布団を持ち上げ、上半身を起こす。

「あつ、みんな、おはよう……アレ！！鬼は、どうなったの？此処はどこ？今は、何時？」

「まあ、落ち付けって、説明してやるから」

「お願いします」

「まず、鬼だが、完全に消えたよ、健吾が首を切り落としたおかげでな、それと此処は、鬼討の神社の一室だ、怪我した、俺達も此処で休ませてもらってたんだ、そしてお前は、まる1日近く眠っていて、今は、6時50分だ」

拓也が部屋にあった、時計を指さす。

「そうだったんですか……僕達、あの鬼に勝ったんですね……」

「ああ」

「「うん」」

「そうよ」

そんな時、勢い良く、障子を開けて、ミキが入って来た。

「あつ！健吾君起きたの、良かった、心配してたよ」

「すみません、何かご迷惑をかけてしまって」

「いいで、いいで、君たちが居なかったら、私は、死んでいただろうし、お祭りも滅茶苦茶になってたから、これくらいのこと、させて貰わないと」

「みんな、夕食の準備が出来たよ、さあ、行こう、それと、健吾君もまだ、起きてすぐだから、今日も泊まっていきなよ」

「そうだな、まだ体も、回復、してないし、お言葉に甘えるか」

「うん、そうしましょう」

「それじゃあ、メシ、食いに行こうぜ！俺、腹減っちゃって拓也が元気良く言う。」

「アンタは、もう少し、遠慮と言うモノを知りなさい！」

凜のチョップが拓也の頭を直撃する。

「痛って！」

「「「あはははああ、ははははははは「「「

笑い声が、神社に響き渡った。

午前、零時を回ったところ、さっきの和室で、みんなが、寝ているが、健吾の布団だけ、空になっていた。

境内を歩いている健吾

「静かだなあ、昨日は、あんなに、賑やかだったのに……」

健吾は、ふと、空を見上げると、そこには、満天の星空があった。

「おおお〜」

「今日は、良く、星が見えるね」

健吾が後ろを振り向くと、そこには、優の姿があった。

「あれ？ 泉さん、何で此処に？」

「何でじゃないよ、起きたら、健吾君の布団が空なんだもん、だから、心配して来てみたの」

「すいません、少し、散歩したいなと、思っ

「もういいよ、何にも、なかった、みたいだし、それより、星を見てたの？」

「はい、キレーだなと、思っ

「でも、僕は、星の名前とか全然分

からないんですけど」

「じゃあ教えてあげるよ……」

優は、健吾の横に並び、右手を握る、健吾も優の左手を優しく握る、優は、人差し指を伸ばし、右手を夜空に上げる。

「あの、強く、光っているのが、夏の大三角形の、ベガ、アルタイル、デネブ」

「へえ、詳しいんだね、泉さんは」

「これは、小学校の時に習ったでしょ」

「そうだったけ？」

「そして、あれが、天の川、織姫は、ベガで、彦星は、アルタイルのことなの」

「そうだったんだ、知らなかったよ」

「……………」

二人以外、誰も居ない、薄暗い境内に、付き合っている二人……

「けっ健吾君……きつ、キス、しよ」

優が顔を真っ赤にして、言つと、それを聞いた健吾も真っ赤になった。

「えっ!？」

「嫌、かな？」

「そんな事、無いですよ」

「じゃあ……………」

優は、目を瞑ったり、健吾は、辺りに誰も居ないか確認して言った。
「いつ行きますよ」

「うん」

「10年後の鬼討祭り」

侍の仏像の隣には、五つの仏像が増えていた。
ある子連れの3人家族の子供が、仏像を指差し言った。
「あの、お人形、パパとママにそっくりだね」

鬼話編
完

第76話 夜空は、綺麗だった（後書き）

いかがだったでしょうか、感想などがありましたら、お願いします。

第77話 女子会は、秘密の話（前書き）

どうもです。今回は、番外編という形で掲載させて貰います。鬼との死闘から約3週間後の、日常？の話です。基本、コメディ。

第77話 女子会は、秘密の話

恥話編

鬼との死闘から、3週間ほど経った、七月中旬の土曜日の午前11時頃、優、凜、夢夢の3人は、喫茶店で女子会をしていた。

「で、聞いてよ、二人とも、拓也たらそれで小学校の時、先生に、叱られたんだよ」

「ははは、桜井君らしいね」

「拓也君は、おもしろいな」

何気ない、会話を、かき氷を食べながら、する3人。

「ところで、優、最近は、健吾と何か進展あった？」

好奇心旺盛に、凜が聞く。

「あつ、私も気になる」

「えっ！……別に何もないよ」

優は、神社の夜の事を思い出し、顔を真っ赤にした。

「（ははぁーん、これは何か進展があったな）」

「ふーん、そうか、そうか」

「何なの、凜ちゃん！」

「別に何でもないよ」

凜が笑いながら、優に言う。

「そう、そう、健吾と言えば、最近、髪が伸びて来たわよね」

「確かに、男の子にしては、長いほうかな」

夢夢が健吾の事を思い浮かべ言った。

「それが、どうかしたの凜ちゃん？」

「いやあゝ健吾って、料理や家事も出来るし、性格も、ガツガツしたタイプじゃ無いじゃん」

「うんうん」

「でさ、顔も、男顔じゃ無くて、女顔て言うか、中性的な顔立ちしてるし、それで、髪が長くなった、健吾をこないだ見てたら、女の子みたいだな〜と思って」

「それ、分かるよ、凜ちゃん！ 確かに健吾君、女の子ばい、もんね」

夢夢が凜の考えに同意をする。

「そうかな〜」

優は、普段の健吾を思い出してみた。

「（……そうかもしれない、今度、じっくり見てみよう）」

そんな、たわいもない、女子の会話をしていると、時間は、12時を回る頃、喫茶店を出る3人。

「この後、どうする？ 何か、買い物でも、しに行く？」

凜が二人に提案する。

「あつ、ごめん、凜ちゃん、私この後、バイ——」

優が何かを言いかけた。

「えっ、何、バイト？」

凜が優に確認する。

「うっん、違うの、ちょっと用事があつて、ごめんまたね、二人とも」

そう言うつと優は、足早にその場から、去っていく。

その場に残された、二人。

「怪しいね、夢夢ちゃん」

「怪しいね、凜ちゃん」

「それに、優ちゃん先週の週末も、どこかに行っているんだよね、凜ちゃん知らない？」

「私は、分からないわ、それに今、『バイト』って言いかけたよね」

「うん、言いかけた」

「夢夢ちゃん、私、思うの、親友として、優がどんなバイトをやっているか、知る権利があると！」

「私も、そう、思うわ」

二人は、右手を握り合った。

「ガシ！」

「後を追いかけるわよ！」

「OK！」

続く

第78話 駆け込み乗車は、危険（前書き）

優は、一体、何処へ向かっているのか！？

第78話 駆け込み乗車は、危険

凜と夢夢は、優に気づかれないように後を追う事にした。

尾行を続けて、10分程歩くと、優は、この町の駅にさしかかっていた。

「どうやら、電車に乗るみたいですよ、凜探偵」

「そうみたいね、ムムトン君」

優が切符を買い、改札を抜けると、凜と夢夢も、切符を買い、改札に向かう。

「えーと、高校生1枚と、小学生1枚ね」

「はい、夢夢ちゃん」

凜が夢夢に切符を渡し、改札に向かう、ホームには、緑と白の塗装をした、電車が止まっている

「間もなく〇〇線発車いたします」

「凜ちゃん、あの車両に優ちゃんが乗ったよ！」

夢夢が前から4番目の車両を指さす。

「このままじゃ、間にあわないね」

「ひよいー！」

凜は、夢夢を抱きかかえて、全速力で、電車に向かった、そして、ドアが閉まる間一髪のところ、前から、3番目の車両に乗る事が出来た」

「はあ、はあ、はあ、はあ、危ないところだった」

「ガタン、ゴトン」

電車が走り出すと、ある『車内アナウンス』が聞こえて来た。

「駆け込み、乗車は大変危険です、絶対になさらないよう、お願いします」

乗客が凜と夢夢の方を見る。

「ほーら、夢夢ちゃん、あそこが私達の通ってる高校だよ」
外を指さし、誤魔化す、凜。

「凜ちゃん……たくましいね」

「みんなに、言っちゃ駄目だよ、特に拓也には、バカにされるから」

「大丈夫、言わないよ」

それから、2駅を過ぎたところで、優が降りたので、また、尾行を続ける二人、駅を降りるとその駅の周辺は、いろんなお店で賑わって、人も沢山居た。

「うわーこの辺は、いっぱいお店があるんだね」

夢夢が辺りを見渡し言う。

「夢夢ちゃん、此处に来るの初めて？」

「うん」

「この辺は、都市計画地域だからね、いろんなお店や、レジャー施設も在るんだよ」

「へえー私達が住んでいる、町の近くこんな所が在ったんだ〜知らなかったな〜」

「あつ、凜ちゃん、優ちゃんあそこに居るよ!」

駅前の大通りを歩いている、優を見つけ、指をさす。

「よし!後を追うわよ」

気付かれないように、後を付ける凜と夢夢、そして、優は、大通りのあるお店に入っていた。

「凜ちゃん！優ちゃんが、あそこのお店に入っていったよ」

「でかした！ここが優の、バイト先か！？」

凜と夢夢は、お店の前に立ち、店の看板を見た。

「「こっこれは！？」」

続く

第79話 追うものは、追われていた

凜と夢夢は、お店の前に立ち、店の看板を見た。

「「こっこれは!?!」」

『メイド喫茶、莓』そう、看板には書かれていた。
それを見て、目が点になる二人。

「「……………」」

「まさかね、優が此処でバイトしてるなんて……」
苦笑いをしながら、言う凜。

「で、でも、確かに、このお店に入ってたよ」

「あつ分かった、きっと、接客じゃなくて、ホールで働いてるんだ
よ」

凜がそう、ひらめく。

「あつ、そうか、そうだよね」

「「はははははは」」

「取りあえず、入ってみようか、夢夢ちゃん」

「そうだね、確かめてみようか」

そして凜は、お店のドアに手をかけ中に入って行った。

「カラン、カラン!」

凜達が入ると、すぐ、ミニスカのメイド服を着た、可愛い、
オドオドした、女の子がやって来た。

「いつ、いらつしやいませ、ご、御主人様、今日は、いっぱい、御
奉仕させて、いただきま——」

メイドの思考が停止した

「優……」

「優ちゃん……」

「（何で、凜ちゃんと、夢夢ちゃんここに！？）」

「えーと、御主人様、今日のオススメは、メイドさんと一緒にお話しをするコースがあるんですが、いかがでしょうか」

思考を回復させた、優が二人に言った。

「じゃあ、それでお願ひするわ」

「ありがとうございます、それでは、席に、御案内いたします」

優は、顔は、笑っていたが、心臓は、バクバクで冷や汗がびっしりだった。

席に着き、取りあえず、凜は、カフェオレ、夢夢は、オレンジジュースを頼み、優と向かい合って座っている。

優達が座っているのは、入り口を入ってすぐの場所で、優は、入口を背にして座っていた。

そして、凜が、机に手を着き立ち上がり、話を切り出した。

「優、私は、親友として、ショックよ……私達に黙ってこんなバイトするなんて」

「凜ちゃん……」

夢夢が心配そうに呟く。

「どうして、もっと早く言ってくれなかったのよ、こんな、こんな……可愛い格好してるのに」

「「えっ？」」

「がばっ」

凜は、テーブルの向こうに座っている優に抱きついた。
「こんな、可愛い優、もっと早く私に見せなさいよ〜」

「凜ちゃん、ちょっと、他の御主人様も見てるから！」

「凜ちゃん！ストープー！」

夢夢が凜を引っ張り、席に戻した。

「あつ、ごめん、ごめん、ちょっと興奮しちゃって、いや〜本当に良く似合ってるわよ、優、今すぐ、健吾に見せたいくらいよ」

今まで、顔をずっと赤くしていた、優だったが、さらに赤くして、凜と夢夢に言う。

「お願い二人とも、この事は、恥ずかしいから、他の人には、特に健吾君には、言わないで」

「分かったわよ、優がそこまで言うなら黙っててあげるよ、ねえ、夢夢ちゃん？」

「うん！」

「二人ともありがとう」

そんな会話をしていると、この、メイド喫茶にある二人組の男がやって来た。

「カラン、カラン！」

「いらっしやいませ、御主人様、今日は、いっぱい、御奉仕させていただきます」

その二人を接客するメイド。

「いや、ちょっと、友達を探してて」

「待ち合わせですか？」

メイドさんに顔を赤くしている二人。

「いや、そう言うわけじゃないんだけど」

背の高い方の男が、凜達を見つけた。

「おっ、いたいた、あそこの席、良いですか？ 友達なんで」

「はい、かしこまりました」

その二人組は、健吾と拓也だった。

「おーい、凜、雨音ちゃん、なんでこんなところにいるんだ？」

健吾と拓也が凜達の座っている席に歩いて来るが、まだ優は、入り口を背にしていたおかげで二人には、気付いていなかった。

「ちょっと、なんで拓也と、健吾が此处に居るのよ」

凜が夢夢に小さな声で尋ねる。

「分からないわよ、優ちゃん知ってる？」

その時、優は、思考、活動ともに、停止していた。

つづく

第80話 賑やかなテーブルは、良いテーブル

「二人とも、こんな所で、何しているんだ？」

拓也が凜達の席に近づきながら、聞く。

「はははははは」

内緒にして欲しいと言われてすぐこの二人が現れるなんて、凜と夢夢は、笑うしかなかった。

そして健吾と拓也がそのテーブルに着くと、そこに居る可愛らしい、メイドは、自分達の良く知っている人物だと気付いた。

「泉さん！？」

「泉！」

優は、動かなかった、動けなかった、まるでただの屍のような無反応が、数秒続いた。

「……………」

「もしもし、優ちゃん、おきて」

夢夢が人差し指で優のほっぺたを突つつく。

「はあっ！！」

優、思考回復。

「私のバカー！！」

テーブルの上に腕を乗せ、その上に顔を置き、顔を隠す優。

「ちょっと、優、落ち着いて、ホラ、健吾も何か言っただけ」

健吾に降る凜

「えっ！ えゝと、泉さんとっても良く似あってますよ」

状況は、悪化した。

「そういう問題じゃないんだよゝゝ」

「5分後」

やっと落ち着いた、優。

拓也と健吾は、隣同士で座り、女の子3人と向かい合って、席に着いた。

「優、落ち着いた？」

「うん、ごめん、みんな、取り乱して」

「それにしても、泉がこんな所でバイトするなんて意外だな」
拓也が優に聞いてみる。

「違うんだよ、みんな、これには、訳があつて……」

「……訳？」「……」

「うん、あれは、今から2週間前の土曜日――」

――2週間前の土曜日――

優は、このメイド喫茶の近くに買い物に来ていた、そして、その帰り道、何気なく、ガラス越しにメイド喫茶の中を見ていた。

「（わあ……メイド喫茶だ、こんなのも、この町にあるんだ……あの制服、ちよつと可愛いな）」

メイド喫茶の中を眺める優に、20代中旬位の女性が、話しかけて来た。

「あなた、メイドさんに興味があるの？」

「えっ！ 私ですか？」

「いや、別にそんなことは……」

「またまた遠慮しちゃって、だって……」
女性が優の立っている近くに張ってあったポスターを指さす。

ポスター

「スタッフ、大募集！！可愛いメイドさんをお待ちしております」

「あつ！？」

「そんな訳、だから遠慮しないでいいのよ、私このオーナー（店長）だから、あなたみたいな、可愛い娘探してたのよね」

そう言つと、女性は、優の手を引つ張つて、メイド喫茶の中に連れて行つた

「あ、だから、あの私は……」

——現在——

「それで、オーナーに気にいられちゃつて、そのまま採用に……」

「だから、みんなには、恥ずかしいから、黙っておこうと思つてたのに、一気にばれる、なんて」

「なるほど、理由は、分かつたわ、でも何で、ここに、拓也と健吾が居るのよ！」

凜が拓也の顔を指さす。

「あのな、凜、俺と健吾この近くのCDショップに買い物に行こうとしていたんだ、そして、電車に乗つて、電車が発車するのを待つ

ていたんだが、そこに、女の子を抱えて、全速力で電車に向かってくる誰かさんを見かけてな、電車の中じゃ、恥ずかしいから、他人のフリをして、降りたら話しかけようと思ってたら、いつの間にか見失って、そしてこの店に入るのを見たから、この店に入ってきたんだよ」

拓也が自分達の経緯を説明する。

「説明が長いよ、1行でまとめなさいよ！」

「分かった、駆け込み乗車はするな」

「バッシ！」

凜が拓也の頭を叩く音が、店内に響く。

「痛ってーな、何すんだよ！」

頭を押ええる拓也。

「うるさいわね」

「元気が良わね、年少少女達！」

健吾達のテーブルの横に、ある女性が立っていた。

「あつ、オーナー！」

「お勤めごころう様！ 優ちゃん、こちらの方達は、優ちゃんの知り合い？」

オーナーが優に聞く。

「はい、そうです」

「ふーん、じゃあ、この子かな？、優ちゃんの彼氏君は」

そう言つとオーナーは、健吾に近づき、健吾の顎に手をやる。

「なかなか可愛い顔してるわね」

「はい！？」

健吾は、顔を赤くする

「ナルホドね、確かに優ちゃんと相性はよさそうだね、そして、そ
ちの元気の良い二人が、凜ちゃんと拓也君だね？」

「はい、そうですけど」

凜が答える。

次にオーナーは、夢夢の方を見る。

「うんでもって、コッチのちっちゃくて可愛いのが、夢夢ちゃんか
な？」

「うん！」

「何で、俺達の名前と顔が分かったんですか」

拓也が、驚いた顔でオーナーに聞く。

「だって、優ちゃん、私と話す時、君達の話ばかりするんだよ、そ
りゃあ、今まで聞いた話で、誰だか見当は着くさ」

「へえーそれにしても、凄いですね、一度も会った事がないのに、
全員当てちゃうなんて、それで、どんな話を優としたんですか？」

凜がオーナーに聞いてみる。

「そうだねえ、例えば彼氏の健吾君が……」

「ちよつと！？オーナー」

優が、手をバタつかせて慌てる。

「はははは、冗談よ優ちゃん、内緒にしとくから、それでは、みん
な、今日は、メイド喫茶をどうぞ楽しんで言ってね！」

そう言つと、オーナーは、店の奥に入っつていった。

「なかなか、個性的な、オーナーだったな」

拓也がみんなに言う。

「そうね、でも、悪い人じゃ無いみたいじゃない、でしょ、優？」

「うん、良い人だよ、たまにイタズラとかしてくるけど」

優の顔を見ていた、夢夢が優に聞く。

「ねえ、優ちゃんは、このバイト嫌なの？」

「えっ!？」

「だって、今のオーナーの話聞くと、嫌々やってる訳じゃなさそうだし」

少し考え込む優。

「最初は、恥ずかしくって、失敗も多くて、嫌だと思ってたけど、お客さんと、笑顔で接客するのも、楽しいかなって思ってたんだ……」

「じゃあ続けたら、泉さん、僕も、もっと、その……可愛い泉さんの事見たいし……」

健吾がテレながら言う。

「何だ、健吾、お前、メイド萌えだったのか？」

拓也が健吾の肩を叩きながら、言う。

「ちっ違うよ、そんなんじゃないくて」

「優、見なよ、健吾の顔、真っ赤だよ!」

凜も優の肩を揺らしながら言う。

「違うよ、凜ちゃん、優ちゃんも顔が真っ赤何だよ」

夢夢が優の顔みて言った。

「……はははははは」

店内で一番、賑やかな、テーブルだった

う
う
く

第81話 女子は、強し（前書き）

健吾、ヘタレだなお前は。

第81話 女子は、強し

「ほらほら、健吾おとなしくしなさい」

凜の恐ろしい声。

「そうだよ、健吾君、もう逃げ場は、無いよ」

夢夢の無邪気な声

「健吾君、ごめん私のせいで……でも、大丈夫、健吾君なら」

優の楽しそうな声。

健吾は、三人に詰め寄られていた。

「うつつ、嫌です、僕には、無理です、ああああ、嫌だー」

健吾が置かれている状況を説明するには、少し時間を戻してみる必要があるそうだ。

――1日前の事――

優がメイド喫茶に働いていると知ってから、次の日の金曜日の夜、健吾がベットで本を読んでいると、健吾の携帯が鳴りだした。

「プルルル、プルルル」

「誰からだろう？ あっ相川さんだ！」

凜からかかって来た電話携帯を取る健吾。

「はい、もしもし」

「あっ、健吾、明日の土曜日開いてる？」

「えっ明日ですか、え〜と、はい、空いてます」

「そう、良かった、じゃあ、明日、朝八時半に、駅前に集合ね」

「えっ？ 何ですか？」

「優の働いている、メイド喫茶に行くのよ、いつものメンバー五人で行くから遅刻しちゃう駄目よ、じゃあそゆう事で」

「あつ、ちよつと相川さん！」

「ツーツーツー」

「切れちゃった……」

「（確か、あのメイド喫茶が開くのは、十時からだったよな、なんでそんな早く集まるんだろう？）」

携帯を持ちながら、疑問に持った、健吾であつた。

その頃、優のマンションでは、優、夢夢、凜の3人が集まっていた。
「健吾、明日大丈夫だって」

「やったー明日が楽しみだね、優ちゃん！」

「とっん！」

夢夢が、優の背中に跳びつきながら言った。

「うん、でも、健吾君大丈夫かな〜」

「大丈夫、大丈夫、私に任せて！ それに、優もなんだかんだで、楽しみなんですよ？」

凜が自分の胸を叩く。

「うん……」

——次の日、土曜日——

健吾、拓也、優、凜、夢夢の5人は、駅に集まり、電車に乗り、メイド喫茶へと向かった。

電車の中で、拓也が凜に聞く。

「なあゝ凜、どうして、こんなに早く集まるんだよ、あの店、開店が10時からだろ？」

「僕も、そう思ったんですけど、何ですか？」

「着いたら、教えるから、楽しみにしてて、二人とも！」

凜が笑顔で二人に言う。

その笑顔を見た拓也が、健吾の耳元で静かに呟いた。

「健吾、やばいぞ」

「えっ、何が？」

「俺の経験上、凜のあの笑顔は良からぬ事を企んでる顔だ……」

「まさか……」

健吾も、もう一度、凜の顔を見る。

「ぞく！」

「（ヤバイかもしれない……）」

それから電車は、駅に着き、5人は、少し歩き、『メイド喫茶』に向かった。

「っ、着いてしまった、『メイド喫茶』、さっきの拓也君の話を聞いたら、メイドが冥土に思えてくる」

「カラン、カラン！」

「おはようございます、マスター」

優を先頭に店内に入っていく5人、すると、すぐそこには、マス

ターが立っていた。

「今日は、よろしく願います!」

凜と夢夢が、元気よく言う。

「えっ! よろしく願いますって!？」

健吾が戸惑った顔で口にした。

「アレ、聞いて無かったの? 実はこの店で、夏力ゼが流行っちゃって、どうしても、後、メイド3人、ホール1人、必要になっちゃって、それを優ちゃんに相談したら、君達が今日臨時のバイトをしてくれるって話だったんだけど」

「と言う訳で、拓也は、ホールをよろしく、メイドは、『私達』で何とかするわ」

そう言つと、凜は、左腕で、夢夢を、右腕で健吾の首を抱え込んだ。

「えっ……………」

思考が停止する健吾、その姿を拓也は、遠い目で見ていた。

「あっそう言う意味かアイツ（凜）のあの笑顔は、健吾、御愁傷様だ……………」

「あっスイマセン、金魚にエサをやり忘れたので帰ります」

健吾がその場から、立ち去ろうとすると、凜が健吾の後襟を掴んで止める。

「何、古い手、使おうとしてんのよ」

久々に見せる、凜の物凄い怖い笑顔が、健吾に炸裂する。

「いや、でも、出目金のデメちゃんが心配で……………」

「健吾、アンタ、金魚なんか、飼ってないでしょ!」

「いつ、一応、聞きますけど、僕に何をなさるおつもりで？」

健吾が恐る恐る、凜に聞く。

「別に大した事じゃ、無いわよ、可愛い服着て、接客するだけだから！」

健吾は、凜の覇気に押され後ずされすると、いつの間にか、壁際に追い込まれていた。

「ちよつと待って、下さい、男が、メイドをやるなんて、駄目ですよ、オーナーさん！」

「ああ、その事なら気にしないで、健吾君可愛いから、きっと似合うわ！」

オーナーは、健吾に親指を立て見せる。

「たっ拓也君、代って下さい！」

「健吾、それは無理な注文だ」

「そうよ、拓也がメイド服着ても、誰得にもならないわよ、それにホラ！ 健吾のメイド服ならちゃんと用意してあるし！」

凜がフリフリのミニスカメイド服を健吾に見せる。

「何で、僕の服のサイズ知ってるですかー！？」

健吾の叫びが店内に響く。

「そりゃ知ってるわよ、優に聞けば、健吾のアソコのサイズだって分かるわよ！」

「ああーそうか、体が入れ替わった時に服のサイズを見ていたのか……」

そして冒頭に至る。

「ほらほら、健吾おとなしくしなさい」
凜の恐ろしい声。

「そうだよ、健吾君、もう逃げ場は、無いよ」
夢夢の無邪気な声

「健吾君、ごめん私のせいで……でも、大丈夫、健吾君なら」
優の楽しそうな声。

健吾は、三人に詰め寄られていた。

「うつつ、嫌です、僕には、無理です、ああああ、嫌だ——」

つづく

第82話 メイドは、『けいこちゃん』（前書き）

感想など、お待ちしております。

第82話　メイドは、『けいこちゃん』

「うつつ、嫌です、僕には、無理です、ああああ、嫌だーーーー」
健吾の悲鳴が、店内に響いた2分後――

「おおつ、これは、想像以上に、似あっているね!」

健吾は、凜達に無理やり、メイド服に着替えさせられてしまった。
「ぼつ、僕は嫌ですよ、こんな格好で接客するなんて!　絶対、嫌ですからね!!」

涙目になりながら、言う健吾。

「ふゝん、そんな事言っちゃうんだ、けんこ」
凜が不気味な笑顔で、健吾に迫る。

「分かったわ、健吾が、そこまで嫌がるなら、選択権をあげるわ」

「選択権?」

首を傾げる健吾。

「そう、メイドをするのか、その格好のまま帰るか!　どっちを選んでも、いいわよ」

凜が健吾から、はぎ取った、服を手に持ち、チラつかせ、健吾に見せる。

「なっ!?!、そんな」

「（鬼だ、コイツは、人の皮を被った鬼だ……あの時の鬼が可愛く見えるぜ）」

拓也は、そう思った。

健吾に選択権など、在りはしなかった。

——メイド喫茶、苺、オープン直前——

優、凜、夢夢、『健吾』、の4人は、メイド服に身を包み、接客を、拓也は、一人ホールで働く。

「やっぱり無理ですよ、絶対バれますって」

「大丈夫、大丈夫、絶対バレないから」

夢夢が健吾を慰める？

「うん、健吾君、大丈夫！ 自信持つて」

優は、そんな言葉をかける。

「（自信持つてって、言われても、男としての自信を無くしちゃうよ……）」

健吾は、ウィッグを着けられ、オーナーに軽く化粧もされていて、周りからは、どっからどう見ても、女の子だった。

「接客の方法は、さっき言った通りだから、後は、みんな楽しくやってね！」

そう言つと、オーナーは店の奥に入つて行つた。

「カラン、カラン！」

オープンと同時に数人のお客が入つて来た、そして、優、凜、夢の3人は、言われた通りに接客し、ついに、健吾の順番が回つて来て、健吾は、一人の20歳位の男性を接客する事になった。

「ドクン！ ドクン！ ドクン！」

緊張と恥ずかしさで、健吾の心臓が高鳴る。

「いつ、いらつしゃいませ、ご、御主人様、今日は、いっぱい、御奉仕させて、いただきます！ 席に、ご案内いたします。」

真っ赤な顔で席に案内し、メニュー表を渡す健吾。

「きつ、今日は、何になさいますか、御主人さま……」

「そうだな〜じゃあ、オムライスと、紅茶を下さい」

「かつ、かしこまりました。」

「じー」

男性が健吾の顔を見つめる。

「君――」

「はい！？（まさか、ばれた）」

「君、可愛いね、名前は、『けいこちゃん』って言うの？」

男が、健吾の胸に張ってある、ネームプレートを見て聞く。

――開店前――

「あつ、健吾君ちょっと」

オーナーが健吾を呼び、胸にネームプレートを付けた。

「健吾って名前じゃアレだから、今日、あなたは『けいこちゃん』
ね」

「え〜」

「さあ、つべこべ、言わずに行くわよ『けいこ』！」

凜が健吾を引っ張っていく。

「頑張ろう、『けいこちゃん』」

「ファイター『けいこちゃん』」

優と夢夢も、ふざけ半分に、『けいこ』と呼ぶ。

「（ああ〜嫌だ〜）」

——そして現在——

「ええ、まあ、そうです」

「ふうん、いい名前だね、じゃあお仕事頑張つて」

「あつはい、ありがとうございます、えくと、オムライスと紅茶です
ね、すぐお持ちいたします」

それから、健吾達は、何事もなく？　メイドさんが続け、今は、
夕方の5時頃になっていた。

「ああ、けいこちゃん」

「はい！」

健吾がオーナーに呼ばれる。

「ちよつと、悪いけど、お店の入り口の辺りの電気を着けてきて、
貰えないかしら？」

「あつ、はい、分かりました」

健吾が店の外に出て、入り口の電気を付けていると、向かいの大
通りから、悲鳴が聞こえて来た。

「きやややや——！！！」

続く

第83話 メイドは、侍になった（前書き）

一応、これで、完結にしておりますが、ネタが固まったら、次の編を書くと思うので、よろしく願います。

第83話 メイドは、侍になった

健吾が、向かいの大通りを見ると、メイド喫茶と、道路を挟んで向かいにある、銀行から黒いマスクをした、三人組みの男が出て来た。
「助けてー！」

1人の男は、女性、どうやら銀行員の女性を人質に取り、体を掴み、首元にナイフを突き付けている。

「静かにしやがれ!!」

他の二人には、もう一人の手にもナイフが握られその男には、金を詰め込んだらしいバック肩にかけられていて、あと一人には、拳銃が握られ、それで辺りを威嚇している。

「銀行強盗だ！」

健吾は、その状況をすぐ理解した。

「早く、車まで行くぞ！」

どうやら、近くの道路に止めてある、白い車が奴らの車みたいだ。
「この女は、どうする！」

女性にナイフを突き付けている男が、拳銃を持った男に聞く、どうやらコイツがリーダーらしい。

「ソイツは、人質として、連れていく」

「いやー離してー！」

「おい！暴れるな、殺すぞ」

ナイフをさらに近づける男。

「ひっ！」

「夢放解」

「ひゅっ！」

「キン！」

「痛って」

男が突きつけていたナイフに、何が当たり、ナイフが宙を舞う、その瞬間、大通りを物凄いスピードで走って道路を横断してきた健吾が男達の目の前に現れる。

「「「えっ、メイド！？」「」」

「ヒュッ！」

「ぐぁー！！」

健吾は、女性を掴んでいた、男を蹴り飛ばし、女性を抱え男達から、十メートル程、距離をとる。

「コロコロ……」

その場には、石が転がっていた、どうやらナイフを弾いたのは、この石らしい。

「メイドさん？」

健吾は、その場に女性を降ろした。

「大丈夫ですか？ 立ってますか？」

「はい、大丈夫です」

「じゃあ、早く銀行の中に入って下さい、あの三人は、僕が何とかしますのです」

健吾が、優しく女性に言う。

「でっ、でも……」

「いいから、早く！」

「わっ、分かりました、ありがとうございます」
「ウィーン」

そして女性は、銀行の中に入っていった。

「アニキどうします？」

バックを持った男が、拳銃を持った男に聞く。

「しかたねえ、アイツを人質にする捕まえろ」

そして、健吾が蹴り飛ばした、もう一人の男と、二人でナイフを構え、健吾に向かってきた。

「（あれ、あの男立ち上がったのか、どうも手加減が難しいな、じやあこれくらいかな？）」

「ドッカ！ ドガ！」

健吾に向かって来た二人だったが、キックとパンチを食らい、その場に気絶をする。

「ふう、こんなもんかな」

「おい！ おじょうちゃん、あんまり、大人を怒らすなよ」

「チャカ！」

残った男が、健吾に拳銃を構える。

「死ね！」

「バン！ バン！」

男が健吾に向かって弾を二発撃ってきた。

「（くっ、ここには、人がたくさん居る、下手に避けると、流れ玉に当たる人が居るかもしれない、仕方ない）」

健吾は、手に夢力を集めて、刀を出した。

「カン！ カン！」

健吾の近くの地面には、穴が二つ開いていた、周りに弾が行かないように、健吾は、刀で、弾を地面に弾いたのだ。

「は！？ この距離で俺が外す訳ねえ、それにお前何処からその刀を出しやがった」

「さあね」

「タツ！」

そして健吾は、男に向かって走って行く。

「くそ！」

「バン！ バン！ バン！」

「カン！ カン！ カン！」

健吾は、男がさらに、撃って来た、三発の弾をさつきと同様に地面に弾き、男の懷まで行き、刀で斬りつけた。

「ドカ！」

「ぐあ！」

吹き飛び気絶する男

「峰打ちです！」

銀行強盗三人を完全にやつけた、健吾。

「ふう〜 これで、一見落ちや——」

健吾の周りに大勢の人達が集まって来て健吾囲んだ。

「君、凄いね、一体、今どうやったの!？」

「君、名前は、そのメイド喫茶の子!？」

「えっ、ちよっと」

困惑する健吾

「その刀は、どうしたの？ 君、高校生!？」

「パヤ！ パシャ！ パヤ！ パシャ！ パヤ！ パシャ！ パヤ！
！ パシャ！」

「ちよっと、撮らないで！」

携帯のカメラで健吾を撮る周りの人達。

「ピーポー！ ピーポー！ ピーポー！ ピーポー！」
パトカーのサイレンが聞こえて来た。

「まずい！ スイマセン、ちよっと通して下さい!！」

健吾がそう言うが、野次馬達は、健吾を通そうとしなかった。

「仕方ない……ハッ！」

健吾は、大きくジャンプし、野次馬達の上を通り抜けたが、その時スカートが。

「あっ！」

「パヤ！ パシャ！ パヤ！ パシャ！ パヤ！ パシャ！ パヤ！
パシャ！」

「縞パンだ！」

「水色だ！」

「たっ！」

着地する健吾。

「もう嫌だー！」

健吾は、その場から、全速力で消えて行った。

――次の月曜日――

健吾達の学校、いや、町では、ある話題に集中していた。

健吾が朝学校に登校し、教室に入ると、そこでも、その話題ばかりだった。

男子が教室の後ろで男子五人が話している。

「お前も知ってるだろ、あの話」

「ああ、あれだろ、『謎のメイド侍』だろ、銀行強盗を1人でやつけたって言う」

「写真見るか？」

「えっ、お前、持ってるの!？」

「ああ、その現場に俺の友達が居てな、送ってもらったんだ」

1人の男子が携帯をみんなに見せる。

「おおっ可愛いじゃん」

「だろ！ この銀行の近くに在るメイド喫茶の子だつて噂が流れたんだけど、そんな子は、いなかったらしいんだよ、まさに、謎のメイド侍！」

1人の男子がある事言う。

「なんか、コレ誰かに似てねえ？」

「あつ俺も思つた」

「ギクッ」

その話を自分の席で聞いていた、健吾の背筋が凍る。

「健吾ーおはよう！」

そんな時、凜、優、拓也の三人が教室に入つて来て、すぐに、健吾の携帯が鳴つた。

「えっ、相川さんからメールだ、何で、すぐそこに居るのに？」

そのメールには、画像が付いていた、そして、そこには、あの時の健吾のパンチラ画像が。

「ああああああ、もう、いやだー！ー！ー！」

どうやら、この話題が、無くなるには、だいぶ時間がかかりそうだ。

恥話編

完

第83話 メイドは、侍になった（後書き）

さてさて、次は、どんな話しを書いてみようか。感想など、お待ち
しております

第84話 天叢雲剣の別名は、草薙剣（前書き）

恐らく、これが、最後の編になります。

第84話 天叢雲剣の別名は、草薙剣

蛇話編

「いただきます」

健吾がメイドのバイトをした、次の週の火曜日の朝、健吾は、朝食を取りながらテレビを見ていた。

「次のニュースです、昨晚、何者かが、伊勢の神宮から八咫鏡、熱田神宮から、天叢雲剣、あまのむらこものしるぎ皇居から、八咫瓊勾玉、やしろにのまがたまの我が国の三種の神器が、一晩のうちに盗まれ、そのすべての犯行現場には、「もうじき、世界は、最期の審判を迎える」と書かれた紙が、置かれており、警察は、複数犯の計画的犯行と見て、全力を挙げ、捜査する方針です」

「（そんなものを盗んで、どうするつもり何だろう、有名すぎて、売る事は、出来ないだろうし）」

健吾は、そのニュースを見て、思った。

「次のニュースです、ただいま、ネットを騒がせている、『謎のメイド侍』について——」

「ぶぶぶうー！」

健吾の口からご飯が少し飛び出る。

「この、『謎のメイド侍』と言われる少女は、先週の土曜日に、〇〇市、〇〇〇町で、起こった、銀行強盗事件で、ナイフや拳銃を持った、犯人から、人質を助け出し、犯人達を気絶させ、犯人逮捕に大きく貢献した少女です。現場に居た、人達の話によると、赤いビー玉のようなモノを持っていた、急に日本刀が現れた、なぜか、

メイド服を着ていた、などと、謎が多いため、ネットでは、『謎のメイド侍』として反響を呼んでいます」

「ちょっと、まずいな〜」

その日の昼休み、健吾、拓也、優、凜の四人は、いつものように、机をくつけて、お弁当を広げていた。

「はあ〜」

健吾が大きなため息をつく。

「どうしたんだ、健吾、そんな、デカイ、ため息なんてついて」
健吾の隣で、お弁当をほおばっていた、拓也が聞く。

「みんな、朝のニュース見ました？」

「ああ〜見たわよ、アレは、凄かったわよね、一晩で三種の神器が三つとも、盗まれちゃうなんて、全く、日本は、セキュリティが甘いわ！」

「相川さん、そっちじゃ無いですよ！」

「はいはい、分かってるわよ、メイド侍についてでしょ」

「そうですね、まさか、全国放送されるなんて……もしバレたら、僕はもうこの国に居れない……」

「そんな、オーバーだよ、健吾君、それに、テレビに自分が映ることなんて、滅多にないよ」

優が健吾を励まそうとする。

「あんな姿で映っても……」

「あつ！ 思い出した、その事なんだけど、みんなに見てもらいモノがあるのよ」

そう言つと、凜は、ポケットから、携帯を取り出し、某掲示板サイトをみんなに見せた。

「これを見て！」

「「こつ、これは!?!」」

つづく

第85話 謎は、343（前書き）

感想など、お待ちしております。

第85話 謎は、343

「……こつ、これは!?!」

凜の携帯を覗きこむ、三人。

スレ名、謎のメイド侍について。

1 以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします
謎のメイド侍キタ (。。(！！

2 以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします
謎のメイド侍は、俺の嫁(ー、4ー)キリッ

5 以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします
強盗ヨワスwwwww

7 以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします
俺も斬られたいm9(。4)ビシッ!!

「どたあぁ!」

それを見て、ズッコケル3人。

「何だよ凜、コレ、こんなモノを見せたかったのか!?

「バシ!!」

「痛って!」

凜が拓也の頭を叩いた。

「違うわよ、もっと下の、レスよ」

そう言つと、凜は、下に携帯をスクロールする。

34……57……123……265……

「どこまで、コメントされてんだよ」

拓也が頭を押さえながら、言う。

「あつた！、ここよ」

凜がスクロールを止める。

3 4 3 以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

この、メイド侍をある宗教団体が探しているらしい。

3 4 5 以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

3 4 3 > > > (。;。D) (。D ; (。D ;)

ナ、ナンダッテー！！

3 4 7 以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

勧誘でもするのか？

3 4 9 以下、名無しにかわりましてVIPがお送りします

すでに、俺らは、この娘の神者。

「宗教団体が探してる？」

健吾が、そのコメントを見て、言う。

「そう、こないだの日曜日、優、言ってたわよね、メイド喫茶に、黒服を着た男達が健吾の事、つまりメイド侍を探しに来たって」

「うん、健吾君の女そ——じゃなくて、メイド姿の写真を持って店に、この娘は、居ないかって、二人組の男の人が、オーナーに聞きに来てたよ、なんか怖そうな人達だったよ」

「オーナーは、どうしたんだ？」

拓也が優に聞く。

「上手く、誤魔化したって言ってた」

「その事を優から聞いて、昨日、調べてたのよ、そしたら、これが見つかった訳」

「宗教団体が、健吾のこと探す必要があるのか？」
拓也が凜に聞く。

「それは、私にも、分からないわ、このコメントが本当かどうかも分からないし」

「また、謎が、生まれたな、とりあえず健吾は、気をつけろよ、そういう団体には、悪い団体もあるらしいから」

「うん、分かった」

それ以上の進展は、無く、この日の昼休みは、終わった。

そして、午後の授業、5時間目、世界史の授業、健吾は、昼休みに聞いた、宗教団体の事について、考えていた。

「（宗教団体か……今度、少し調べて見ようかな）」
そんな事を考えながら、健吾は、窓の外のぼんやりと、眺めていた。

「のだ——野田！」

「はい!？」

先生が健吾の名前を呼んでいた。

「何を、ぼんやり、しているんだ？ 次の文章を読んでくれ」

「あつ、はい……えつと……すみません、どこからですか？」

「「「「あはははははは「「「「」

その日の、下校。

健吾達、4人は、話しながら、自転車を押していた。

「ちよつと、健吾、5時間目、何ぼーとしてたの」

凜が健吾に聞く。

「ちよつと考え事を……」

「考え事って？」

優は、健吾の顔をのぞき込みながら、聞いてみる。

「それは――」

そんな話しをしていると、4人の目の前に、小柄で大きなリュックサックを背負った、可愛らしい、男の子が、手に紙を持って、ウロウロしてた。

その姿を見た瞬間4人は、思った。

「「「「（絵に描いたような迷子だ！！）「「「」

第86話 迷子の探し人は、メイド（前書き）

お気に入り登録をされている方、ありがとうございます。あなた達が居るから、僕は、リアルドリームを書けています。

第86話 迷子の探し人は、メイド

「……（絵に描いたような迷子だ!!）」「……」

「ちよつと、話しかけてみるか」

四人は、その可愛らしい、健吾達と同じくらいの歳の男の子に近づいていき、拓也がその子に話しかけた。

「ああ、その君、どうしたの迷子？」

「えっ！ あ、え」と……はい」

男の子は、顔を赤くして答える。

「どこへ、行きたいんですか？」

優が男の子に聞く。

「じゃあ、すいません、ボクは、これから〇〇高校に行きたいのですが、もしかして皆さんは、〇〇高校の生徒さんですか？」

「はい、そうですよ」

健吾が答える。

「そうですか、良かった。もしよければ、その高校までの生き方を教えて、いただけませんか、ちよつと道に迷ってしまつて」

「はい、いいですよ」

そう言つと、優は、人差し指で自分達の高校の方角を指す。

「あそこに、大きな建物が見えるでしょ？ そこが私達の行っている高校なの、だからこの道をまっすぐ行つて、二つ目の信号を右に曲がつて、次の信号を左に行けばすぐ見えて来るよ」

「あつ、そうですか、ありがとうございます」

その男の子は、健吾達におじぎをし、向かおうと一歩踏み出すが、

何か思い出したように声を上げる。

「あつ！ ちよつとすいません、この人の事知りませんか？」

男の子は、健吾達に『ある』写真を見せた。

「……えっ！？」「……」

その写真には、メイド姿の健吾が写っていた。

「……」「……」「……」

固まる四人。

「……（知ってるも何も、その人物は、今、君の目の前に居るよ！）」

「……」

健吾以外の三人は、そう思った。

「知らないな――見たことも無いよそんな人」

健吾が顔を引きつりながら言う。

「じゃあ、そちらの三人は、何か心当たりありませんか？」

「いや、俺は、分からないな――凜、泉、知ってるか？」

「いいえ、私も分からないわ」

「私も……」

「そうですか……あの現場から一番近い高校の人達だから、何か知
っている事があるかもしれないと、思っただけだな……」

悲しげな顔をする、男の子。

「色々、ありがとうございます、じゃあ」

そう言う男の子は、高校の方へ向かって行った。

「なんで、あの子、健吾君の事、探してたんだろう？」
優が口元に手をやり考える。

「僕は、何故か嫌な予感がするのですが……」
そんな話を話しながら、四人は、男の子の背中を見えなくなるま
で、見ていた。

続く

第87話 分からない事は、図書館で調べよう

迷子の男の子と会って、次の日の水曜日、健吾達4人は、学校が終わってから、夢夢と合流し図書館に向かった。

「なあ、健吾、図書館に行つて、何を調べるんだ？」

図書館の入り口で、健吾に聞く拓也。

「昨日、泉さんが、オーナーさんに電話したら、オーナーさんがある事を思い出したらいいんだ」

「あること？」

「うん」

優が答える

「オーナーが、こないだ、健吾君を探しに来てた人達の胸に、まるの中に目が描いてある、青色のバッジをしていたんだって」

そして、健吾達は、図書館のパソコンで、このバッジについて検索した。

『まるの中に目』 検索、そして出て来た、検索結果は。

「World・control ワールド・コントロール」通称『ワール』世界に支部を持つ、過激派宗教団体だった。

「「「「「なっ!?!」「「「「「」

「じゃあ、あの掲示板の書き込みは、本当だったて事が!?!」
拓也が健吾に聞く。

「うん……そうゆう事になるね」

「ねえ、その『ワール』って一体、何をしている団体なの？」

夢夢が優の肩をさすりながら、聞く。

「みんなも、名前くらいは、聞いた事あるよね、ワールド・コントロール。通称『ワール』、表向きは、一応、宗教団体になっているけど、その実態は、武器や違法ドラッグの密輸入や売買、テロ活動、他には、裏社会の政治的関与までしている、巨大組織」

優がみんなに説明する。

「その思想の目標は、世界をコントロールする事、アメリカさえも、手を焼いているらしいわ」

「そんな、ヤバイ組織が、なんで健吾を探しているんだ!？」

「それは、分からないけど……」

「とん!」

「あっ!」

健吾達が、パソコンの前で話しをしていると、本棚の方向かって、本を10冊位重ねて、歩いて来た人が健吾にぶつかる。

「ああーああー」

「バサ! バサ! バサ! バサ! バサ! バサ! バサ! バサ! バサ! バサ!」

本に埋まれる健吾。

「痛っててて」

「すつすいません、大丈夫ですか？」

ぶつかった、人は急いで、健吾の上にある、本を除ける。

「アレ!？」

顔を見て、声を出す2人、その、ぶつかった人は、昨日の迷子の男の子だった。

「きつ、君は昨日の……」

続く

第88話 秘密の合図は、アイコンタクト（前書き）

感想など、お待ちしております。

第88話 秘密の合図は、アイコンタクト

「きつ、君は、昨日の……」

健吾にぶつかっただのは、昨日、迷子になっていた、男の子だった。
「あなた達、昨日、ボクに道を教えてくれた——」

「痛ててて」

「あつ大丈夫ですか？」

男の子が、健吾に右手を差し出す。

「うん、大丈夫、ありがとう」

健吾は、その右手を掴み、立ちあがった。

「誰、あの男の子？」

夢夢が小さな声で、凜に聞く。

「昨日、私達が学校の道を教えてあげた、迷子ちゃんだよ、後、何故か、メイド服の健吾の事を探していたの」

「この本、本棚に戻すんだよね、手伝うよ」

優達が、床に散らばった、本を集める。

「あつ、大丈夫です。ボクが、やりますから」

「いいから、いいから」

優達が集めた、本の表紙には、『ワールド・コントロールについて』と書かれていた。

「……」

その表紙を見て、一瞬、固まる五人。

「（ワールド・コントロールについて、調べていて、健吾の事も探している！？ これは何か、匂うわね）」

凜は、そう思った。

そしてみんなで、本を片づけるのを手伝い、凧がその子に聞く。
「あなた、名前は、なんていうの？ 私は、相川凧って言うの」

「！？ こんな、ワールド・コントロールについて、調べていて、健吾君の事も探している人に自分の名前を教えるなんて、危険すぎないかな、凧ちゃん！？ でも、凧ちゃんの事だから何か考えがあるのかも……」

優は、そう、思っていた。

「ボクの名前ですか……ボクの名前は、つかさ、雪乃　つかさ（ゆきの　つかさ）と言います。」

「つかさ君か、いい名前ね、まだコッチの紹介がまだだったわね、みんな自己紹介して！」

「野田　健吾です」

「桜井　拓也だ」

「泉　優です」

「雨音　夢夢だよ」

「よっ、よろしくお願いします。来週からあなた達の高校に転校しますので」

「あっそうだったの、学年は？」

凧が、つかさに聞く。

「一年です」

「じゃあ、私達と一緒にだね、ヨロシク！」

それから、テーブルに座り、色々と雑談する六人。

「あつ、私、ちょっと、トイレ行ってくるわね」

その瞬間、凜は、優にアイコンタクトを送り、優は、それに気づいた。

「わっ、私も、行く」

そう言つと、凜と優は、テーブル立ち、トイレに向かい、凜と優は、トイレで話をした。

「凜ちゃん、何か考えがあるんでしょ？ 雪乃君に自己紹介したつて事は」

「ええ、つかさ君が、ワールの事を調べていて、健吾の事を探している、これが全て、偶然だって事は、考えにくいわ、つかさ君が『ワール』の事を調べているって事は、ワールの一員と言う可能性は低いとは、思うけど、ゼロじゃない、だから、まだ私は、健吾がつかさ君の探しているメイド侍だって事を教えるのは、危険だと思うの」

「でも、つかさ君は、私達の知らない情報を持っている、それは、きつと確かな筈」

「ええ、だからその情報を聞き出すには、どうしたらいいか、考えてただけど、いい手が思い浮かばなくて、優を呼んだ訳、何かいい方法ある？ 優」

「う~~~~ん」

腕を組み、考え込む優。

「そつだ！ こんな手は、どうかな——」

第89話 次は、コレを着せよう（前書き）

感想、アドバイスなど、お待ちしております。

第89話 次は、コレを着せよう

「そうだ！ こんな手は、どうかな——」

それから、少し経ち、凜と優はトイレから帰って来て、テーブルに着いた。

「そう言えば、雪乃君は、メイド侍を探しているんだよね？」

優が、つかさに聞く。

「あっはい、そうです」

「どうして、メイド侍を探しているの？」

「そつ、それは……」

言葉に詰まる、つかさ。

「（どうやら、他人には、言えない、『ワケ』がありそうね）」

凜は、つかさの反応を見て、そう思った。

「えっと、実話、そのメイドさんに、一目ぼれをしまして、一度でいいから、会って話しがしてみたいと思ひまして……」

それを聞いた、健吾の顔は、青ざめる。

「へ〜そうなんだ、あははははは……」

「つかさ君、それなら、良い情報があるよ」

凜が、そつ、つかさに言った。

「えっ本当ですか!？」

「ええ、私の友達が、そのメイド良く似た人を週末の日曜日の10時位に、駅前でよく見かけけるって言っていたわ」

「その話しは、本当ですか!？」

「ええ」

「ありがとうございます、殆ど情報が無くて、行き詰ってた所だったんです！」

その後も少し、話しを続け、つかさは、用事が在ると言って、図書館を後にした。

つかさが居なくなってから、話しを続ける5人。

「凜、何であんな事、言ったんだ、一目ぼれした相手を探してるって言うのに、あんな、期待するような事を言ったら可哀そうだろ」
そう拓也が、凜に聞く。

「相変わらず、バカねー拓也は、一目ぼれしているなんて、あんなのとっさに出た、嘘よ、つかさ君は、私達の知らない情報を持っているわ、だからそれを聞き出す為に、健吾を囷にするのよ」

「僕、囷ですか……」

「そう、さて、今日は、これくらいにして、帰りましょう、色々収穫もあったし」

そう凜が言うと健吾達は、テーブルを立ち、図書館を出て行った。図書館の玄関を出てすぐ、凜が健吾にある事を言った。

「そうそう、健吾は、帰り、私の家に寄って行きなさい」

「えっ！ 何ですか？」

「アンタ、土曜日、どんな格好で行くつもりなのよ」

「それって……」

「私が、土曜日に着て行く服を貸してあげるから、それを選ぶのよ、優と夢夢ちゃんも来る？」

「行く行く、面白そうだし、ねえ！ 行こう優ちゃん」

「うん」

女子3人は、笑顔だった、健吾の顔は、引きつっていた、そんな、健吾の肩を軽く、拓也が叩く。

「頑張つてこい……今の俺に言えるのは、これくらいだ……」

その日健吾は、凜の家で、着せ替え人形になった。

「ああああーもう嫌だー！！！」

続く

第90話 待ち合わせは、駅前で（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第90話 待ち合わせは、駅前で

——日曜日、午前9時30分、駅前——

健吾は、こないだ、メイドをやった時と同じウィッグを着け、白いワンピースを身にまとい、駅前に立っていた。

「ううう、僕は、また、女の子の格好を」

健吾は、拓也達と別れる前に凜に、こう言われていた。

9時20分頃——

「いい、健吾、私達は、ばれないところで、健吾の事を見ているから、つかさ君が現れたら、私が健吾の携帯に電話をするから、それを取って、ずっと通話中にしとくのよ」

「はい、分かりました……」

「健吾君、携帯は、バイブに設定しといてね」

優が健吾に確認する。

「はい……」

健吾の返事に元気は無かった。

「どうしたの、健吾君、元気ないけど」

夢夢が健吾に聞く。

「だって、これから、あんな駅前で、こんな格好で待ってるなんて、もし誰かに、男だって、ばれたら僕は……」

「大丈夫よ、今の健吾なら、ナンパされてもおかしくないわ」

「そうだよ、健吾君、自信持って」

凜と優が、健吾の心に追い打ちをかける。

「拓也君、男として僕は、これから、何処へ向かえばいいんだろう」

……」

拓也は健吾の両肩に手をやり答える。

「健吾、今、お前は、健吾じゃ無く、『けいこ』だ、全てが終われば、きつとお前は、健吾に戻る、それまで頑張れ！」

「拓也君……」

「それにしても、健吾は、女の子の格好が似あうわねー今度は、どんな格好させようかしら」

凜が不気味に笑いながら、優と夢夢に話している。

その言葉は、健吾の心に、大きなダメージを残した。

「おい凜！ 人がせつかく、慰めてんのに、横から、攻撃するな！」

「えっ何の話！」

そんな事が在り、今、健吾は、駅前に立っていた。

そして、健吾が駅前に立ってから、1分足らず、健吾にある二人組が近づいて行った。

「あつ、あの二人組は！？」

続く

第91話 二人組を追い払うのは、この二人（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第91話 二人組を追い払うのは、この二人

健吾が駅前に立ってから、1分足らず、健吾にある二人組が近づいて行った。

「あつ、あの二人組は!？」

「ねえ、君1人?、だったら俺らと、ちょっと遊びに行かない?」

健吾に話しかけて来る、二人の男、それを、健吾から少し、離れたところで、見ている、拓也、凜、優、夢夢。

「なんだ、あいつら」

「どうやら、ナンパみたいね、たくつ、まだ、駅前に立ってから、1分も経ってないわよ! 拓也、ちょっと行くわよ」

「おう、雨音ちゃんと泉は、ここで待っていてくれ」

「うん、分かった」

「君、可愛いね」

そんな事を言いながら、片方の男が健吾の手を掴む。

「ちよつ、やめて下さい」

「なにか、奢ってあげるから、俺らと一緒に——」

「ヒュッ」

「キン!—」

凜が手を掴んでいた男の股間を蹴りが上げる。

「はう」

「どさ！」

股間を押さえ、その場に倒れこむ男。

そしてもう一人の肩に、拓也、凜の二人が手を置き、二人でその男に話しかける。

「私達の――」

「友達に――」

「何かようですかぁ」

「ギロ！」

メンチをきりながら、言う、凜、拓也。

「ひいひい、あのすいません、俺たちが悪かったです、おい、立て、行くぞ」

そう言つと、男達は、その場から、足早に逃げて行った。

「二人とも、ありがとうございます」

「たくつ、次から気をつけなさいよ」

拓也と凜は、優と夢夢の居る場所に戻っていった。

健吾が駅前に立つてから、10分程経ったころ、駅前に、つかさが現れた。

「ついに、ホシが現れたよ」

夢夢がみんなに言う。

「ああ、どうやら、健吾を探しているみたいだ」

つかさは、駅前に着くと、辺りをキョロキョロと見回していた、そして、つかさの目に、女の子の格好をした、健吾が映った。
「あっ！」

つかさは、健吾を見つけるなり、健吾の元へ走っていく。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

健吾の元へ着くと、膝に両手を着いて、息をするつかさ。

そして、つかさは、ポケットから、メイド姿の健吾の写真を取り出し、健吾に見せた。

「コレ、あなたですよね？」

続く

第92話 男の子の質問は、予想を超えたモノだった（前書き）

区切りが、よかったんで、短いですが、どうぞ。

第92話 男の子の質問は、予想を超えたモノだった

つかさは、ポケットから、メイド姿の健吾の写真を取り出し、健吾に見せた。

「コレ、あなたですよね?」

その時、健吾の携帯が、バイブで震える

「(あつ、相川さんだ)」

健吾。ポケットの携帯を通話中にした。

「あの、コレ、あなたですよね」

つかさがもう一度、健吾に聞く。

「……はい、それは、ぼ——私です」

「良かった、やっと会えた」

ほっとし、胸に手をやる、つかさ。

「あの、わ、私は、怪しい者では、ありません、あなたに伝えなければいけない、事があつて、あなたを探しに、この町に来ました」

「伝えなければ、いけない事?」

「はい、今、お時間大丈夫ですか?」

「ええ、大丈夫、ですけど」

「そつ、それじゃあ、立ち話もなんですから、あそこの喫茶店で私の話を聞いてくれませんか!？」

つかさが、真剣な目で健吾に訴えた。

「分かりました、良いですよ」

「ありがとうございます」
深ぶかと頭を下げるつかさ。

それから、健吾とつかさが喫茶店に入ると、拓也達も気付かれな
いように、喫茶店に入り、少し離れたところへ座った。

健吾の手元には、カフェオレ、つかさの手元には、紅茶が置かれ
ている。

「ボクの名前は、雪乃　つかさ　と言います」

「まず、単刀直入に言わせて、貰いますが、あなたは――守護者で
すね！」

「……………えっ!？」……………」

その話を携帯で聞いていた、拓也達もその言葉に驚いた。

第93話 二人を救ったのは、紙（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第93話 二人を救ったのは、紙

まず、単刀直入に言わせて、貰いますが、あなたは——守護者ですね！」

「……えっ!?!」

その話を携帯で聞いていた、拓也達もその言葉に驚いた。

「その反応だと、やっぱりそうなんですね」

健吾の驚いた顔を見て、言う、つかさ。

「確かにぼく——私は、今の守護者です。でもどうして、君が、守護者の事を……」

「それは、ボクのおじいちゃん、つまり祖父が昔、守護者をしていたからです、ボクは、幼い頃から、おじいちゃんの話しを聞いていて、あのメイド侍のニュースをネットで見つけた時、あなたが、今の守護者だと確信しました」

「でも、なんの為に、私を探しに?」

健吾が、つかさに聞く。

「それは、今世界に大きな危機が迫っているからです」

「えっ!?!」

そう話しをしていた時、健吾とつかさのテーブルにウウエイトレスがやって来て、その席に二つ折りにしてある、紙を健吾に渡した。
「あちら、お客様からです」

ウウエイトレスは、拓也達の席を指さした。

「あつ、ありがとうございます」

そして、健吾がその紙を開けると、中には、優の字でこう書かれていた。

——紙の文章——

健吾君、今すぐ、その喫茶店を出て、この喫茶店の中に、ワールのバッジを付けている人達が居て、健吾君の事を監視してるわ。

「なっ!？」

「どうしたんですか？」

健吾は、つかさにも、紙を見せた。

「えっ!？ あいつらが」

「出よう」

健吾は、つかさの手を引き、すぐ会計を済ませ、店を出ると、喫茶店から、それを追って、二人組の私服の男が、追ってきた、胸には、まるの中に目が描いてある青いワールのバッジが付けられていた。

「くっ、あいつらか」

つかさの手を引き走る健吾

「どうするんですか!？」

「あいつらを倒す事は、出来ませんが、駅前じゃ、騒ぎが大きくなります! だからここは、一旦あいつらを撤きましょう」

走る、健吾達だったが、前から、3人、右と左から、二人ずつワールのメンバーが来て、計9人に健吾と、つかさは、囲まれてしまった。

「おい、そのガキ、二人、少し俺達に付き合って貰おうか」

それを見ていた、周りの人達もざわつき出す。

「なにアレ、男達達が、女の子と男の子を囲んでる」

「警察呼んだ方が、良いんじゃないね」

「俺達も余り、騒ぎを起こしたくない、もう逃げられないんだ、ここは、素直に言う事を聞いて貰おか」

「どうするんですか？」

つかさが、心配そうに、健吾に聞く。

「大丈夫、一気に行くよ」

「えっ!？」

健吾がゆっくりと、ポケットに手をつ込み、夢玉を掴み、呟く。
「夢放解」

続く

第94話 囲まれた時は、逃げる事に集中（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第94話 囲まれた時は、逃げる事に集中

健吾がゆつくりと、ポケットに手をつ込み、夢玉を掴み、呟く。
「夢放解」

能力を使えるようにすると健吾は、つかさを抱きかかえ、目の前の男達に向かって走っていった。

「ひょい」

「しっかり、掴まってる」

「タタタタタ！」

一直線に目の前の男達の元へ走っていき、大きくジャンプし、健吾は、男達を飛び越えた。

「「「なっ！」「」」

驚く男たち。

「追え！ 逃がすな！！」

健吾とつかさを追う、男達だったが、常人の身体能力しか無い男達は、健吾に追い付ける訳も無く、健吾とつかさは、男達を巻く事に成功した。

「やっぱり、能力って凄いですね！ 生で見えて改めて、思いました」

「うん、まあね」

健吾は、男達から上手く撒けた事を確認すると、物陰に行き、優に、電話をかけた。

「プルルル、プルルル、ガチャ！」

「もしもし、泉さんですか？」

「うん、健吾君大丈夫だった」

「ええ、あいつらなら、ちゃんと撒きました、泉さんの手紙のおかげです」

「そう、良かった、じゃあ、これから、私のマンションに来て、健吾君の着替えも持っていくから、それに、私達も雪乃君の話を聞きたいし」

「分かりました。今から、泉さんのマンションに向かいます、じゃあマンションで落ちあいましょう」

「うん」

「ガチャ！」

「これから、僕の友達のマンションに行く事になったんだけど良いかな、その人達と一緒に、幻界を護っているんだ」

「はい！　そういうことなら、大丈夫です、その人達にも、協力して欲しいので」

そうして、健吾とつかさは、優のマンションへと向かった。

健吾とつかさがマンションに着くと、優、拓也、凜、夢夢の四人は、健吾とつかさの事をマンションの入り口で待っていてくれた。

「えっ、泉さんに、桜井君に、相川さんに、雨音さん、この人達が、あなたの仲間なの？」

「うん、そうだよ」

「ごめんね、つかさ君、色々説明してあげるし、こっちも色々と聞きたい事があるから、まあ、とりあえず優の部屋に行きましょう、説明はそれから」

凜がそう、つかさに言った。

「はい、分かりました」

そして六人は、優の部屋へとマンションを上がって行った。

続く。

第95話 優の部屋は、703号室（前書き）

感想、アドバイスお待ちしております。

第95話 優の部屋は、703号室

健吾達、6人は、マンションの7階に行き、優の部屋、703号室に入って行った。

リビングのテーブルを囲むように、座る、健吾、拓也、凜、つかさ、優と夢夢は、みんなの分のお茶を持ってきたから、テーブルに着いた。

「さて、まず、どこから、話しましょうか ずずずっ」

凜が、お茶を持ちながら言う。

「やっぱり、これからよね」

凜は、そう言うのと立ち上がり、健吾の元へと歩いていく。

「相川さん？」

「つかさ君、まず一番に見て欲しいのは、これよ!!」

凜は、健吾の頭を掴み、ウィッグをはぎ取った。

「!?! 野田くん？」

顔を赤くする健吾。

「じゃあ、どうして、あの時メイドの格好を……」

「武士の情けだ、それは聞かないでやってくれ」

拓也がつかさに言う。

「最初に、健吾が銀行強盗を倒した時は、『たまたま』健吾が女装をしていた時だったの」

凜がつかさに説明する。

「ひとつ、質問しても良いですか？」

「何？ 言ってみて」

「それは、野田君の趣味と考えると——」

「違います、違います、断じて、違います、アレは無理やりだったんです」

健吾が必死に弁解する。

「ああ、そうなんですか、あはははは」

健吾は、ワンピースを脱ぎ、自分の服に着替えた。

「ごめんね、雪乃君、私達は、健吾君の事とワールの事について、調べていた、雪乃君が、私達の知らない何らかの、情報を持っていると思つて、健吾君で雪乃君を、おびき出そうとしたの」

優が申し訳なさそうに、つかさに言う。

「良いんですよ、泉さん、結局あなた達のおかげで、こうして、守護者である健吾君に会えたんですから」

「それで、つかさ君は、喫茶店で言つてたよね、『今世界に大きな危機が迫っている』とかどうとかつて」

夢夢がつかさに聞く

「はい、では、今から、その話をさせていただきます」

「ボクは、先週の日曜日に、ネットで『謎のメイド侍』の記事を見て、月曜日に隣町からこの町のアパートへと、引っ越してきました。理由は、もちろん、守護者を探して、伝えなければいけない事が在ったからです」

「伝えなければいけない事？」

夢夢がつかさに聞き返す。

「はい、今から、3週間程前の話です。ボクのおじいちゃんは、昔、守護者をやっていたと、言いましたよね、もともと、ボクの家には、古い伝承の書物などが多くあり、その町では、有名な、家系だったんです。その中には、おじいちゃんが大切に保管していた、

「幻界に関する書物も在ったのですが、それらが、全て盗まれてしまっただけです」

「盗まれた？ 誰が何の目的で？」

拓也がつかさに聞く。

「きつと、他の文献や、書物から、ボクの家に、幻界についての手がかりを知ったあいつらは、その手がかりを得る為に、家に強盗に入っただのです」

「あいつらつてもしかして——」

健吾がつかさに言う。

「はい、ボクの両親は、小さい頃に、事故で死んでしまつて、強盗に入られた時、ボクは、一人で家に居て、あいつらが家を荒らす様子を隠れて見ていました、そしてその人達の胸には、『まるの中に目がある、青色のバッジ』をしていたんです。

「アル！」

「はい、その通りです、それで、みなさんをお願いします、明日、おじいちゃんに会って貰えませんか」

続
く

第96話 ケンカするのは、仲が良いから（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第96話 ケンカするのは、仲が良いから

「みなさんに、お願いがあります、明日、おじいちゃんに会って貰えませんか？」

つかさが、健吾達に頭下げながら、お願いする。

「えっ、雪乃君のおじいさんって、昔、守護者をやったという」
健吾がつかさに聞いた。

「はい、今は、たった一人の、ボクの肉親なんですけど、今は、病気で入院していて、この町の大学病院に居るんです。」

「ボクは、おじいちゃんに、今の守護者を探して来て欲しいと頼まれ、健吾君を探していました」

「会いに行くのは、良いですけど、さっき言っていた、世界に危機が迫っていると言うのは、一体どういう意味なんですか？」

健吾が、つかさ聞く。

「その……詳しい内容は、おじいちゃんは、ボクに教えてくれなかったんです、余りボクが詳しく知りすぎると、かえって、危険になるかもしれないからって」

「じゃあ、つかさ君のおじいさんに会えば、詳しい話が聞けるのね？」

凜が聞く。

「はい！」

「じゃあ、行きましょう、明日、みんなで」

「ありがとうございます！ それじゃあ、明日からボクは、皆さんの学校に転校するので、明日の月曜日の放課後に、病院に来て貰っていいですか？」

「うん良いよ、みんなも良いよね？」

健吾がそう言うと、拓也達もうなづいた。

「じゃあ、今日は、これでお開きね」

凜が立ち上がりながら言った。

「だな」

それに答える拓也。

「あっちよつと待って、みんな」

優がみんなに、言う。

「もう、十二時過ぎだし、大した物は、作れないけど、もし良かったら、私の家でお昼を食べてかない？」

優がみんなに聞く。

「さんせー」

夢夢が元気良く返事をする。

「そうね、私もお腹すいたし」

「俺も、腹ぺこだ」

「ボクも良いんですか？」

つかさが自分の顔に指をやり、優に確認する。

「もちろん！」

「じゃあ、結構な人数が居るから、僕も手伝うよ」

健吾は、立ち上がりながら、優に言う。

「あっ、ありがとう。健吾君」

「じゃあ私も手伝おうか？」

凜がそう言うと、拓也が口をはさむ。

「やめとけよ、凜、せっかく、泉と健吾で料理して、うまい飯がく

えるのに、お前、昔、俺に、訳のわからない、『物質』を食べさせて俺を気絶させたことあったろ、料理まるつきり駄目な、そんなお前が行ったら『上等な料理にハチミツをブチ撒けるがごとき思想』みたいな事になって――」

「ヒュッ！」

「ガハッ」

凜のリバーブロー（肝臓打ち）拓也をとらえた、そしてさらに拳を構える凜。

「じゃあ、何作るの？ 泉さん」

「そうだねー確かお肉があったから――」

凜が拓也を襲っている横で、健吾と優は、台所に行きながら、平然と会話をしていた。

「あのー雨音さん」

つかさが、夢夢の耳元で話しかける。

「ん なに？」

「これは、止めなくても良いんですか」

拓也と凜を指さす、つかさ。

「ああ、大丈夫、大丈夫、いつもの事だから」

「おい、凜やめろって」

「うるさい、コノーー！！」

優のマンションは、今日はとても賑やかだった

続
く

第97話 勘違いは、誰にでもある（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第97話 勘違いは、誰にでもある

月曜日、今日は、つかさが、健吾達の学校に転校してきて、その放課後、みんなで、つかさの祖父が入院している大学病院に行く事になっている。

――朝のホームルーム――

健吾達の教室に、担任が入って来て、教卓の前で話している。
「今日は、みんなに、新しい、友達を紹介する」

健吾、拓也、優、凜の4人は、すぐ、つかさの事だと分かった。

「（雪乃君、僕達のクラスになったんだ、ああそうか、神埼が居なくなつて、僕達のクラスは、他のクラスより1人少ないからな）」

健吾は、そう思った。

「じゃあ、入って来なさい」

「はい」

「ガラ」

教室のドアが開き、つかさが入って来たが、健吾達4人は、驚いた。

「……えっ!?!」

入って来た、つかさは、黒板に自分の名前を書く。

「雪乃 つかさ です。 みなさん、これからよろしくお願いします。」

深ぶかと頭を下げる、つかさ、健吾達は、目を点にしている。

ホームルームが終り、つかさの周りに集まる、4人。

「あなた、女の子だったの……!?!」

凜が大声で言った。

そう、つかさは、学ランでは無く、セーラー服を着ていたのだ。
「はい、良く間違われるんですよ、ボクの事を、男の子と」

改めて、キャラ紹介

雪乃　つかさ（ゆきの　つかさ）性別♀

ショートカットで、可愛いボーイッシュな女の子で一人称が『ボク』なので、よく男の子と間違われる。

「なんで、今まで、黙ってたんですか？」

健吾がさつかさに聞く。

「すいません、まるつきり、ボクの事、男の子と勘違いしていたので、いきなり女の子ですって言っても信じて貰えないと思ったし、学校に制服で行けばすぐに女の子って分かって貰えると思ったから

……」

「でも、昨日の野田君の女の子の姿も——」

「ちょっと、雪乃さん、それはストップ——」

健吾は、慌てて、つかさの言葉を止めた。

「それは、内緒にしろって、下さい」

「あつ、ごめん野田君」

そして、放課後、健吾達が校門を出ると、夢夢がランドセルを背負って待っていた。

「もう遅いよ、みんな」

「ごめん夢夢ちゃん」

夢夢に謝る、優。

「じゃあ、全員、揃ったから、行こうか、雪乃さんのおじいさんが入院している、病院へ」

健吾がそう言つと、健吾達は、高校を後にし、病院へ向かった。

第97話 勘違いは、誰にでもある（後書き）

つかさが、女の子！？ 誰か、予想できた人、居るかな？

第98話 辻褄は、繋がって行く(前書き)

アドバイス、感想、お待ちしております。

第98話 辻褃は、繋がって行く

健吾達は、つかさの祖父が入院している病院に向かう為、学校を出て、近くのバス停へと歩いて向かった。

「雪乃さんは、図書館でワールについて調べてましたよね」
健吾が歩きながら聞く。

「うん、そうだけど」

「じゃあ、ワールについては、何か分かったことがあるんですか？」

「えーと、ボクが今まで、調べて分かったのは、ワールのリーダーは、外国人と日本人のハーフである事と、ワールの本部は、日本にある事くらいかな」

「えっ！？ワールの本部って日本にあったの？」

優が驚いた声で、つかさに聞く。

「ええ、場所は、何処にあるかは、さすがに分からないけど」

それから、健吾達は、病院に向かいながら、自分達の情報や、つかさの情報を交換しあった。

「でも、驚いたな」雨音さんは、野田君の前の守護者で、本当は、ボク達と同じ歳なんて」

「その事を知った時は、僕達も驚きましたよ」

そんな話をしながら、健吾達は、病院に着いた、そして、つかさを先頭に歩いていき、四階の端の個室の前まで来た。

「ここが、おじいちゃんの部屋です。」

「ガラッ」

ドアを開けるつかさ。

「おじいちゃん、つかさだよ」

「失礼します。」

健吾達が病室に入ると、窓際のベッドから腰を起こして、外を見ている、少し、ぼつちやりした、八十歳くらいのおじいさんが居た。「ああ、つかさか、そちらの人達が今、幻界を護っている、人達か……」

つかさの祖父は、健吾達の顔を見渡しながら言う。

「うん、右から、桜井君、相川さん、野田君、泉さん、雨音さん、だよ」

「そうか、君達ありがとう、私がこんな体だからね、つかさに言つて、今の守護者を探して来て貰ったんだ、そして君だね、今の守護者は……」

つかさの祖父は、健吾を指さしながら言った。

「はい、そうです、でもなんで、僕が守護者だと分かったんですか？」

「それは、分かるさ、ワシは、二百年近く守護者をやっていたからね、歳を老いて、体もボロボロだが、残っている夢力で、夢玉を感じれるからね」

「……につ、二百年!?」「……」

その年数に驚く五人。

「凄い、俺達の大先輩じゃないか」

拓也が、驚きながら言う。

「まあ、今は、その事は、置いといてくれ、今日、君達を呼んだの

は、伝えなければならない事があるからだ」

「世界の危機ですね」

健吾がつかさの祖父に尋ねる。

「ああ、その通りだ、君達が幻界を護っている事は、この話しを聞く覚悟があると考えて良いかい？ とても危険な事になりそうなんだ」

健吾は、拓也、凜、優、夢夢の顔を見渡す、それに合わせて、四人は、黙ってうなづいた。

「はい、もちろん、大丈夫です」

「そうか、じゃあ、つかさは、ちょっと部屋から出ててくれないか？」

「えっ、どうして、おじいちゃん」

「この話しを聞けば、お前も危険に会う可能性がある、だからだ」

「でっでも、ここに居る、みんなは、ボクが連れて来たんだよ、だから、ボクにも話しを聞く義務はあるよ」

つかさは、真剣な眼差しで、祖父に訴える。

「分かった、じゃあ、つかさもそこで聞いていなさい」

そして、つかさの祖父は、事の経緯を説明し始めた。

「まず、ことの始まりは、ワールという宗教団体が、幻界について調べ出したことだ、やつらは、この国の色々な文献を事細かく、調べ上げ、幻界の事を知り、さらに調べる為に、ワシの家に強盗に入っただ、そして、奴らは、家に保管してあった、文献から、あるモノの 重要な意味を知ってしまったんだ」

「あるモノの重要な意味？」

健吾が祖父に尋ねる。

「ああ、君達も知っているだろう、先日ニュースで、三種の神器が盗まれた事を、あの三つは、もともと、幻界に關係する道具でね、玉、剣、鏡のうち、玉と剣。つまり、八尺瓊勾玉と、やさかにのまがたま天叢雲剣は、ある1人の守護者が残したモノと言われているんだ」

「ある、守護者？」

健吾が祖父に尋ねる。

「ああ、君達も名前くらいは、聞いた事があるだろう、その守護者は、歴代最強の守護者と言われている『スサノオノミコト』だ」

「えっ！ スサノオノミコトってヤマタノオロチを退治して、その尾から出て来た天叢雲剣を天照御大神に献上した、神話上の人ですよね？」

頭の良い、優がつかさの祖父に聞く。

「君は、良く知っているね、でも神話上は、そうになっているが、事実は、そうでは無いんだ」

「まさか、ヤマタノオロチって」

凜が口にする

「そう、ヤマタノオロチは、その昔、幻界に現れた、史上最強のバクと伝えられている。その昔、スサノオノミコトは、ヤマタノオロチと戦い、何とかヤマタノオロチを八尺の勾やさかのまがたま？に封印することが出来たんだ、そして、のちの時代に目覚めるかもしれない、ヤマトのオロチを倒す為に自らの夢力を具現化、そして固定化して作ったのが天叢雲剣、別名、草薙剣くさなぎのつるぎと言われているモノと伝えられているんだよ」

「それじゃあ、三種の神器を盗んだのは……」

健吾が言う。

「そう、家に在った文献から、その事を知った、ワールと言う奴らが、三種の神器を盗み、そして目的は分からないがきつと、ヤマタノオロチの復活を狙っていると、ワシは、考えている」

「だが、ヤマタノオロチを復活させるには、八尺の勾やさかのまがたま？を幻界に持つていく必要があるもそう、文献には、書いてあった」

「だったら、能力者がワールに居なければ、幻界に、その勾玉を持つていく事も出来ないから、ヤマタノオロチは、復活出来ないんじゃないか」

拓也がそう思い、つかさの祖父に聞く。

「確かに、君の言う通りだ、君達、今日まで、幻界に変わった事は無かったかい？」

健吾達に聞く、つかさの祖父。

「ええ、特に、変わった事は、無かったです」

「ならば、奴らの中には、能力者は、居ないだろうが、しかし、厄介な事に奴らは、八咫鏡やたのかがみも盗み出している、この鏡に、夢力を込めれば、能力の無いモノでも、その鏡に写った者は、幻界に体ごと行けるようになる」と文献に書いてあった」

つかさの祖父が説明する。

「それじゃあ、ワールの奴らが健吾の事を探しているのは、その鏡に夢力を込めさせる為だったのね」

凜が、そう言った。

「ワシが、知っているのは、これが全部だ、君達は、決してワールの奴らに捕まらないように気をつけて欲しい、これが、この老いぼれの言えることだ」

「分かりました、絶対あんな奴らに掴まりません」

そう、健吾が決心する。

それから、少し話していると、面会時間がやって来て、六人は、病室を後にする事にした。

「今日は、色々とお話を聞かせていただき、ありがとうございました」

優がそう言つと、健吾達は、頭を深ぶかと下げ、おじぎした。

「じゃあ、おじいちゃん、また来るね」

健吾が最後に病室を出ようとする、つかさの祖父に呼ばれた。

「野田君ちよつと」

「はい」

「みんな、ちよつと先に行つてて」

「うん、分かつた」

健吾は、1人病室に残り、つかさの祖父の話聞いた。

「野田君、孫を……つかさをよろしく頼むよ、あの子は、両親を亡くしてから、余りワシ以外の他人に、心を開かない子になってしまったが、君達と居るあの子は、とても楽しそうだった、よければ、みんなで幻界の事を抜きにして、あの子友達になつてもらいたい」

「大丈夫です、雪乃さんは、もう僕達の友達です、それじゃあ、おじいさんも、早く元気になつて下さいね」

そう言つと、健吾は、病室を後にした。

続く

第99話 戦いは、始まる（前書き）

蛇話編も、後半突入です。

第99話 戦いは、始まる

健吾達が、つかさの祖父に会いに行ったその日の午後八時頃、健吾が自分のアパートで、夕飯の片づけをしていると、健吾の携帯が鳴った。

「プルルル、プルルル、プルルルル」

「誰からだろう？」

健吾が、携帯を手に取り、画面を見るとそこには、『雪乃 つかさ』と書かれていた。

「雪乃さんからだ、どうしたんだろう」

「はい もしもし」

健吾が携帯を手にとると、携帯から、聞いた事の無い、男の声が出てきた。

「おい！」

「えっ!？」

「単刀直入に用件を言おう、お前が守護者の、野田だな、この携帯の持ち主のガキは、俺達、ワールが預かっている」

—— 今から約二時間前 ——

吾達が病院を後にし、つかさと別れた後、つかさは、帰宅と途中の人通りの少ない道で、ワールのメンバー五人に囲まれてしまった。

「お前、こないだの日曜、コイツと一緒に居たな？」

1人の男が、メイド服の健吾の写真をつかさに見せる。

「……………」

黙る、つかさ。

「リーダーが待っている、一緒に来て貰うぞ」

男が、つかさの背後から、つかさの口に布を被せると、つかさの目の前は、真っ白になった。

「よし、車に乗せろ」

「うーん、ここは？」

つかさは、手足を縛られて、床に寝かせられている、そこは、二十畳ほどの白い部屋で、壁には、十字架や、イエス・キオストの肖像画などが飾られあり、その部屋には、二十人程のワールのメンバーが居た。

「お目覚めか、お譲ちゃん？」

つかさの二メートル程前にある、白いソファーに煙草を吸いながら座っている、金髪の二十代後半位の男がつかさに話しかける。

「今までで、目覚めの悪い朝だよ」

その、金髪の男を睨みながら言うつかさ。

金髪の男が座っている、ソファーの横には、剣が立てかけてあり、ソファーの上には、丸い直径二十センチ程の鏡が置いてある。

「あははは、それは悪い事をしたね」

金髪の男は、不気味に笑いながら言う。

「さて、本題に移そうか、君は、もう分かっていると思うが、此処は、俺達ワールの本部、そして、おれが、リーダーの『ジーザス』だ」

「あなた達の目的は、何！？ ヤマトノオロチが復活したら、世界がどうなるか分かっているの！？」

つかさが、ジーザスに言う。

「へえー、ヤマトノオロチの事まで、知っているのか、良く俺達の事を調べているね、凄い、凄い」

「パチ、パチ、パチ、パチ」

ジーザスがつかさをバカにするように、手叩く。

「世界がどうなるか分かっているかって？ モチロン、分かっているさ、ヤマタノオロチが復活すれば、世界は、嫌、人類は、滅ぶだろう、なんつったて、幻界で暴れる、ヤマタノオロチは、軍隊だつて倒しに行けない、そして、幻界で壊したモノは、制限時間が切れれば、現実世界でも壊れる、コツチに居る人間は、訳も分からず壊れる町を国をタダ、見ているだけしか出来ねえんだからな」

「なんの為にそんな事を……」

「ジユボ！」

ジーザスは、新しい煙草に火を着ける。

「俺達はな、熱心なキ〇スト教信者、だったんだよ、元はな、でも、いつまで、待ってもイ〇ス様は、降りて来やしねえ、だから俺達が見定めるだよ、この腐った世界が、このまま存在していいのかどうかを、俺達が最後の審判を下してな」

「俺達は、全力で、この世界を潰しにかかる、それでも、世界が滅びねえなら、捨てたモンじゃねえって事だ」

「それでだ、俺は、ヤマタノオロチを復活させる為に、この八尺瓊やさかの勾玉まがたまを幻界に持っていかなきゃ行けねえんだよ」

ジーザスがポケットから、八尺瓊勾玉を取り出し勾玉を右手で持ち、つかさに見せながら言う。

「でっ、その為には、八咫鏡やたのがみに、夢力を込めて、幻界の出入りが出来るようにしないと行けない、つまり、俺が、お譲ちゃんに何をしたいか分かるかな？」

「おっ、教えないわよ、守護者の居場所なんて！」
つかさが、ジーザスに向かって、そう、叫んだ。

「……居場所は教えないか……と言う事は、知っているんだな、守護者の居場所を」

「（あつ、しまった……）」

「じゃあ、もしかして、この中に、ソイツは、居るのかな？」

ジーザスは、つかさが寝ている間に盗った、つかさの携帯を見せる。

「！？……」

つかさの顔が引きつる。

「その様子だと、この中の誰かが、守護者らしいな、さて、じゃあ、お兄さんに、誰が守護者かを教えてくれるかい？」

「そんなの、教えられる訳無いでしょ！」

つかさの、その言葉を聞いた、ジーザスが立ち上がり、つかさの元へ歩いていく。

「そうか、教えてくれねえか……」

しゃがみこみ、床に寝ている、つかさのあごを持ち上げる、ジーザス。

「くっ……」

「おい、小娘、よく聞け、俺達の情報網と、武力を舐めるなよ、今、日本には、俺達のワールの先鋭達が世界から集まっている、この携帯に名前がある連中を調べ上げ、消すこと位、わけねえんだよ……もう一度だけ聞く、守護者は、誰だ？」

ジーザスがつかさを睨めつける。

「わっ分かったよ……」（ごめん、野田君）守護者の名前は——」

そして、健吾に電話がかかって来た。

「なっ！？ お前は、一体誰だ！ 雪乃さんに何をした！」

「まあ落ちつけよ、俺は、ワールのリーダー、『ジーザス』だ、安心しろ、それにしても、道理で見つからなかった筈だぜ、このガキから聞いたら、あのメイドは、男のお前だったんだってな」

「ええ、そうですよ、それより、雪乃さんは、無事なんだろうな！」

「心配するな、このガキは、今のところは、危害は、与えてないが、これからどうなるかは、お前次第だ」

「僕が、やたのがみ八咫鏡に夢力を込めると言う事ですか……」

「ほう、話が早いな、じゃあ、俺が指定する場所に1人で来い、警察や他の連中には、このガキの為に、言わない方が良い」

健吾の携帯を持つ手に力が入る。

「わっ、分かりました、何処にいけば、良いんだよ」

「この町の南のは外れにある、〇〇会社の工場跡地だ、場所は、大體分かるな？」

「はい……」

「行けば、どの工場かすぐ分かる、その中に九時丁度に来い」

「分かった……」

そして、携帯の通話は、切れた。

「よし、行くぞお前ら、準備は、良いな？」

「「「「「はい!!」」」」」

「さあ、ジハード（聖戦）の始まりだ」

続く

第100話 健吾は、……（前書き）

ついに100話まで来ました。読んでいただき、本当にありがとうございます。

第100話 健吾は、……

電話が切れた後、健吾は、アパートを飛びだし、自転車に乗って町は外れの工場跡地へと向かった。

「雪乃さん、待っていてください」

そして、健吾は、40分程自転車を走らせ、工場跡地についた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、此处だよな」

その工場跡地には、もう使われてない、工場がいくつも並んでいて、健吾は、自転車を押しながら、一つ一つ看板を見て行って、指定された、〇〇工場を探していた。

「これじゃ無い、これでも無い……あつ、これが……」

その工場跡地でも、一番大きい、工場が指定された工場だった。

健吾は、自転車を降り、その工場へと向かう。

「念のため、能力をえるようにしよう」

健吾は、ポケットに手を入れ、夢玉を掴み、呟いた。

「夢放解除……」

そして、健吾は、正面のドアの鍵が開いていたので、そのドアから、工場に入った、そこには、昔は、使われていただろう、機械が沢山並んでいた。

中に入ると、まるで、この為に用意されたみたいに、大きな電球が数個付いていて、工場の中を不気味に照らしていた。

「ここで、良いんだよな？……まるで人の気配が無い」

健吾が工場に入っすぐ、健吾の携帯が鳴った、その画面には、雪乃 つかさ と映っていた。

「ジーザスカ……」

携帯を取る健吾。

「もしもし」

「俺だ、俺達は、その工場に仕掛けた監視カメラで、お前を見てい

る、変な事をしようとするなよ」

「分かった、お前の言う通り、ちゃんと1人で来た、早く、雪乃さんを解放しろ！」

「そう、慌てるなよ、まずは、仕事をしてもらってからだ、まずは、二階に上がれ、携帯は、繋いだままでだ」

「分かった」

健吾は、階段を見つけ、二階へ上がって行った、二階は、一階とは違い機械など無く、広いスペースに、白いソファアがポツンと1個あっただけだった。

「2階にある、ソファアが見えるか？」

「ああ、見えたよ」

「その上に、八咫鏡やたのかがみが置いてある、それに夢力とやらを込めて貰おうか、もし変な事をしたら、小娘は——」

「分かったよ」

健吾は、携帯ほ白いソファアの上に置き、ソファアの上に置いてあつた、3種の神器の一つ、八咫鏡やたのかがみを手に取り、夢力を込め始めた。「はあっ！」

夢力を込め始めると、八咫鏡やたのかがみは、光出し、ところどころ錆びついていて、部分も直っていった。「ふうっ」

夢力を込め終り、携帯を持つ健吾。

「夢力を込め終わった」

「そうか、ごくろうさん、今、俺の仲間をお前の居る場所に向か

わせる、そいつに鏡を渡せ」

「ああ、分かった」

「お前に一つ聞いておきたい事がある、今のこの時代の歪みの力の中心は、何処になっている？ ウソは、つくなよ」

「……〇〇高校だ」

健吾は、自分の通っている高校が、今の歪みの力の中心だと、ジーザスに教えた。

「そうか」

健吾がジーザスと話していると、ジーザスの仲間が来た、その姿は、まるで特殊部隊のような姿だった。

「（ヘルメット、ハンドガン、自動小銃、防弾チョッキ……どうやってこれだけの装備を日本に……）」

「俺の仲間が着いたな、じゃあ、ソイツに鏡を渡せ」

健吾は、鏡を渡すと、その仲間は、その場から去っていた。

「ちゃんと、使えるようになったか、チェックをする、それが終われば、小娘は、返してやるよ、それまでお前は、そこに居ろ」

「持ってきました」

鏡を持った男が、工場から離れた所に停まっていた、ジーザスの乗っている車に来た、その車には、手足を縛られ、猿ぐつわをされた、つかさも居た。

「ごくらう」

ジーザスは、車を降りると、すぐに、やたのがみ八咫鏡が使えるかどうかを確認する。

「さてと、確か文献には、幻界の行きたい場所を思い浮かべ、そし

て、行きたい者を映せば良いんだつたよな、さっき言っていた高校の場所は知っているから、そこにしよう」

ジーザスは、健吾達の高校を思い浮かべ、自分の姿を鏡に映しこんだ、すると、ジーザスは、仲間たちの前から姿が消えた。

「……!?」「……」

目の前から、リーダーが消え、驚く、仲間たち

「ほう、ちゃんと、出来るようになったみたいだな……」

次の瞬間、ジーザスは、幻界の健吾達の高校の校庭に立っていた。「ここが、幻界か、余り、気持ちのいい場所じゃねえな」

ジーザスは、また鏡に自分の姿を映し込み、現実世界の元居た場所に戻った。

「リーダー大丈夫でしたか？」

仲間の一人がジーザスに聞く。

「ああ、バツチリだ、何も問題はねえ」

「さてと、後は——」

ジーザスは、車に居た、つかさの足を縛っていたロープをほどき、車から外へ出した。

「良く、見とけ」

ジーザスは、健吾の居る工場を指さす。

「まだ、チェックは、終わらないのか」

その時、健吾まだ、工場でジーザスの連絡待っていた。

煙草を取り出し、一本口に含み、火を着けるジーザス。

「これ、なんだか分かるか？」

ジーザスは、ポケットから、小さな四角いスイッチを取り出し、つかさに見せる。

「うーんうーんうーん」

猿ぐつわをされ、喋れない、つかさ。

「すーいふーい」

煙草を吸い、煙を吐く、ジーザス。

「たーまやーい」

「カチッ」

「えっ!？」

「ドガアアアアアー……ンン!!」

ジーザスが、スイッチを押すと、健吾が居た工場は、吹き飛んだ。
「うっーんうっーい!!」

「アーメン」

そう、ジーザスは、静かに呟いた。

続く

第101話 道路交通法は、略すと道交法（前書き）

感想、アドバス、お待ちしております。

「うん、分かってる、健吾君の能力を現実世界で解放した事でしょ」

「うん」

「きつと、健吾君に何かあったんだ、ちよつと待って、今、健吾君に連絡してみる」

優は、携帯を取り出し、健吾の携帯にかけるが、通話中で繋がらなかった（この時、健吾は、携帯でジーザスと通話中）

「駄目、繋がらない」

「じゃあ、取りあえず、凜ちゃんと拓也君に連絡したら？」

夢夢が優にそう提案する。

「うん、今、かけてみる、あと、夢夢ちゃんも早く服着て！」

「あつ忘れてた」

夢夢は、服を着る為、脱衣所に向かった。

「じゃあ、まず、凜ちゃんに電話を……」

「プルルル、プルルル、プルルル」

「あつ！ 凜ちゃんだ」

優が凜に電話をかける前に、凜の方から、優に電話がかかって来た。

「もしもし、優！ 私が何でかけて来たか分かるわよね」

「うん、健吾君が、能力を解放した事でしょ」

「そう、方角は、多分、この町の南の方よね、私こうゆつの苦手だから分かんないけど、大体何キロくらいとか、優、分かる？」

「ちよつと待って、やってみる」

優が、健吾の夢力に集中する。

「え〜と、多分、私の家から、南に十キロちよつと位だと、思うけど」

「優のマンションから、十キロちよつと南ね、ちよつと待ってて」
凜は、この町の地図を取り出し、調べ始める。

「優のマンションから、十キロ……十キロちよと……この辺ね」

「凜ちゃん、何か分かった？」

「ええ、かなり怪しい所よ、昔の工場跡地よ」

「えっ、そんな所に、健吾君が居るってこと!？」

「絶対何かあったのよ、優、今すぐ、この工場跡地に向かうわよ、私の家に夢夢ちゃんと来て！ 私は、後、拓也叫んでくから」

「わっ、分かった」

そして、凜との携帯が切れた。

そして、すぐ、優と夢夢は、マンションを飛びだし、自転車に乗って、の家に向かった。

——十五分後——

優と夢夢が凜の家の近くで、自転車に乗った拓也と会い、一緒に凜の家に向かった。

「でも、なんで、凜の家に集まるんだ？もつと他の場所みんなで集まった方が、早く、工場跡地に着くのにな」

拓也が優と夢夢に聞いてみる。

「きつと、凜ちゃんに何か、考えがあるんだよ」

優がそう、拓也に答える。

「考えね……何故か知らんが、少し寒気がするぜ」

そして、凜の家に着くと、凜が、玄関の前で、優達を待っていた。
「あれ、三人一緒に来たの？」

拓也に聞く凜。

「ああ、すぐそこで会ってな、それより凜、なんで凜の家に集まったんだ？」

「私達が一緒に、工場跡地に向かうには、大分時間を食っちゃうわだから……これで行くのよ！」

凜が拓也達に、車の力ギを見せる。

「「えっ、車!?」」「」

「そうよ、車よ、車、さあ、早く、ガレージに在る車に乗って、今親も居ないし、さっさと行くわよ!!」

「おい、誰が運転すんだよ、というか、法律違反だぞ！」

「私が運転するわ、それに拓也! 道交法守って、友達護れなかったら、意味無いでしょ!!」

「凜……」

「「凜ちゃん」」

「わかったよ、じゃあ車に乗るぞ！」

四人は、ガレージに行き、そこに在った、白い車に、凜が運転席、拓也が助手席、優と夢夢は後部座席に乗り込んだ。

「優、案内よろしく！」

凜は、優に地図を渡す。

「うん、分かった」

「それより、凜、お前、自信満々だか、運転出来るんだよね？」

「任せて、ゲーセンで鍛えた腕を見せてあげるわ！！」

「（大丈夫かよ……）」

「じゃあ、行くわよ、みんな！！」

凜がアクセルを踏み込んだ。

「ドカ！！」

車は、バックして、ガレージの後ろの壁にぶつかった。

「なんで、ギアをバック（R）に入れて、アクセル踏みこんでんだ、お前は！？」

「えっ？ ギアをバックて何？」

「……」

固まる三人。

「もういい、凜、代われ、俺が運転する！」

車を出る、拓也。

「えっ、でも」

「凜ちゃん、お願い代わってあげて」

「私もその方が良いと思う」

夢夢と優が、お願いする。

「わっ、分かったわよ、代わるわよ、代わればいいんですよ！」

そして、車は、拓也が運転し、工場跡地へと走り出した。

凜の家出て、十五分後、拓也の中々の運転により、工場跡地の近くまで、四人は、来ていた。

そして、工場跡地に着いて、拓也、凜、優、夢夢が見たモノは、
大量瓦礫の山だった。

続く

第102 開戦は、近い（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第102 開戦は、近い

工場跡地に着いて、拓也、凜、優、夢夢が見たモノは、大量瓦礫の山だった。

「何よコレ……何があつたの!？」

凜が、瓦礫の山を見て、言った、瓦礫の山からは、ところどころから、煙が出ていて、四人は、さっきの音の正体は、この瓦礫の山だと、すぐ理解出来た。

「健吾君は、どこ?、健吾君は、何処?」

優が怯えた、声で呟く。

「ちよつと、優ちゃん、落ち着いて健吾君は、まだ大丈夫だよ」

夢夢が、優の手掴みながら、言った。

「えっ!? あっ本当だ」

確かに、集中すれば、健吾の夢力が四人には、ちゃんと感じ取れた。

「あり、瓦礫の山の方だな、行くぞ」

「うん」

拓也達は、瓦礫の山に向かい、健吾を探し始めた。

「おい、健吾!」

「健吾君!」

「健吾!」

「夢力からすると、この辺の筈なんだけど……」
夢夢が呟く。

「みんな、ちよつとだけ、静かにして、私に集中させて」
そう言つと、優は、目を閉じ、健吾の夢力に集中した。

「（健吾君どこに居るの？………！！）」

「分かった、コッチだよ」

瓦礫の上を走って行く、優、そしてある地点で立ち止まった。

「ここ！ この下から、健吾君の夢力を感じる！」

「あつ本当だ！」

「拓也、ここの瓦礫をどかさわよ」

「ああ」

四人で瓦礫をどかしていくと、その下に健吾が埋まっていた。

「「健吾君！！」」

「「健吾！！」」

夢夢が健吾の顔に手を当てる。

「大丈夫、気絶しているみたい、怪我をしているけど」

「取り合えず、瓦礫の山から、降ろそう」

拓也が健吾の肩に手を入れ、持ち上げ、瓦礫の山から降ろした。

「確か、いつも、健吾君は……」

優が健吾のズボンのポケットに手を入れ、夢玉を取り出した。

「あつた、夢放解」

優が、能力を解放すると、すぐに、夢力を使って、健吾の怪我を治していった。

弱まっていた、健吾の夢力も回復していった。

「あれ！？ 夢力自体も大分回復してるぞ」

拓也が言った。

「もともと、余り夢力を使っていなかったみたいね、多分使う前に気絶しちゃって、怪我をしたから、一時的に夢力が弱まっていたみたい」

夢夢が拓也の言った事に、答えた。

「ふう、怪我は、治ったよ、まだ、健吾君は、起きてないけど、これからどうするの？」

「とりあえず、車に健吾を運びましょう、そして、優のマンションに行つていいかしら、私の家に帰つて、親が居ると、面倒だし」

凛が優に聞く。

「うん、分かった」

そして、優達は、健吾を車に乗せ、優のマンションに向かった

「一体何があつたんだろう……」

優が健吾の手を握り締め、呟いた。

「それは、健吾に聞いてみないと……」

その頃、ワール達は、着々と準備をしていた。

「お前で最後だな」

「はい！」

ジーザスは、ヘルメット、防弾チョッキ、ハンドガン、自動小銃などで武装した仲間を次々と、幻界の健吾達の通っている高校の校庭に送りここんでいた。

「どうせだ、お前も連れてこう」

ジーザスの隣には、手足を縛られ、猿ぐつわをされた、つかさの姿があつた。

「さすがに死んだよなーあいつ……」

「うーん、ううーうう」

「何だ？」

猿ぐつわを外す、ジーザス。

「野田君は、死んでないーきつと、死んでないよ」

泣きながら、ジーザスに言う、つかさ。

「アイツが生きていると、信じるのか、中々友達思いの奴だ……まあ、そうだったら、そうだったで別にいいさ、コツチは、そんな時の為にも色々、用意してあるからな」

煙草をふかしながら、言うジーザス。

「さて、この世界は、どれだけ、俺達に抗うか、見せて貰おうじゃないか」

そうして、つかさとジーザスも幻界へ向かった。

続く

第103話 幻界は、銃声が轟いた（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第103話 幻界は、銃声が轟いた

はあっ！」

健吾は、優のマンションで目が覚めた。

「おう、目が覚めたか健吾」

「健吾君大丈夫？」

優が、健吾の肩に手を置き聞く。

「ここは、どこですか？、今は、何時ですか？」

「落ち着きなさい、健吾、ここは、優のマンションで、今は、夜の11時を回った位よ、それより何があったか、説明してちょうだい！」

凜が健吾に言う。

「じつは……」

健吾がみんなに説明しようとした瞬間、幻界に歪みの力が急速に流れ込んで行くのが分かった。

「まっ、まずい、始まった!？」

健吾はすぐ、今日起こった事を優達に説明した。

「じゃあ、この歪みの力の流れは、ワールの奴らが、ヤマタノオロチを」

夢夢が健吾に聞く。

「はい、恐らく、もう、ヤマタノオロチを復活させる為に、勾玉に歪みの力を流しこんでいるんだと思います。」

「でも、問題は、雪乃さんが人質に取られていることね」

優が腕を組み言った。

「ここで考えてったて、時間かを食うだけよ、取りあえず、幻界に

向かいましたよ！」

凜が言った。

「そうですね、奴らは、恐らく学校に居ます」

「学校の近くのコンビニでおちあいましょう」

「ああ」

「うん」

「分かりました」

そして、健吾達5人は、幻界の学校の近くのコンビニに向かった。

幻界の学校の近くのコンビニの前では、光の粒が集まって、健吾達5人の姿になった。

「さて、これから、どうするかだな……」

「そうね、まず、つかさちゃんをどうやって助け出すのかと、敵の戦力が知りたいから、そっと学校に近づいて——」

「みんな！離れて！！」

健吾が大声を上げる

「えっ！？」

「ダダダダダタタタ！！」

学校の周りを見張っていた、一人の武装した男に見つかり、自動小銃で狙われる5人。

「はっ！」

健吾は、手に力を込め、刀を出し、その武装した男に向かって走って行く。

健吾は、弾を避けたり、刀で弾いたりして、男に近づき、その男の脇腹を蹴り飛ばし、男を気絶させた。

「やったわね、健吾！」

「こいつらが敵が、凄い装備だな、まるで特殊部隊だ」
拓也が、男を見て言った。

「……………」

健吾は、倒した、ワールの男をじっと見ている。

「みんな、ここを離れましょう、きつとすぐの奴らが、来ます！、それに、僕に良い作戦を考えつきました」

健吾はその気絶した男を抱えて、健吾達は、住宅地の方へ姿を一
旦隠す事にした。

「リーダー、A地点を偵察していた、一人との通信が途絶えました」

「すぐ、そこにチームを派遣しろ」

「はっ」

「ふふ、やっぱり、そう簡単には、行かないか？ この世界は。さて、俺らが勝つか、世界が勝つか……………」

やさかにのまがたま
八尺瓊勾玉を見ながら、言うジーザス。

続く

第104話 死亡フラグは、折ろう（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第104話 死亡フラグは、折ろう

「リーダー」

ワールの男がジーザスな話しかけた。

「何だ？」

「A地点に向かったチームですが、何も見つけれなかったと、報告がありました」

「分かった、下がっていいぞ」

「はっ」

ジーザスは、校庭や学校の周辺に部下を配置し、校舎を背にして、陣を取っていた、ジーザスの部下は、ヘルメット、防弾チョッキ、ハンドガン、自動小銃などで武装している。

ジーザスの近くは、得に警戒が強く、つかさも、手足を縛られて、その近くに居た。

そして、その近くにある、武装した、男が近くに歩いてきた。

「おい！ 止まれ、お前。この、ガキに何のようだ？」

歩いて来た男を、ジーザスの近くに居た部下が止める。

「何のよう？ そんなの決まっているじゃないですか、それは……助けに来たに！」

「なっ！？」

「ドッカ！ ドッカ！ ドッカ！ ドッカ！ ドッカ！」

「ぐあああ！」

歩いて来た、男は、つかさの周りに居た、武装した男達を蹴り飛ばし、つかさを抱きかかえ、その場から離れようとする。

「撃て！」

ワールの幹部らしき、男がそう言うが、ジーザスがそれを止めた。
「待って！」

「えっ、何故ですか?!」

「ガキは、もういい、十分使った、それよりも、隊を組み、襲撃に備えさせる」

ジーザスが落ち着いた、口調で言った。

「はい！」

つかさを抱きかかえた男は、武装した男達を避け、校門に向かった。

「あれ、何で撃つて来ないんだ？」

男が、そう、言った。

「そっ、その声は!？」

「ええ、僕です」

男が走りながら、ヘルメットを外すと、その男は、健吾だった、健吾は、先ほど、コンビ二で気絶させた、武装した男の、装備を着て、つかさを助ける為に、ワールの内部に潜り込んでいたのだ。

「のっ、野田君！」

つかさは、涙目になりながら、健吾にしがみついた。

そして、健吾が校門まで行き、つかさを降ろすと、そこには、拓也、凜、優、夢夢の四人が居た。

「健吾、上手くいったのね」

凜が、つかさを連れて、走って来た、健吾を見て言った。

「ええ、大丈夫です。そっちは、どうですか？」

「うん、学校周辺に居た、ワールのメンバーは、大した人数は、居なかったから全員倒して来たよ」

優が健吾に言った。

「それにしても、凄い、人数だな、軍事オタクが見たら、泣いて喜びそうだ」

拓也が校庭でこちらを見ながら、銃を構える、ワールのメンバーを見て言った。

「ええ、ざっと、見積もって、五百人は、居ます」

健吾が、答える。

「じゃあ、一人のノルマが、百人だな」

拓也がワールのメンバーを見渡しながら言う。

「つかさちゃん、あなたは、学校を離れてて！」

凜は、そう言いながら、つかさを校門の外へと追い出す。

「でっ、でも……」

戸惑うつかさ。

「雪乃さん、今は、相川さんの言う事を聞いて下さい」

健吾がつかさに、お願いする。

「よね……そうだよね、ボクが居たら、みんなの邪魔になっちゃうもんね……だけど、みんな約束して、必ず、帰って来てね!!」

「はい！」

「おう！」

「「うん！」」

「当たり前じゃない!!」

そして、つかさは、走って、学校から、離れて行った。

隊を組んでいた、武装した男達が、道を開け、煙草を啜えてジーザスが歩いて、先頭まで来た。

ジーザスと健吾達との距離は、約五十メートル程離れている。

「ほう、あの小僧、生きていたのか、面白い、さて、俺達がヤマタノオロチを復活させ、世界を滅ぼすのか、アイツラが俺達を倒して、世界を救うのか、さてどうなるかな」

ジーザスは、健吾達に聞こえるように、叫び始める。

「おい、お前ら、ここに居る、俺達ワールのメンバーは、約五百五十人！　どいつも、色々な戦場で戦ってきた、精鋭達だ！」

そして、健吾達に、ポケットから、緑色に怪しく光るあるモノを見せる、ジーザス。

「そして、これが、ヤマタノオロチを封印してある、勾玉だ、さっきよりも輝きが強くなっている、きっともうそろそろ、ヤマタノオロチは、復活するだろう、この状況で、お前達に世界が救えるか！？」
ジーザスが叫び健吾達に言う。

それを、聞いていた、健吾達。

「この光景見て、昔観た、戦争映画のセリフを思い出したわ」
凜が、みんなに言う。

「……どんな？」

「オホン、この戦いが終わったら、結婚しよう……コレって死亡フラグらしいけど、どうなのかしら、映画では、このセリフを言った主人公は、死んじゃったけど……健吾、アンタちょっと優に言うってみて」

「えっ！？　何で僕が？」

「だって此処って世界の歪みの力の中心じゃない！　だから、世界の中心で愛を叫ぶ的なノリで、それとも健吾は優に言うのが嫌なの？」

「嫌って訳じゃ無いですけど……」

「じゃあ、試してよ！」

「分かりました……」

健吾が一步踏み出しながら、恥ずかしそうに言った。

耳まで赤くなっている、健吾。

「いつ泉さん!!」

「えっ!?!」

「すーはー」

大きく深呼吸する健吾。

「こっ、この戦いが終わったら、けっ、結婚しよう!!」

健吾は、校庭いや、幻界に、響き渡るような声で叫んだ。

健吾と優の顔は、今までに無いくらい、顔が真っ赤になっている。

「えっと……うん、こちらこそよろしくお願いします!」

優は、お辞儀をしながら健吾に言った。

それを聞いてた、ジーザス。

「あははははは、面白い奴らだ、そのセリフは、死亡フラグ立ちまくりだろ!」

手を頭に当てて、笑うジーザス。

「じゃあ、俺が、司会進行をするぜ」

「力チャ」

拓也は、右腕に夢力を集め、黒い鎧を出し、構えた。

「じゃあ、私は、友人代表をするわ」

「スッ」

凜は、右手に薙刀を出し、構える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3178s/>

リアルドリーム

2011年10月25日21時02分発行